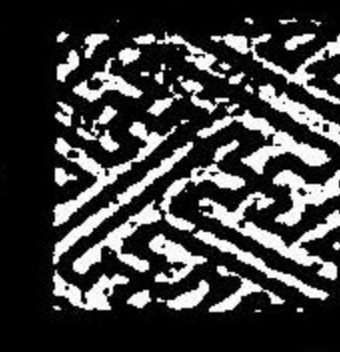
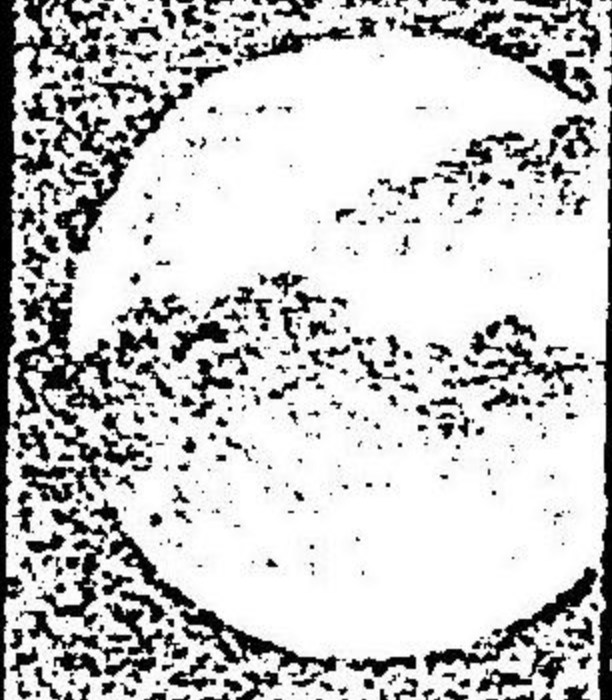
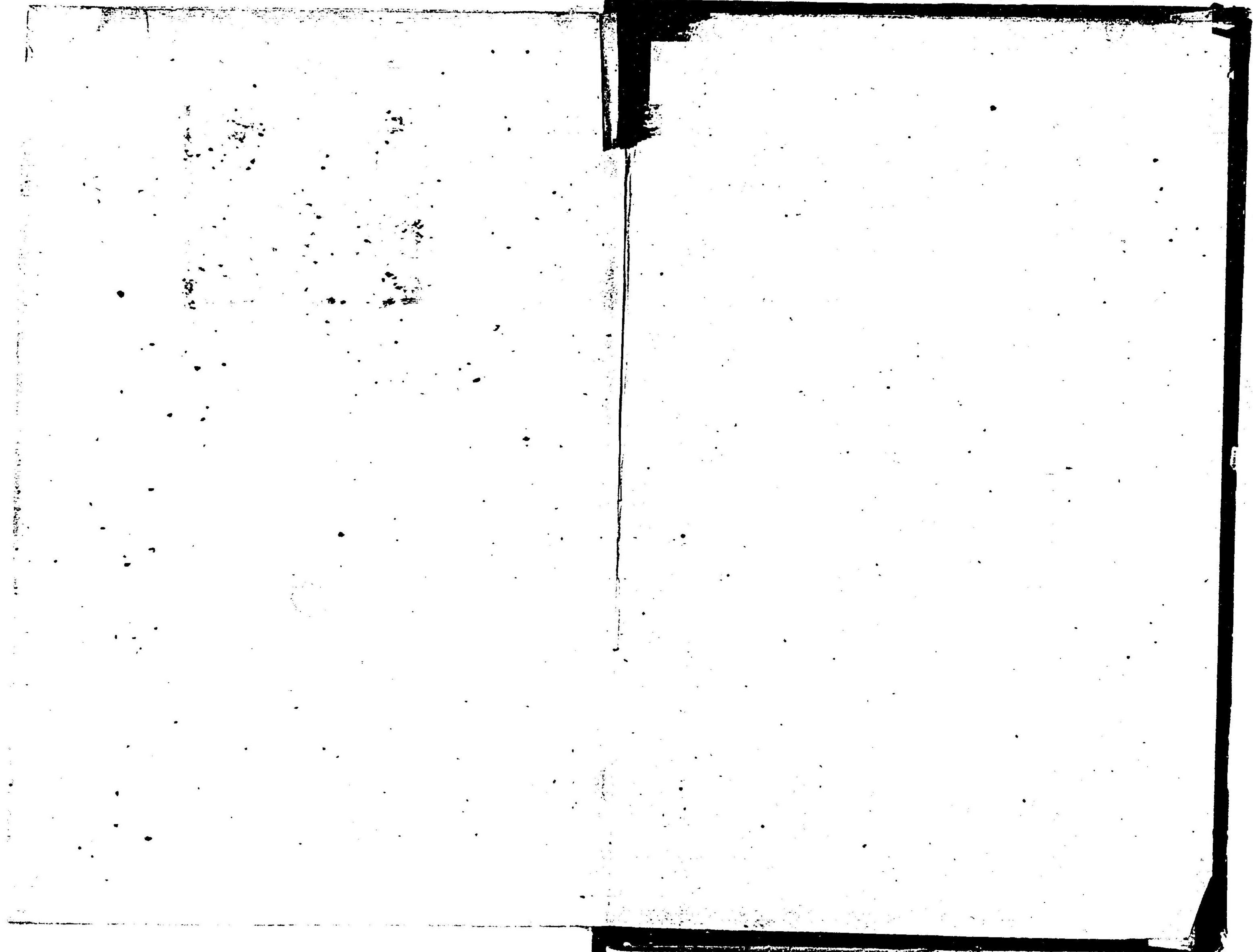
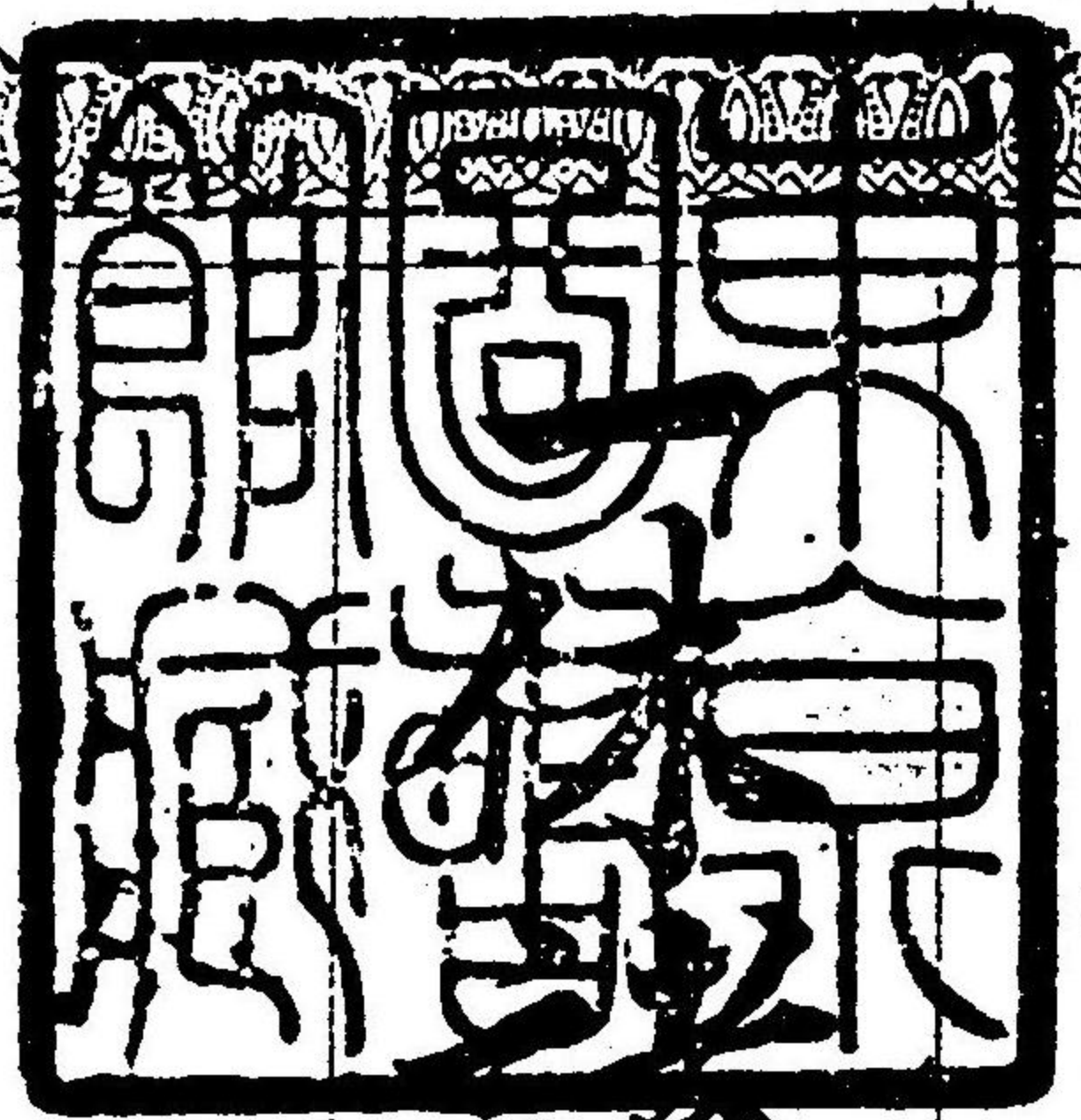


休諧國物諧全







東國物産圖繪

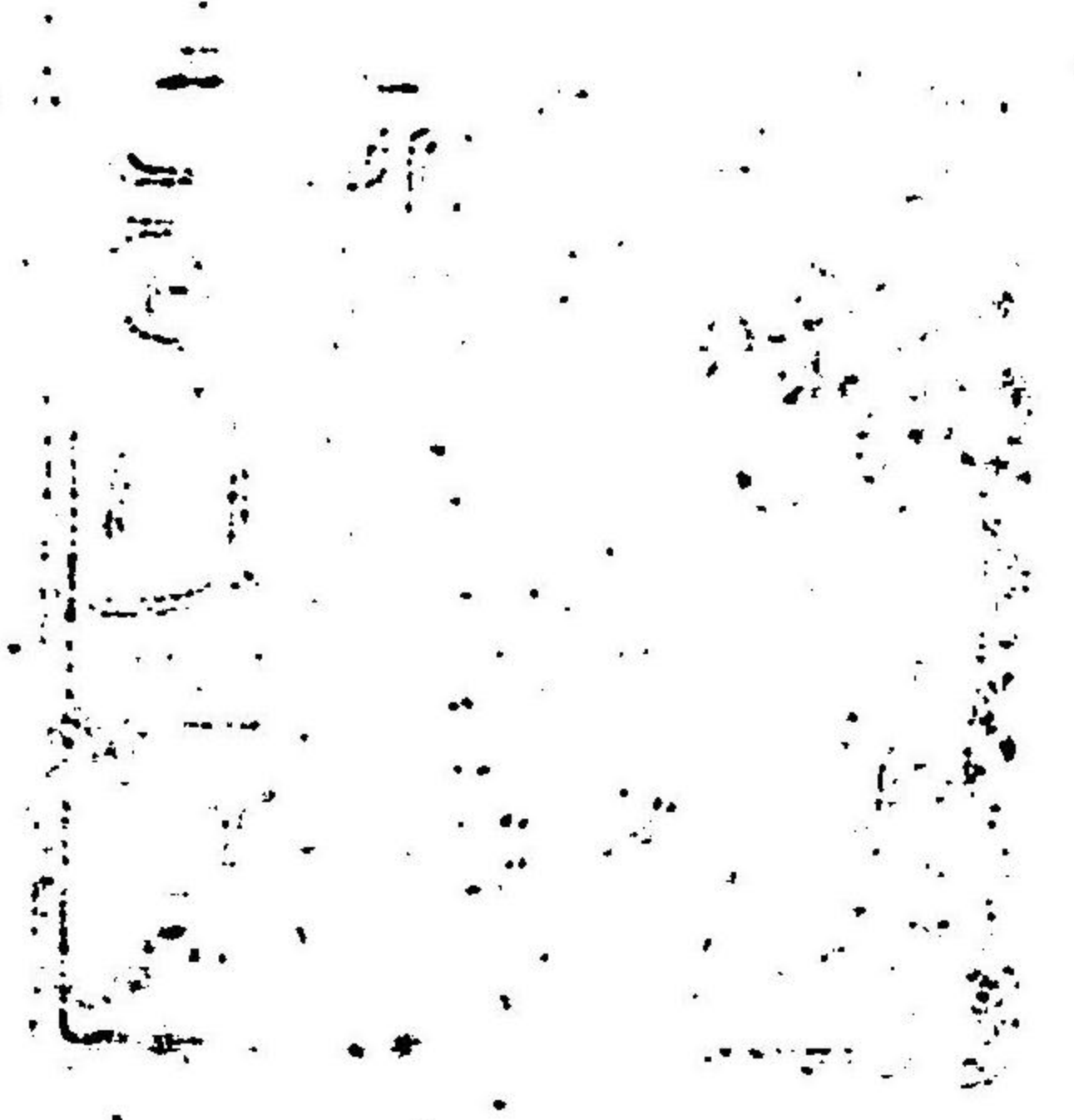
東京鶴聲社梓

明治十九年十一月一日内務省發行

平田止水居士輯

源 基定 補正

特 12
429



山居竊僧

聽松風

須臾臨濟
德山禪

一箇信山
三十年

心
安
工
友
了
畢
後

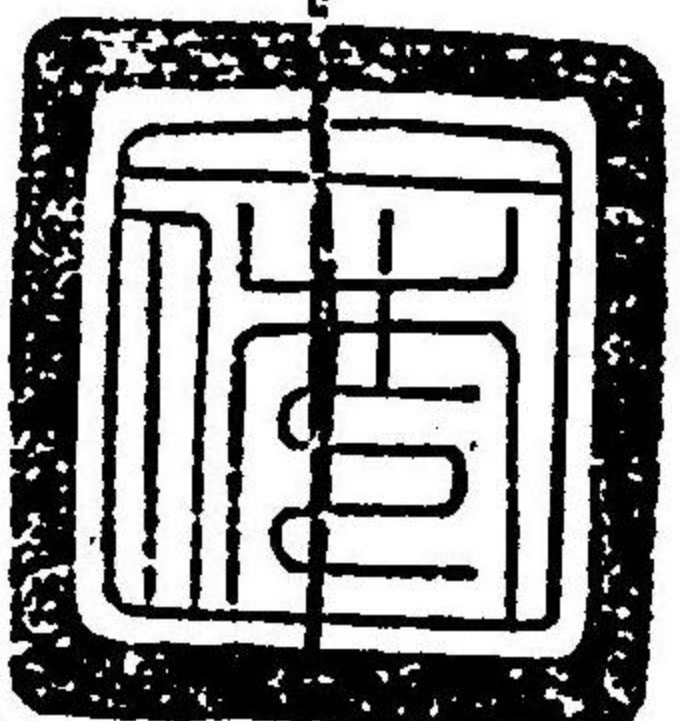
長
松
同
友
四
能
參
眠

庚子年七月

龍寶門署

東海純一休老

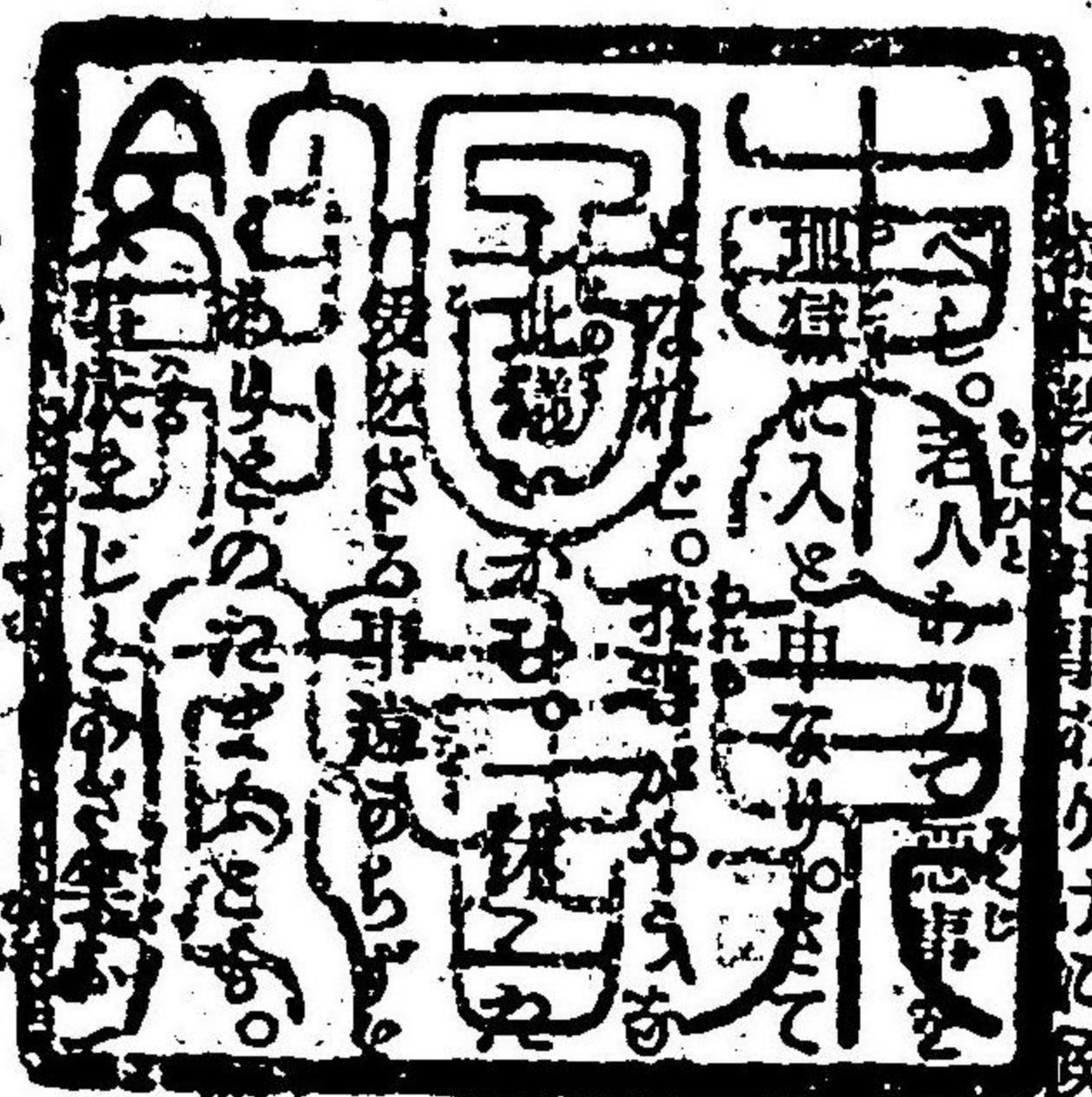
畫之詩一筆



それ一休和尚は後小松院の二の宮にてまゝませり世の人の耳も裂れる御歌にも後の小松の二葉と詠し玉ふも有けるそのや誠にいとも賢くましろく尊き高位をふみちらま大内とおどり出て十宗をた、一目ににらみつけ達広宗となり玉ひて九年面壁を盗人のあどの棒ちきり木と見立て御身は麻からほど共思しめさす浮世をひやうたんよりもあるく持なしよましまなるとときらひせ玉ひ御心は誠や竹を二つにわりたる如く路人の口碑よわれは舌の先の障とし侍ると仰られしといよく有かたかりける御幼年の頃より才智万人にすぐれさせたまひて諸國御雲水の間より諸人を導きたまひますく御一代濟度の御意のみに渡らせ玉と事の咄しのふるき文どもの多きを見るにつけ聞につけ拾ひ集めて諸國物語國會といなしけるとかや

止 水 敬 白

一休諸國物語圖會卷之一



○和尙若年わしやうじやうねんにはせしより才智ちさい素もと勝かちれよく人を導みちび玉たまふ或人問ていはく何なにに小僧しよそうそれ地獄ぢごく樂らくを申事まをすことありずて候まをすこと。しのしながら死し後ごあらでは證據しやうこなきよし承うけたまはる。さもありぬ。人ひとの入り申まをすことなり。また極樂ごくらく淨土じやうとと申まをすことは。是こゝより十萬億じゅうばんいっぴやく土とと申まをすことせば。途ちよの道みちを經へて參まゐる不達ふたつしやう者ものは極樂ごくらくの事ことはとておま。地ちがくへも行いかたかるべ。て。夫おんな地獄ぢごく遠とほきまわらず。眼め前まへの境界けいがい惡鬼あくおに外ほかになし。淨土じやうとといつ。のたまへば。この者もの申まをすことやう。いやく左様さやうも目めの前まへ又また地獄ぢごくなくら。はれて見みへね合あ点てんゆかず。小法師しよほうしの分ぶんとしては委くわしくめし玉。ぞ申まをすことける。一休いっしゆ腹はらとたて。扱あは其方そのかたは我われを若年じやくねんものとなをり給。ふかとして。願ねがて一休いっしゆ繩なはともちて後ごろへまはり。の者の首くびに引ひかけ思おもふさまよしめ付つ。な。んぢ是こゝはいかにと申まをすことなるゝとき。此こゝもの合あ點てんまて。尤なほこれ地獄ぢごくなり。其こゝどまた繩なはととら。給たまひて。汝なつかかくめるさまはわかん御給ごたまへば。淨土じやうとありとこたへ其こゝま合あ點てんして。さても。く小法師しよほうしは何なにのときやへも有あまじきやうにおもひあなをりし。幼稚おつちなれどもかくの。

おどく智慧ある事。わたくしならぬ事なりとぞかんじける

○一休十一歳のとき。師の房他行したまひける。留主の處へ。余所より餅一ツきたりければ。一休すこし割て。師匠のかきり給ふに取出して奉る。師もたうけ人にて。満月無片破闕は何地にもあるとのたまへば。一休のこころより智慧をかしくまします。直ち返答に。雲隱有是とてかの闕を出されける。此心は満月は丸くみちて。かけたる處なし。此餅も満月の如く。まん丸にてあるべきにかけたるは。いづれと問ひたまへば。雲隠隠れて。こゝに有とこたへたる也。師うち笑給ひて。ごつても小賢き小僧のなとて。彼餅とみなたび給ひけるとなり

○一休御諱と宗純と申せしが。別號と一休と名付たまひける。或人きたりて。一休と名付給ふ御心は。いかなる御心得にて侍るやと尋ねければ。よくこそたつねめされける。さりながら一休にふかき心もあらざれば。かたりて聞すへきをやうもなしとて。のく

有漏路より無漏路へかへる一休
あめふらばふれ風ふかばふけ

と遊しければ。彼ものさして扱もかもしろふなる御歌や。有漏無漏とつらなる事にて。おはしげると尋ねれば。そばなる御拂子とつて。彼者の顔をなでたまへば。いや何事を

かなざる。とあどろきたるばかり。よて何とも心得ずと申。一休か曰うの。何とも心得ぬところが無漏路なり。はつとあどろきたる處が有漏路なりと仰られければ。彼俗肝を冷して。有かたや即時に大事とさつかりけるとよろこびて。扱御歌の一やすこは心得申候。雨ふらふれ風吹ばふけと何なる御心にて侍りけるぞ。されはよわづらの道のことなれば。雨も風もいどふ事侍らずと仰られければ。扱も有がたき御歌のな。たうれながら。只今さつかり申せし。心を一首申てみんと申ければ。夫はきとくなる心ざまやとのたまへば。かのもよめるは

うろじむろじ一休ぞとさくときさは

十萬億土すんさきとしる

と仕りければ。一休さこしめし。善哉くとして尻餅ついてよろこび玉ひて。かゝる例しもろこしよも侍りし事ぞ。四休居士といふ人ありけるに。山谷といふ人その四休の心を聞ければ。四休わらひて。答ていわく

鹿 茶 淡 飯 飽 即 休
三 平 二 滿 過 即 休
補 破 達 寒 暖 即 休
不 貪 不 妬 老 即 休

と申さざければ。山谷のいはく。是安樂の法なり。うれしく少ときは不伐の家なり足る

事をするは極樂の國なりと感じてしたしく語りて。四休の心を得。三首につくりうたひ樂しみしとかや其一首に

富貴何時潤二體 守鏡奴與二抱官囚
大醫診二得 人間病一 安樂延年万事休

と有りしふよく似たり。一休の心をとひて今其方の歌よむ事よと感じたさへば。彼人申すやう一休 二字とたづねて。四休の四字をしる事。求めずして得と 幸と註したり。これ幸なりとよろこびけるが。あの四休のうち。三平二満といかなる事やらんと申ければ。其方の内方よとのたまへば。合点まいらず見にくさといふ心かとらへば。いやよにあらすふとごせのとなりとのたまへば。扱もめづらしきごりな。誠は三平は兩の頬と鼻二満は顔と願よ。さてもれもえろ事也さりながら。女をもよ聞せなば。一休さまをつめり申へしとわらひて歸りける。

○和尚幼稚きときより。常の人にはかはりたまひて。利根發明なりけるともや。師の坊をば養叟和尚と申ける。こびたる且那わりて。常なきたりて師の坊に參學をせし侍りては一休乃發明あるを感じ。拆々はたさむれと言て問答なをしけり。或ときるの且那皮袴を着て來りけるを一休門外よてちらと見て。内へはしり入へきに書付立られけるは

一此寺の内へりのたぐひかたくさんせいなり。若皮の物入るとまご其身にのならずばらわたるべし

と書付て置たり。かの且那これと見て。皮のたぐひにはらわたるならば。此寺の太鼓は何とし給ふぞと申ける。一休聞たまひ。さればとよ。夜盡三度づ、ばらわたる間。其方へも太鼓のはちとめて申さむ。皮のはかまよさらけるはきにとおきけられける。うの、ちかの且那養叟和尚と齋よよぶとて一休も御供ふと申し。あの返報せばやとたくみけるが。入口の門のまへに橋ある家なりければ。橋のつめよ高札をかたぶて太く書てたてける

此はしわたるとかたくさんせいなり
と書付ける。養叟和尚齋のじふんよしとて一休をゆしての人のかたへ御出あるに。橋の札を御覽じて。此のしわたらでは内へ入へべき道なし。一休いかにも有ければ。いや此はしわたるかとかなにて仕たれば。まん中を御渡あれとて。真中と通り内に入たまへばの者出合て。禁制の札と見ながら。いので橋とわたり給ふるとどがめければ。いや我は橋はわたらず真中をわたりけるぞと仰られければ。亭主も口とをぢけるが。何がな不審中さむとて又いやく凡沙門の形といつば隠居二昧の衣を着。罪障とんげの袈裟をかけてころ僧とは申べけれ。いめに小僧なりとて。俗衣出たち心得かたく候と申せを。一休幼ければも

歌一首とよみて答へらる

若てきたぞ本来空のくる衣

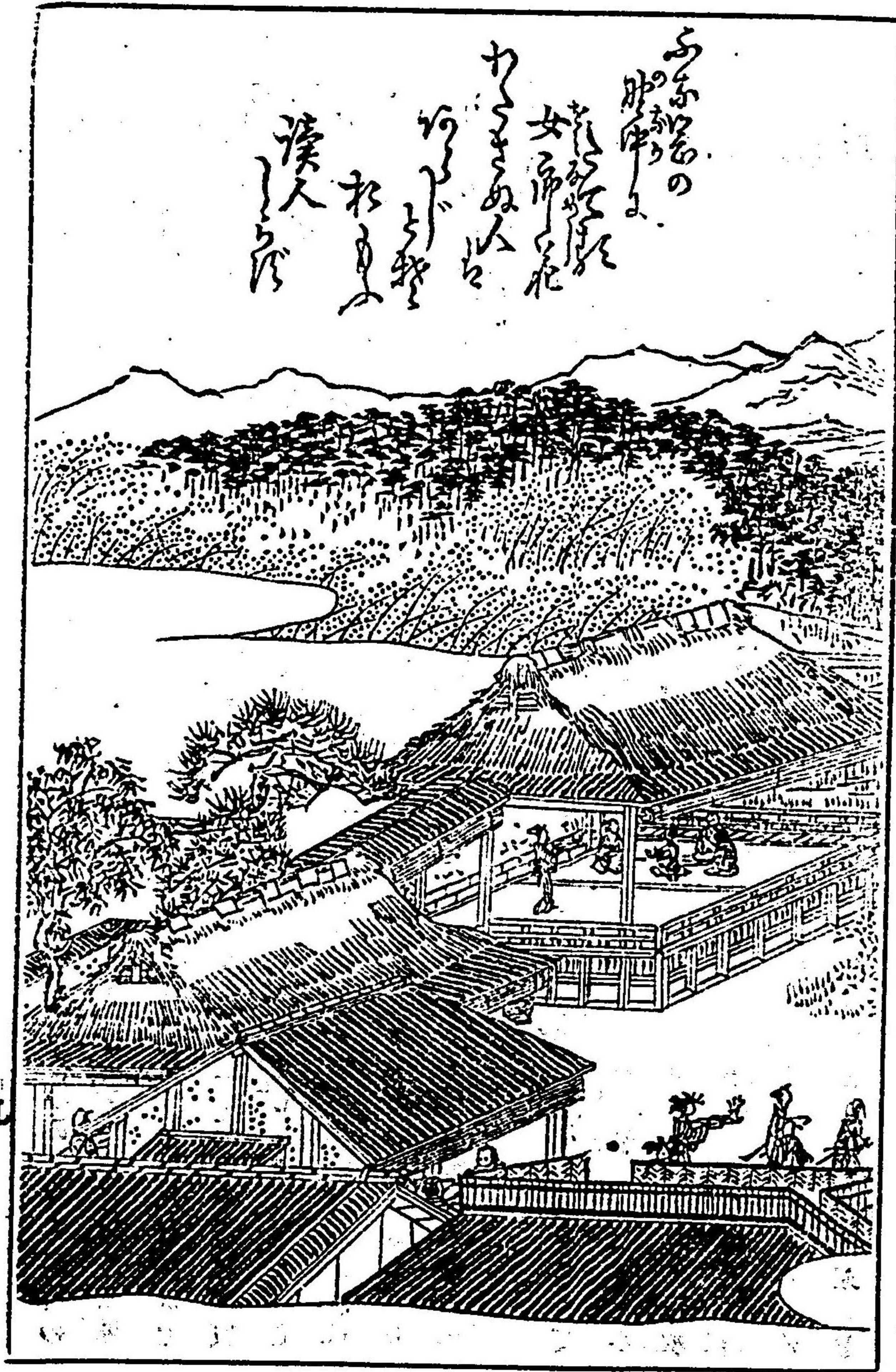
ろでながからで人こそしらね

とよみ玉へば旦那も養隻も手さうち。口をひいて塞ぎかねられけるとなり。切御齋を出しけるが今一度不審せばやとよみ。一休はわさど魚類の膳をさへけるめつらじくやをほけい。ひたもの喰ひ玉ふとぎに旦那のいへるは人しれぬ衣めきたる御僧のした、か魚とまゐることよとたわむれければ一休聞たまひて口は鎌倉海道なれば。貴さも行きいやしきもすぐとのたまへり。こらへかねか、る物もどはり候哉と刀とすらりとぬきけるを。一休そこしもどわかき。敵か味方かと問ふ。敵也といふしるらを通す事ならず、いや見かたなりといへば。其ま、けへんくとのたまひて。くせものやとほるとて。只今俄に關がそとりたるいといひ玉へば。旦那も和尚も此小僧の口よはかたれまじとて言葉なく。舌の根とふるひてやみぬ

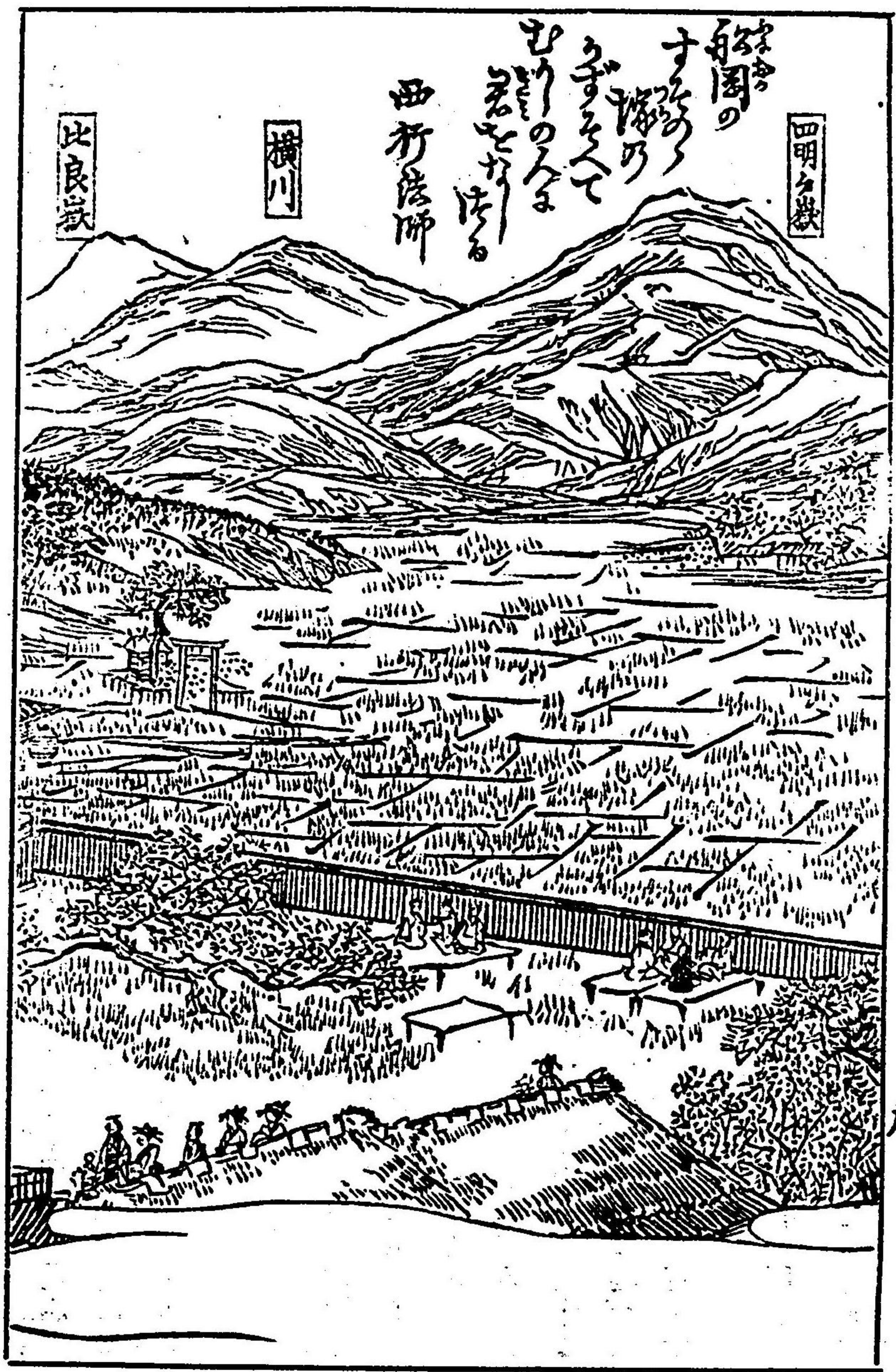
○十七歳の御とき引導し玉ふ。或とき下賀茂邊を通りたるふ折ふし。途中に死人あり一休たちより引導をさづけ玉ふとぎに。或人見て愚なり小僧。死人にひるつて何事をいふたりとも耳に入べきやいふとぬふ。一休答へていはく芭蕉無耳雷之音聞則自出す。此文の古

ろは夫はせをといふものは。耳もなく目もなければも芽と出さんとかふふとまきは。雷の音を耳て則芽をいだすとなり。斯のおどくの非情艸木のたぐひまでも。因縁加合のまどわりあり。いはんや人間にをいてをや。彼是もつて同事なると返答したまへばこのもの實もとおもひけん。一言の答へにも及ばず立さうけり

可笑記曰達广大師はあしの葉に乗り佛の道をかたる紫野の一休和尚は世の法議とをしらず興がるおどけをなして釋迦をしかり玉ふも助んための本心こ、に蜷川新左衛門親當といふ武士弓馬の道くらからず殊に佛道は祖師禪宗をまなびて座禪の床に入おしへの道をしり。かねて一休と問答なしければも終よいひ得す。秋の夜長きつれく、に友をあたらし酒興し賢大唐には五月五日櫛を酒に入て飲めば老せずといひて賞翫する由さもあらむ先身の年より若く見ゆるは此水の徳なりといふに同じ水鳥一座の中に三十ばかりにたらぬ男白髪まじりに生しはいかにと問へば口かしてき男酒とのまねば腰がふたへよなる筈なれどのたまへばこそ霜のみふれとへらす口のみまき盃中場へ紫野一休あん内しきたりて是はよき所へとおさへぬ盃三ツつ、けてはしさらば慮外としたひところを蜷川よき不審と一滴七十粒をもさんか捨る事いかん一休こたへて法界に手向く蜷川また法界がのむべしや一休また法界が飲まじきといふると答へしあつまりりれば



此の所の
 女に
 わさめ
 何れ
 漢人



此良哉
 横川
 西行法師
 此の所の
 四明夕景

しらずと閉口して大笑になり肴ふとかけたれども淨るり小歌もふるめるし今の問答の
 をかききにまのせ善悪五戒の講尺せひにどのぞみまればつた精進さかな音曲と無理
 に引たて上座になをし高座の火燧のやぐらを取り出し行燈つり上かうべをかたむけはじ
 まるを待に一休くわんくとしてとても興がる慰ながらぼさつは三十三身を現じて其
 機にしたのひためよ法を解せたまふ普賢菩薩は江口の遊女と變じて凡夫にちぎりとこ
 め十羅刹女の太鼓女郎となりて貴聖人にまみれたまふ愚僧はうの菩薩にはあらざれ
 どもしばしはろのながれの末を汲て川抑花は紅の色衣はなしすみの衣の袖をのきよせ
 まづ鼻をのみせきばらひニツ三ツ、四弘誓願の文と唱ていぎをたゞし白紙巻て取あへ
 ずさへげ奉る諷誦と名付讀上る

夫つらくおもんみれを分段同居の風俗は陰陽をもつてし有爲の掟は夫婦をもつて
 義理とす鳥よ比翼のかたらひあり木に連理のちぎりありいはんや人倫におゐるとや
 ひろかにおもへば容色たをやかにして梨花の露をなひがとく心中あらはにして行水
 の物よ随ふがとく天生の美麗世にたぐひなき西施が容貌貴妃が顔色一トたび笑ば百
 の媚わざやかよ見もの思ひを動かし聞人心をくださぬらむ春の朝にはうめさくらの
 下陰にたゝすみて三味線をひかし秋の夕を蘭菊のまがさに立もとどりてなげぶしを

酔心翠張紅閨の中に枕をならべしとめ語紅粉翠黛のかはばせ二世のちぎりと結
 ぶとらへどもかぎりあるの浮世のならひし生者必滅會者定離のおきてなれを一人も
 とまるとのなし誠にこしかたを思へばいたづらなくらし空しく曙すあしくやしひ
 かな悲しい哉今このとさによき苗と種まれば何の春かほだいの花をながめん早く無
 明の酒の酔狂をさまたさんにはしかじと先一座の小歌としづめてのぢむとこの講談
 なりまことにこれ希代の發菩提心かけていふよたらすこの善根にこたへて現世には長
 生と金銀米錢澤山に當來には極樂に往生まくだいあしてあそばんのみにそ酒宴講
 中敬白

次に經文とひらきて頂き一課子わけて大悲經第三下曰く佛阿難よ告てのたまはく若衆
 生わつて涅槃をねのひ求めきといへ共しのも佛のところにあつてもろくの善根と
 種つれを我説とてころのこの人ならず涅槃と得てんといふ
 ○土京の糸や由右衛門といふ者あり。内々一休和尚の答話よまこと。古今無雙のよし承はり。
 いつぞは紫野へまはり何よてもめづらしき事とらけたまはらん。左なくば此方へ還よ申
 入べきと。かねく思ふ折ふし。和尚且那のたより歸りたまふに。途中にて行合。さてく
 一段の處にて御目にかよりいものかき。序ながら明日少し志す日にさしあたりし。御坊の

まへ御齋と進じ度い。兼々御寺へ伺公いたし申べきとぞんじい處。幸是にて御めにかゝり
 い。必々と申せば。和尚心得申しなりながら。宿所は心かんとどひたまふとき。此入宿の
 室町通とんじよ其處なりといひておかれぬ。一休心得さて翌日早天よりこしらへ。彼もの
 宿を尋ね行玉ふに此者もそこし心あるものよて。店よりいさき鉈をつりて置けり。小き
 なたを釣たるは。こなたといえん事ありと判し。頓てうちに入たまふが。また座敷の口よ
 犬のかじを敷たり。和尚さしきと通らるるときよ。亭主出合さて。今日は折ふし路大あ
 しく。御太義の御事なり。御足よおれいぬん洗足するらせんと申。一休さや。只今もは
 を越へてまゆりいゆゑ。そこしも苦しからずと仰らるゝに。亭主扱ころ早一をさくわされ
 たりと思ひさて。御膳をこしらへ出す和尚ふたを取て見たまへば。何れにも小糠を一は
 入たり。一休さあらぬ体にてゐたまふ處へ。亭主座敷へ出れば。一休さて。今日の御志
 は。三七日にていかと仰らるゝに。亭主いよく感心し。やがて和尚座を立玉のんとする
 とき。亭主のなほも。ろと引んとて。錢百文をとり出し。これは今日の布施にまゐらす
 るなり。是へよらずしを居ながら。御請われと申に。一休きもあへず心得申し。是まへに
 てうけ申へし。さひと、投ずにこへ賜りいへと申さるれば。亭主いよく感心。扱
 御坊さまは。さ。およびたるよりは答話僧よてまします。凡人はしむらく思案して申出す

よ。いまだ舌も引入さるうち。早くも斯く仰らるゝ。古今まれなる御坊さまやとかんじ
 ける

○和尚さる川邊を通り玉ふに女のはだるに成て居けると見たまひ。陰門とめざして三度禮
 拜してすぎたまふ。折ふしありあふ人々是と見て。さてもあの僧は狂氣か。出家の身とし。
 女のはだかになりたると見て。三度ふし拜みておるゝは。いかなる事やらん。いかさま
 にも狂氣なるの。さもなくばのゝる事はし玉ふまじ。めづらし事なり。さ近づきて子
 細をたづねん。げにもつともありとて我もくさあをさしたいやがて追付そでと引。御坊
 た。今女のはだへと見て。禮拜し玉ふの。いかなる因縁やらん。聞まはしく候。但し佛道修
 行よか。る事やましますの。さうに。とせめつけて問ければ。一休さむの事にもおよひ
 玉はず斯いひきて。過玉ふ

女をを法の御くらといふぞ實

しやかも達摩もひよいと生

といひすて。こそ通りたまふ。いかなる坊主やらんとふしぎなすよ。しる人ありて。あれ
 ころ一休なりといひし人あり。さてこそ彼僧ならではのやうのといふべし人ありとも思
 へず。殊勝やな。世の中の坊主ならば。女の肌と見たらんに。必ちよげにねぢかへりく目

もつたてで行くやらんかかく禮拜なして通り玉へこそ有かたけれ。實も女の胎内より貴人高位も出玉ひ諸宗の高僧たちも出らるゝぞのまど人みな尤どめんじける

初今晚は先夜酒宴談の次をとき申なり講談興起の義は諷誦文にも聞へたとふり酒宴講中逆修現常安樂のため一つは笑のたねとしてつとむる所の説法講談で侍るある經もし園の中林の中もしは白衣の家是中皆應起塔供養とどかれてけやうなる在家俗締の白衣の中よても一偈にても演説きるときいたとへはけがらはしき所も則三世の諸佛來迎影現の道場といふ物なれと信心と決定して聽聞あるべきとが肝要よて侍る次は愚僧義をんふもしらする瓢金坊主ものしりがはに子細らしきと必きやうまんの心を起し玉ふが大悪人じやうればあせよと不審あらん涅槃經に依法不依人と説てその人にはよらず能所の法によれと教へ玉ひ成實論には經を引て我意にあらすとも各正理に順ざるをば連教とすべしともあり狼の衣と着たりとも法の道を説よら所あらはうやまひつしんで聞取べしとも釋したとへば未曾有經像法決疑父母恩重經等と佛説にあらざといへどもいかよしても其理佛の御心に叶がもるに諸の祖師あれを用ひて證文とするとく教等ときものも教化し説法せんときは佛も我も敬ふやうに沙門を供養せよとのへ玉ひぬれば信心の手前からは慮外ながら某を末世の佛じやとも思召がよく侍る初た、今披

經の經文を訓讀のとく大悲經第三の卷なり物して經と講するには來意釋名入文判釋なきゆふと御ざあれども淺學のそれがしなれば万端さしかるてたゞ經文の表よつて読すべし今の文の意は釋迦如來阿難尊者に對して仰らるゝやふは末世の衆生等下根下劣にして直に涅槃にいたるべしとの文でおさるゝ佛のみもといふは釋迦はすでに入滅あり後佛の彌勒はときいまだいたらず何くよとして佛の所とさたひべきとねもへば文字はこれ法身の氣命といひて遠からすこの金句の説法を一たびき、てながくわかれぬ阿難尊者如來滅後に獅子の座よのぼり一代の法藏を結集し一千の阿羅漢これを具多羅葉にしるすすこしも佛説にたがそすこのとき大衆ふたつうたがひをなして如來かさねて世に出玉へるやまた阿難今爰で佛と成玉ふかと偈ともつて讀きたるどころの經は義をさばめ理を詮め、上々度し物を化す中にも大悲經別てしゆしやう千万なり此等の文義と談する此處が則三乘開會の即世道場まつたく諸佛來現の所といふものなり實より涅槃をば求めざれども座輿にもかぞけにも名利ももうそにも佛詰論談ときく心が其まゝ善根と種るといふものなれば佛説にいつはりなく未來成佛は歴然の同理なりさて迦修は七分の善徳まつたく得て現世安穩のあしたには榮花のはるようたひ命期臨終の夕に世法性の月を詠せん事はうたがひもなき經論の旨にておさるはばよ頼もしくねも

ひたまひてねがはくは眞實に涅槃をもとの玉ひて一遍のなむのみだなむ法花ととなへ玉とて往生成佛は決定でおぼるまづまれで經の句はさらりと聞へました、ア、ねむけが出たそふな

○下立賣堀川邊に道意を申ものあり。あるとき一休と齊に申入よろづはなし終て道意申されけるは。和尙さま某を娘一人もちて候が。さんぬる春の頃隣町へ繰ふ付申候がや、もすれば姑とからのひて歸り候。親の身に候へむなんぼらめいはいくまうんじ。色々異見申てはるへし候と度々におよび候。和尙さま、智者よてましませば。おもしるき囚縁はなし候ハヤ。とて御物語をきかせたまへかし。よく覺おき娘の諫言のため申聞せなばすこしの聞入とも侍らん。和尙さま、玉ひ。それがし一とせ修行のみぎり關東にての事なりしよ。是の姑女もあしくわたる女なるが。たちまち其むくひ歴然なりし事あらくかたり申さん。下野にての事なりしが。しうとめ久しく病みてあやみけるを。其子深くなげきて醫師をよび療治しけれども。さらに睡なく日を送りけるが。あるときしや申やう此病よそぶたのきもと煮てわたへせば。忽ち本腹ゆるべしとふふ。さらばとてぶたのきもと求め是をよくく表て母にす、めよとて。妻よわたしてその身の他行しける。この妻つねく姑とにくみ老病の事なればせんなき薬ぐひなりと思ひける。折節その孫嫁。子をうみければ其ぬきと

にとりてよく煮て姑に勧めぶたの肝はかくしておのが薬ぐひにぞなしたりける程あく赤いろなる蛇。のよめの口へ飛入ける。尾四五寸は口より外へ残りけりろの嫁なきさるけびもだへぬる事いふをかりなし。まことに奇代ふしぎの事なれば。聞傳へ見物の人をばくあつまりけるが。老たる人の見るときも。尾をうぶのさす若きもの、見けるときは此蛇尾と右左り。上下へうがかし女の顔をたつきけるこそれそろしけれ。ある人釘ぬきと以て蛇をばさみ引ぬかんとしけれども。尾のかたきと黒がねの如くにて。奥へは入といへどもすこしも口へ出ざりげりかくのとく悩む事三日にしてつねにはむなしく成にけり。これといふもつねく姑にあしくあたりしむくひなり。姑の口へ入れまじき胎衣をす、め我口へくふまじきぶたのきもとぬすみくひける惡逆よよつてのくのとく口へはいるまじき蛇の飛入ける事天罰なり。かたちに影のしたかふとくおろろしき事なりけり。かたりたまへば夫婦どもに手をうつて。あら恐ろしやとかんじける。道意また申けるを和尙さまそれがし此おろめたらしき枕屏風をこしらへ申候。おれはむすめの方へれくり申心得よて候何にても一筆あそばし下されと申すに一休やすき事なりとて筆とりよせ

萬一人事一口むやく物而壁に耳岩に口姑夫唯主れやとあふぐのみ
我男けにたいせつおおもひなば

なごしうとめの見にくかるべき

ひねの火のもたつときの有ならば

こゝろの水をせきどめてけせ

とかやうに書てたびけり此屏風今に傳り侍るとぞ

さて前夜の講談申せし文中に涅槃といふを天竺の詞ありこゝに滅度と翻して空寂の理に歸する旨なれどもたゞ成佛至極の處と覺へたまへされ經の中の要は然も佛の所よれりて善根を種つればと説種るといふ文字が法壁にかなふ聞所にて侍れば耳とかたむけて講談と聞たまふべし此種の字はうゆるともたねとも草とも讀てたさへば草木のたねの如く瓜をうゆれば瓜を荷豆を取るも同じ事善種とまけつばよき果をとるを因果ともいへり世間は仕合のよいとは果報といひよろしからざるを因果といふは誤りなり因果も果報もみなむくひといふ心にて文字に善惡の差別のなければもやうなる誤りは世におまたにて侍る弘明集も綴芥の惡を劫と歴ともはるびす毫釐の善は世々も滅せずとて微塵髪すぢはどの因も果ならずといふとなければありとも惡事のたねをこぼすべからせ生べきは治定にて侍るされば法苑珠林に經を引いていはく愚癡の人因果をしらずみだりよ邪見と起し三寶四諦もなく禍もあく福もなく善もなく惡もあく衆生の業因も

なく惡果も無どのたるものは決定して阿鼻地獄に落べしといふ文にておざるはどお何れもたしなみ玉ひて因果撥無して佛法といふものはないものじやなご、垣やぶらある事はかまへていはしやり升なされ共今どきの人多くひがみて地獄も極樂もありどは聞て見てくるものなしたまゝ見るはあやつりに紫の雲と空より糸にて釣下し宿の光をはなつ佛弘誓の舟に二十五の菩薩一度に尺八をふき三味線をひかせてつかふは上手にてまたおかし鬼といふも虎の皮のふんどししたるが濃たる角をふりすくわいらいしの弄ひがれるろしきも乃よいかげんなる事を佛もたくまれて子どもたらしのたはひれと仕出し玉ひけるよといふ者もありいやく何のしの法師は地獄に行て有し鼻の苦痛を見たてまつりて歸り唐土の僧も奈落のくるしみをおもひ出して日に三度血のなみだ流すとも書こしたるばといへばうそつきの末弟どもがいふ事なれば何を證據にすべしなごあさける人こそ淺ましけれ同し論に曰無にねらて因果を問する者はたどひ萬牛挽ども永劫地獄の門と出じと書て是とかなしみ玉ひてこり三世の諸佛も十方乃如來も世々番々に出世し玉ひ此まをひとやめさせ一切衆生我おとく一佛來道ならしめんと五十年のあひだ聲をのらして説法教化たまひける例に心得るハ惡の中の極惡なれをまごよ那羅延力の牛ののすも惡趣を引出する事はかたがるべし此等の人のねつる所の

地ぶくへくげんとうくるよ間なきがゆるよ無間地獄と名作る其跡相往 生要集因果經
等につぶさよあれば只今申事よおよびませぬ何といたましひ事では侍らぬる愚僧なぞ
はまづらやでおざります愛よ一ツのふしどがこれあり自問自答して聞せ申さんさうさ
がら御退屈でおざらふ一ぶく致さふ

○一休人と殺すもの證據をひき。得道をせたまふ事ありて、に早川治郎夫太と申もの和
尙のもとへ行申さるゝを。それ人をころすに其理もつともあらは千萬人と殺ともくるし
ゆるまじ又殺まじき其理なくば一人なりとて惡逆無道なるべしと申けるとき和尙仰られ
けるをそれ殺生はもろくの罪の根本なり。たどひ生る物にといはのみ風にてもころ
す事あるべからず。同はたマ殺ざるにはしかじ。男ごたへ申や。少もくるしかるまじ。或
は主命と申。又ははうはひとにもたのまれぬれば。是非なく殺事ありかくあるときは其た
のひたるものところがならん我をまつたくどがひきまじと利口氣に自慢して申和尙舌も
引入させずして。汝の柳に雪つもりたり枝れもげに見へ候はらひてたびてんやと仰ら
れける心得申候とて柳陰よ立より。ふりおとまければ。かしら袖のうへよ雪ちりの、りし
をうちはらふとき。和尙の曰汝いふなれば雪をひらひ玉ふぞ。某がたのみ申せを某にころ
ちりあるべき事なるにやと仰らるれば。此人はたと行當り。それよりしてのさねて殺生

とやめけるとかや。是に依てれもへばいゝに人をあろす罪科なりといふども朝敵とほろ
ぼし惡逆のものをたいぢせん事は。いく千萬人なりとも苦老あるまじ。一人半童なりとも
殺すべき道理なくを其實もかるべし。されば人を殺にれたては。もつとも害すべき道理
なれども。さひらひの余にぞまじこのみてあるべき事いかやあらん。然ればころすべし道理
の内にもたさるまじき道理あるべしよくこころうべし

○愛に木屋平次郎と申ものきそめて長ちいさきいろくろき男なり。世間の人々おれとあそ
けり笑ふ事よの常ならずまして他所へ用事をと、のへに行とめれば指をさし子をもあま
た付したふて道をも安からしめねばおのすから歩をなすとならずあるとき少し心ざす事
ありて。一休和尙と請じ。我身の不具をつぶさにはなし。今更まれをくわかなしむ。一休仰
らるゝは生質たる身とちいさきとて何とすべき左やうの事とかなしむものにあらず其子
細は金をちいさきものなれども。天下のたのらとなる。針はちいさけれども衣服とぬふ責
となる墨はくろけれども。佛經祖錄聖經賢傳の書としるして。天道の助となる。漆をく
ろけれども。諸道具を助たり。山は高しといへども貴のら老。樹あるを以て尊しとす。霜雪
は白けれども萬民これをいためりたどひ肥ふとりたる人がいのはを瘦細りたくねがひた
りともかきふまじしめるを強てやせ細らんとくひものをとめかたちをちやめたらばと

て必氣血をへらし病を生し身命もやぶるべし又瘦はこりたる人何程こそ太りたしとね
 がふともかなふまじ肥太りたらんと飲食物たくさんよして。寐伸居のびをせば。必氣血を
 みだらしの食傷して。うらしげく牛の糞のかさねくなるを寢所にも包おき後にと。俊寛
 僧都の鬼界がしまに住し、ありさまふなりなば。命もすすふあやふかるべし。されば藥師
 如來の出せ。著婆へんじやくの再來して藥をあたへ療治する共。いかでその驢を得んしの
 らば天の黑白脊の長短も又のくのとし。爰におもしるき咄あり。さる所に才かく利のつ
 人あり。此男いかにも脊がらんちくりんよて我身ながらもうらめしく。悔のなしむ事せつ
 なり。余りむねんさにつくくと思案にけるよ。我身こりのくありとも是非子どもにおお
 ての。脊の高き子と持べし。さあらばまづ女房をむかへんよ好むりみめめたちには少も望
 なし。只脊の高き女をと尋るに其脊六尺余にて。無雙の悪女ありいそぎ。これをむのへと
 り。夜晝のせぎけるはほに。程なく。此女懐妊して九月とも過て。程なく産月ひもとくよ
 ろまび取あげて見れば娘なり。あつはれ男子よてあれかしと願ふ處に女なり。捨べきにも
 あらず育てけり。かくて此度は是非小男とまふけんく。とかせぐ程よ。うむ程にくつ。か
 けさまに女子をかり五人までうめり。彼男めら腹立や無念や。いかりおめきければ。甲
 斐もなく。つづさうの捨ふのとをやけきも流石さうもならず。養育するはほに。成長する。

にしたがひ何れも母親に似て色黒く脊高く鼻筋ひしげはうたへうつじまにころぶよ。い
 ツの徳めは鼻の用心いらす。まろ細く、びさき驚なほの如死て。六尺ゆたかの女なり。
 むことり嫁入ならざれを。何とも。てあつかひける有さまなり。何事もかやうの事と聞か
 らよ諸事悔かなしむ事あらじと。言葉に花を咲せて語りてこそ歸りけり

さて自問自答のつらさを御となし申さふ縁と無縁の三ツの品わり問如來は是實に一
 い衆生の父母よて大慈大悲のまねくかふて更に倦ときなく影の身にそふ如く護念し玉
 ふちらば其佛の力よて衆生とことごとく悪をやめ善を修すべさはづなり何を日夜も悪
 業とつくる事いかんかふ申難問はなふてかなぬ所でおさる此答へは尤佛の大慈の平
 等にして差別なく一味の雨の如く日月の光のこく何方にわけへだてはなけれども受る
 處の衆生が同からず縁と無縁との相違ある事は尺加如來含衛國におゐて説法あそをし
 たるにて合点が参りそれはいかなる事と申に佛この舍衛國の祇樹精舍ふ廿五年おはし
 まして説法なされたるとき殊勝のあまりよ猿鳥きつね狸のわらゆるものまで如來の説
 法をきいて頭とらなだれしとくおはれば皆おのづから住所へのへりししかるに此國に
 住む人數九億ある中に三億の衆生は目の前よ尺加如來を拜み奉り音聲を聞て得道し又
 三億の衆生はたゞ佛の此國にて説法し玉ふと斗き、又三億の衆生の佛といふ名もしら



ず是を見玉へ同國に住み同じときよあひなら縁の有と無とは此三ツの品かはりあり
 佛の手前よりは小しもへだてなければも爰は力よおよばぬ所あり又醫者の藥ももるよ
 何とぞして人の病を本腹させたく也がげんに心をつくして與ふといへをも飲ねば醫者
 の咎にあららず全くかくのとく佛の八万四千の煩悩の病をいやす大醫王なりとのたご
 へ是にてよくさこへ侍るさすれば初の難問はすみました此上は随分まよひをしりぞく
 所の彌陀念佛や法華題目などの良藥と飲て安樂世界寂光淨土に往生成佛をぞげたまふ
 べきの一大事にて侍るも一ツ因といひ果といふを人のうたがひをなす事がこれ有はど
 に次手に講釋して聞せませう先しばらく此間に世話方講中御らうろくを獻せられませ
 ○さる人一休の草庵へ尋行。和尙にわひ奉りて申やう我等文盲ふついかもの候へば耳が
 たき事は聞てもさかざるがごとく何にてもおもころさ事候はマ御はなしたまわれと申とき
 に和尙されば唐土に虎きつねを追つめすでに喰はんとするに此狐の申やうはいひも虎よ
 くさけ必ずとれとくらふ事なかれ今日よりまてそれがしをもろくの獸の大將に天道よ
 り仰付られたりさる程に汝我をよくするあらば天命にそむき忽ち汝が命めつすべし若此
 事いづはりと思ふならば我あそにつきて供として參るべしもろくの獸われを見てゐな
 ちす恐れおのゝきよげりくるべしといふ虎ふしぎにおもひさらばとて此狐のあとに立て

ゆくもろくのけだものをも素のとくみあちりけににげかくれおそれたのよきひれふ
 す其子細と此きつねを恐れよざるにあらずあとなる虎を見てもろくのけだものにはにげ
 ろくれろれおのゝくなれされども虎はまことにかの狐も恐れをなすと思ひ天命とおも
 んじかへつて守護となしけるをよやそも大きな化やうかあされば世間の家々にももの
 狐こそ多ければ化され玉ふな御用心く

○爰に能勢小作といへる大すりきりのわるがしこきものあり時しも極月廿七八日ころの時
 の事なりしが借鏡にまひつめられせんかたなく方々をかけたまはりさいかくしけるに我も
 人もめんく用ある折らなれば我用に立べしといふものなし、あるに粟田口邊に彦
 八と申て富さるへの町人ありかれが處へ尋行からばやさおもひ粟田口へといそぎける此
 彦八と申ものいなる前業のつたなきにや朝夕の飲食としては黒米飯のみづしるにてくふ
 はせれ者なりかれにかくといひけるがくだんの如くつましきものなれば我身にさへとし
 み朝夕の食をたにもとさよ取てそ一度もかんよんする程のものなるゆゑまして親類すら
 猶もつて他にかねなと用に立べき事おもひもよらざかつて取合申さねば是非なくして
 歸るとて

たからともならぬたからは彦八う

とよみすて、こそかへりけれさる人の申けるは一休和尚へ参りなげき給を、さだめて和尚をじひふかくまします程にすこしは玉はらん事をよもあらじとや、参られよ殊に其方のよろしきとき、相應の用事を度々かなへられし事なれば、其方の事の和尚かげにても念頃ふ仰られ候ま、御うけあひ玉にぬ事あるまじとく、と申せを此者げにも同意してやがて和尚へ参る折ふし和尚出合玉ふ先四方のそまを二ツ三ツ仕り序よきときを見合申けるはいかよ和尚さすろれ人間は四百四病の其中に貧苦はせつらき病はなしと古人も是をかなしめりされば御僧も内々それがしが年月持病御存なりとに此頃しきりにさしおこり候さる醫者も尋候へば此頃ひは我等が療治にはかなひがたしかやうの病はつゝに醫書も見へ申さず然ども曾て痛の名を申さねば醫者の見立とまらざるに似たり多分此のづらいは積金といふわづらいなりのいか成者婆へんじやくのか、りたりとも治まがたかるべし妙薬金銀丸をもらひてのみ玉は、即時に治すべしと申しへられけりもし和尚さまよ御持あらば一包御はうしやにわづかり度候とをみだをばら、と流して申せを和尚さまよ給ひてさればよる其病と年ふ二度づ、おこる病なりまづ當月今おる秋は七月中旬何れも違國までもとやりわづらひ申なりさるめらば愚僧すこし持あはせたり一包まゐらせんと

て奥へ入たまひ銀一つみ取出し上書には養命補身丸とかきつけもし再發のときはしらぬなり早々歸られよ

さて因果の差別目前の道理を講しままやう唐土の子才と士嫌といふもの、問答よて侍るそれをふまへては論せねども今少し因果の道理と聞はつりたるものが申事よは因果といふものがたねと木の實のとくならば同じ田地と種茄子小角豆の中にも枝葉のしげりたるもありやせたる枝と虫のつきて見苦しきもあり何れも其肥たる枝は前世よていかなる善根ありややせたる枝はいかなる悪業をかなして是は色のちがひがあるにて侍らんその上松の木が後生ねがひてさくらふなりたるためしありや天地の間よ生るものは萬物自然の理にて種は同じけれども所によりて大小高下のあるを別て善事したる瓜のあしき事したる豆の葉といふやうあるいふかたしき事あらんやあうらくは佛法あやまりて因果の差別と説なるべし是いん、これと士嫌がこたへよ是不類の談なり變化は心に依是木たる事豈心あらんやといへり此心は不類の談と耳とつて鼻をかむがとく山を船にのるににたる不審といふ事なりそれをいかにと申に成實論に

前世の妄執は今四大をまねく虚空を圍て假名の身となる前世の業因よよつて法界の五大假和合して五脉となると釋して善惡因果と論ずるは有情の群生心のあるもの

、上にこそ沙汰する事なれ誰か悲情草木の心なきうつ木後世と祈れハ善をなせといふべきか、るゆる系に變化を心による木たる事わに心あらんやといへり變化は品形のかはるといふ事なりしかれば有情非情こゝろあるとなきとの差別を合點すればろの難問みなはれ申でははへらせやたゞし右のものいひ華嚴會上の樹神の偈、甚深の子細あるとあればこゝにて論ずる事くなり誠ふ昨日われを今日あり今年あれば來年ありたれかよくあすの日をつげて來る事はなけれども今日がくるれば明日もあり現在あれば未來もり因あれば果なふてかなはぬ道理極るならひ薩婆多論に日むかし牛涸比丘といへる人は常に牛の涸かひやうに口をうおくとしられたるは先世牛の中より生をうけられたと申又ひとりの比丘あり初にも鏡をもつて我面を見られしかば過去傾城のうまれかはりなり目蓮尊者は神通を得玉へともつねまたはむれおどり歩行たるは前世猿の中より生れ來るとしるされし又佛弟子の中は夜晝もかずに眠りたる僧あり佛にこの因縁と尋ね奉れば千歳の間辛螺がいん生と得たるものなりとのたまひしをばづかしくおもひ晝夜また、さもせず七日の間まなをひらいて居たりしかば忽ち明言に成しを耆婆と見せければ是れいもへからず病よつふれたらんにと藥われども生たる目には眠りて休るが食物なるを此日數ふさがさればかつえはしたる目なり藥のなればとてさすがの

名醫うでをばらいて去けり其とき世尊これとあはれみたまひて金色の御手をのべて双眼となで玉へし即時にやみおされて明眼よなれる事もあり生としいけるもの三界十五有の生死病死遷流開隔六道四生形をとしし果報ひとし、からざる事は皆先業の習氣によれども一切の凡夫罪障ふかくして因果としらす皆みづから苦の因と作りてみづから苦の果をうくるかいこの我身としはり夏虫の火にはよがる、たぐひ皆自業自得誰よむかつてうつたへんあるうたに

奥山のすきのむらたちともすれば

おのの身より火を出しける
 ともよめり曠劫苦海にひやうりんま多少業火にやかるゝとぞ
 ありもせずうき世の間にまよふのな

身とれもはぬはこゝろありけり

終にその苦しみよわかずのへつて五塵六欲におぼれて思愛よまばられし羅刹のちきりも命のさへざらうち怨鷲のふそまをかさぬるも身体のやふれざる間大梵高遠の闇も火血刀のくるしみをかなし阿育の七寶も壽命と買す思たへぬれば又三入難占巢に飯り犬とすまれからすととなり不淨の肉よ樂しむあをばい糞中にそまり蟻を養ひ角といた

いさ毛とかふむり生々世々の其間四足にてやあらん無足よてやあらん覺す淨ぬしづみ
 の紅蓮大紅蓮のこほり八寒にどじられやうく餓鬼にへめぐりあるひは畜生にさまよ
 ひ修羅にうつりふいぎや過去遠々劫のすこしきゆかりにひかれぬらんたましく人間
 生をうけあひがたき佛法にあひ資の山に入ながら現世後生をふらりとくらしだらりと
 わかしうやまふべき三寶をも信せず放逸に悪業をたくみ手をひなしくしてまた三惡道
 にかへるべき事はさてもく淺ましく悲しき事と思ひたまひて日頃願たてまつりし念
 佛題目やうれくの宗旨の方便さづなに取り付て此たびこそめて少しの善因をまいてな
 りとも生死の家をはなれ未來の淨刹の臺に置べしと大願のちかひをたてひとへに後生
 の道に身命をなげうち玉ふの肝要で御さるまたさましく申談したき事侍れどもへたの
 法師が弁舌さうひぐさのたねもしや此大御のすみならば明ばん講談して聞せまじやう
 ○和尙いまだ小僧よておくせしとき師の御坊につかへて物よと手ならひなをてして居玉ふ折
 ふし夜さむのころなれを師の坊をからざけとあつものとしてたゞひとりまゐりて一休へ
 は豆腐やうの物ばかりまゐらせられけるに一休これを見て凡出家はなまぐさきものをく
 はざるよしうけ玉はりしが師匠はからざけとまいるはくるしからず候かさまらば我等も
 たへ申さんと申されける師の坊をかしくおぼしめされなんちかやうなる小僧の身として

なまぐさき物くふときは忽罰わたるなりと仰られければ一休眉をひりめしをらく思案
 して申さるゝと同人間の身として小僧にのみばちたたらむや老僧こそなまぐさき物まゐ
 らば罰はわたるべけれどあざわらひてれとしければ師の坊のたまふはいとけあき身とし
 て心たけたるいふやうかなされをよ老僧とて御ゆるしはなけれども我等の引導をして喰
 はせにといひたまへば其引導はいかなることやらん少しうけたまはりたしと申されけれ
 ば扱々わおせはまゝやくなる人やいで引導して聞さんさて一盃もりたるからざけとさ、
 げて替おつとりのべてのたまはく

汝元來枯木のともし助んとそれども生て二度水中よあそぶとあたはず愚僧に服されて
 佛果を得よ喝どのたまひてひたものまゐりける一休つくづくと聞て又眉をひそめてし
 あんして夜の明るを待のねていとぎ魚の棚へはしり行さる大きくした、かなる鯉と一
 献買取きたりて味噌汁とこしらへかの鯉をひんにざりながたなかつとりのべて細首ち
 うようち落さんとせられける所師の坊たち出御らんじてこれはさたののぎりなり昨
 夜もしめし教とくふいとけなき小僧の身としてからざけだも無用といひしにその
 生てはたらく物を害きて食はん事以の外の事なりといましめ玉ふ一休もさはがす我等
 も引導おはしますとて去ぬ体にはしけるが師の坊もあきれはて大にわらひてそれは

いかなる引導がやもし尤一からとゆるすべしとからずばのがすまじとてかの御家の一
 棒をこわきにかい込引導いのにとせめられける一休をまゝもさはがすいで引導仕らん
 とて左の鯉の細くびひんあざり右にはながたなとしやにかまへてははく
 汝元來まま木の如し助んどすれをにげんとす生て水中にあるばんよりは如し愚僧
 が黄となれ喝

とて鯉の細くび水もたまらまら落しぐつくと煮てした、あ喰て空うそ吹てればせし
 かば師の坊これをみてさてもよき引導ふりて手がまりなる心得かな昨夜もれらが引導に
 てはからさげは佛果を得ず去て糞と成べし汝の鯉はくそとはならで佛果と得りさてく
 活機なる人や禪僧なるがや小僧とのとて皮の一棒をからりとすて舌をふるひての玉ひけ
 るの三年よなる鼠を今年生れの猫が取とはか、る事をやとかくは汝はたゞものにはあら
 じと感じたまひけるが案のとく程なく天下老和尚とみづからのたまふはどの活祖師よて
 一休とて名と千歳も傳へ玉ひて田をかへす翁のりをする尼までも物語の種と人にいひも
 てのやされ玉ふ半蔵に凡人にてはましまささりける

○一休和尚は蛸が御好物にて或日つれくは蛸を買につかはされけるに折ふし店にきれ
 てなかりける彼つかひの者このしこと尋ねぬたる故おそかりしかを待りび玉ふま

此たびはいそぐといふにまのそでの

たこの入道みちのれうさよ

ま遊しける處へ蛸四五とい買もて來りければ一休よろこびて此たふむさくど食もむさ
 んの事なり引導の煩なくてはとて

千手 觀音 蛸 手 多 斬 懸 三 袖 酢 一 拜 二 如 何 一
 佐 州 一 味 天 然 別 他 禁 戒 任 二 老 釋 迦 一

やれ引導はすみけるが火葬にまへさか土葬にせんかいやく水葬にせよとて手とり足と
 り手まゝ沐浴させて袖酢をかけてひた喰にくひたまひ去る檀方へ行て酒などまわりけ
 るがあまり多く蛸をまわりける故吐却をされけるがみな蛸なり且那兼これを見て大に
 驚き申けるは一休和尚は佛のやうに思ひしに蛸をまわりけるかなさてくさまぐさ坊や
 これなくとあざけり笑ければ一休すこしもさそがぢいやと一我は蛸をたべねども口よ
 り出ればせんかたなしさりながら我蛸とくひしにはあらずとあらがひ玉へば口より吐出
 したるもの食ぬとあらがひ玉ふのやいよきこへぬ御坊やとおどりあがりて笑ければ
 いてくわこせ達たとへ口より蛸出たりとも喰ひぬ證據を見せんとて皆々引つれて百萬
 遍行て善導法然の善像を見せておれ見たまへんよ善導のみだをくひしとはおけれ

口より三尊を出玉へり善導大師さへくもざる物の口より出るとを制しがたしめて愚僧くもざる蛸の出るとさらせんかたなまを仰られければ昔人よこ手をうつてさても頓作なる御返答やと口を閉て歸りける

○扱一休和尚は生佛にて魚と食えて水中へ吐出し玉へばその魚たちまち元のとく生かへると洛中に此事と専ら申傳ふと或人來りてかたりけれを一休をかしく思して洛中の辻々よ高札とこそあげられたれ其詞よ

來る何日の日さがり松の根とり紫野よれわて魚と喰て其まゝもとの魚にそき出し水中にふせらさしむる事なり御望のかたゞ御見物に御出待たてまつる

太夫は天下老和尚一休大禪師

とぞ書れける洛中の諸人は是を見てうその誠かかばかり人々いひけれを實しめらす思ひしに扱はうたがふ處なし正しく御自筆にて高札を立らるゝ上はしるしなくてはのなふまじいさや人々見物まで未代のかたり句にせよやとてしるも知らぬも見しも見ざるも其日の來るを待るねて門前に市をなし我見もうさじとてころぶまでのび上りて洛中貴賤せん若ゆせり其刻にもなりしかば大盥に水を入なる所魚をよく料理してのたらいの波とりに御膳をすへける一休出たまひて彼魚とひた食に食たまひて扱はんざりふむかひて喝々と

のたまひて暫く目とふさぎなごし玉へ見物のくんじゆは御顔とまもりぬて生たる魚とはさ出じ玉ふは今かくと待居たるにしばらくありてのたまひけるはたのくゝの御出なる所をよいつよりも一さは手ぎはは吐出して見せ申さんとして種々思案する中々はかれらうにもなしせひにおまはす業になりとひりて捨申さんや各も御歸りわれとて内へ入玉ふ上下万人さをもつふさてもおどけたる御坊と興とさまして歸りけるが其中よ心あるものひひけるは只今参りたる魚は皆生て淵におどるなり有むたき一言かな誠ふ正法よきとくなしとこそうけ玉はりしに人の余りあいはんとてふしぎなる事といひてはめんが爲に返てるしるなれを其理をしめし玉ふ有むたきと感むければ皆人は是に氣がつきて合点したる合点せぬもうなづきあへりて歸へらしとなり

さて前晩おやくそく申たる因果の二字をあらまし講談いたしたる其次を只今講じませう因といひ果といひ善と惡とのふたつに生れ苦と樂とを身にうけさせるものなにごとせんさくして見れとこな我一心より作りなすと心か心にさせるといふ事まで銘々覺ながら善方へはうつらす惡しき事といへば先ぞ、む我人は過去乃惡業が多く残りてまた五道六道に引もどさんと心の鬼が身をばなれず日夜つきをひて少よても惡念がこればたよりを得て善心をさまたげぬるをもつてあらゆる六賊といふ六の盗人めが目と鼻

と口を耳と身と意とよ入かへり目にうつくしきものを見れを人の親たるものはあのやうなる衣類染ものを我子にして着たや孫めにこしらへてせられたと罪をつくりまた子を持つぬ女はそんじよ其娘子の今日の花見の着物見ればさても風流なもやふ當世のそめ出し帯は何々たしかひながたの内にあつたのを覺るさし櫛のけつからさおれもあのやうにして寺参りするならをこれほど見にく、とも能見られんものをしや同じやと欲をおこさす扱又一盆なる親父の伊丹瀧のいけのこもかぶりの梅片荷の辨當旦那のものはや向へ世てをじやると久三がいそがしげに通ると見てを何とよいものが行者のなくる大事あるまいとかもひ其外若男ともは色ある女をみるに煩悩のたまに行合袖のふり合よはや心うかれあどとしたひ百度も見かへりたるも見ぐるじよ坊主の女ねぢむけるはと涙まじきはなしこれ普眼ふ彼の色乃盗人が入かへりて其心どうばふ也仙人が通を失ひけるもつふさよいへば八十八仗の見惑あり其外か耳に聲を聞てなづみけはひ物をしよ形は見へねども氣をうごかしかる機土をいとひ淨土ねがふ念佛の音を響をさへおもしろきこそ昔やと後世の心は余所になりて聲にれんぼをなむ鼻ふのかりの物と思ひながら袂に留し薰物も心とどきめかし舌のあぢはひ身にふれ意ふ録し口にいふ一日一夜四千念年々と思ふ事の智慈道に引おとすなかだちありたまさかに響る

善心も此六塵の盗人よぬすみとられて善心ははやくさめてあしき方にのみほだされまほひの講談とも只何をなふ聞たまふべけれど中々御法はさくく小事でなく一日の聽のたごへ大海針の事は方々よてうめんある事なり只今此法問とさくうらなりとせめて意の駒にくつはをはめ意の猿をつなきとめてき玉へ觀念法はならす身にいとまなく世路はさへられ親の命日にも寺まわりさへならぬ世の中いはんや聖教にまなことをさらす事もいとまを得ずしかれば此とみん事か二ツの樂しみもよの母法の得益甚深ははないだふかければ只一詞も佛のをしへどあらばおろそかに聞ぬやうに先心とちちつくべし聞といふに三ツの品あると法苑珠林にあればありろ乃内閣とつて聞が三ツの中に下成としめされたしかれば何をもつて聞がといへば心をもつて聞がまどの聞やうかるがゆる心愛ふあらざれば聞きもきこへず食へども其味をしらすと備書にものべたり莊子にも神をこらして寂に聞といひ前漢書賈山が傳に天下言をいたいて視耳とかたふけて聞とあるもうつかりと見すうつかりとは聞ぬといふ事也しかしなぶら惡業煩悩のこみよはえふてきく事ろくわは濟す只佛法とあらばありがたやとばかり信附じたるがよ一萬物の理をすすすといふは知恵がなければならぬとしるべし

○成人和尙へ參る折ふし和尙たいめんあり諸事のはなしおとりて後此男申やう和尙さまわ

たくしは此まる病中にて本服いたし今日うむだち仕まつ和尙さまへ御見舞申たりと和
尙さまは御答話がよきと申事凡日本中よ流布仕りて候わかれ何よても御はなし聞され
候へさりながら今程世間に高直なるものをもてあつかひ候先何々にてかや一休さとしめ
しされを高さ物といはんとならば

ふじの山に

伯耆の大せん

高間のみね

わたおさん

ひえいさん

東寺の塔

天狗のはな

品こそかはれ

きたふの墨跡

大燈や扱

貫之が歌書

定家が色紙たんざく扱

あらかねの土のものには。まつはふんりんのかたつき。丸壺なすびかぶらや。は

なのかぶらなし。鞠の一聲。せいしきや。さてまきざしや。太刀かたなよしみつ

正宗。國とし。波のひら行安。しらぬのうつばに。日でのりの年の米の直とおんすはな

はも高さかねなり。かれうびんがのこゑたて。童のうたひこへ。をんしきらむけい

かみひてり

これまでなりといひおさめたまふとあるへ旦那かたよりとて御衣を一衣これの和尙さま
へ進上し参らするとて持来る一休さのみうれしくもおぼしめさる氣色もなく一言の禮を
らふべき言もさくた。狂歌をうへ給ふ

から衣またからころも唐衣

かへすくもからころものな

かやいひて是と返事よしておくり給ふと也

○又さる人一休和尙へたづね行きさんとの望と申ければ和尙さへ給ひ安き事や其望なら
ば先金剛は正体といふ物をわんじ出し給へされはせらるゝこの者聞て取あへず其こんが
らの正体ならば案するに及ばずそれはわらよて御座あるべし子細はまつわらといふ物に
てこんがうは作る物なれば。かくあるべきなりと申。和尙おかしさかきりなくして。いや
くさやうの物にてはなし。金剛の正体と申を音わつて目にも見入ず。手にもとられず火
にもやけず。切てもきれず。水ふてもぬれず。色ももうまらず。かくては無ものかきおも入
ば。元來其どきにしたがつて。又あるものなりとおしへ玉ふ。此ものさ。てこは六かしき
たづねものかきこんがうならばどかく護あらでは別よ余なるものにてつくる物あるまじ
さ候いゝぞんせぬ事也とて出けるが門のはとより又とつてかへし御坊さまた。今おし
へ玉ふこんがうの正体ばかりました門前よとくと合點いたし候がやうれい尻あて御座
あるべし子細はまつ尻と申ものは音ありて手にも取られず目にも見入ず色にもうまらず
火にもやけず切てもきれず煮てもかくても元來なきものなりとおもへば服中のときにより

ていくつもある物にて候としまんがははいへるはあらしりし
 和尚あるとき雙の早がてんも徳ありと引とにたとへばかなつんぼなる者人に何を商ひ
 してよからんと問しよとても聲よては合点行まじと思ひ耳とおしへて兎角ひやく次第
 みて何しても利ありといへると此つんぼが心よさては耳に似たる物をあきなへといふ
 事と思ひ木ぶしを大分買込置けるよ折ふし諸方にきれて此もの大又利徳を得て後は長
 者となれる是の人の言葉真直にうけてうたがはず誠の心よりなせる故に利を得たりま
 かれを佛法の一句を聞ても少もうたがはずたとへば愚癡にして法の深理は合点ゆかず
 ともたゞ有のたやと思ふ心が則來佛の口じめとさる愛と源空上人も一定と思へば一定
 と仰られし安心決定の處あり歌に

聞ときは實もとれもふのりのみち

かへるときには見すれまそすれ

とよめる聞た一座ざりとまらずみなかゝつたつ人ばかりなり耳へ地おく耳がよし淨土
 双六にもえうちん地おくへ一度おちて二度出るとかなひがたきゆゑ地おくといふな
 り餅耳の水がどまらぬせも水中にひたしておくうちと一はいあるやうよこの一座に
 てさく内は水のあるとくちやうもんの座とたつときはたまると思ふ法の水はみなもつ

てしつてもなきゆるかど耳とらふなり人どうまれて覺へのつよきとよまきと利根鈍根
 上根下根は有らひあればせひ覺すともくるしからずしばらくも法問をたもつものは
 我則觀喜す諸佛も又しかなりと説玉ふ刹那片時の間も有がたき御縁によつて佛は
 さつのをしへをうけたまはるは大切なる事と信心を發し一遍の御生を底心より申すが
 專なりたどへを火とゆふ物は重寶なる徳ありて大寒小寒の氷面川わたれを手足の切る
 ・おどくつめたく五体ちまみあがるはせの朝夕よ火をたきあたればそのまゝあたさま
 り其外食物を煮金物をとらかして自由自在につかふ能あれとも火事といふときは盗人
 よりまはく家の五軒や十軒の旦時の間に灰とあし人もやきころすはずんごといひや
 なやつなり彼五体をあたゝめものを煮たす所の火と此まさはひの火とを別々かとも
 へば少も火にちがひなく全く同心火なりたゞ用ひやうによつて善惡明白ければみま我
 必をおしくもつなと是にたとへて仰置れたるは又生子を金銀とつてやしなひ二三ヶ
 月うだくしのちは我子にちゝをあたへ養子はいつしかかつる殺し罰あらはれつひに刃
 よか、りしも惡い心のもちひやうゆるなり現在かくのとくめしやくせられたるは其ま
 の地獄かまはやくのぐるは因果どかしむかし、皿今は針はどの事も棒ほどにむく
 ふは目よ見へてどほりこさらこの殺生戒をは大乘門のときはじめに置て佛は慈悲大慈

のたまりたるなればもの、命とるを別にいさしめ給ひしなり殺生よつゝめでさま
くこれあるはどは三世のむくひやうをつぎさにはなして聞せませう去ながら余りか
たは事ばかりではみなくたいくつでおざらふ先一ふく

○或寺の門の破風に猿を三ツ作り付たり一ツ、兩手を以て目とふさぎ一ツのさるは兩手に
て目とふさぐ今一ツは口をふさぐおるとき三人づれにて此門前にたちどまり是と見物す
折ふし一休そこを通り給ひて立より是を見たまひうちうなづき笑て通行たまふ三人のう
ち一人が申やう向も三ツの猿のいそれをさまぐなんじけれども終に合點ゆかす只今こ
れにはばらくありて行たまふ出家のうちうなづきて通られしは定めて合點し給ふならめ
いざ子細をたづねみんと追付て一休の袖をひかへ御坊に物たづね申さん只今門前にあり
つる猿を御らんありてうちうなづき笑たまふやうは定めて御僧はよく御ぞんじありつる
ものぞんずるのやうに申我々は愚痴文盲にして何の弁へもぞんせざる者どもなり子細
をのたり聞せたまへや宿へのへはなしにも仕らんいかにくと問ければ一休されはと
そ其猿のいはれは我等もくしくいづんぜず去ながら何れもれさくの若き衆の尋ねた
まふにしちぬといふもいか斯いひし事もあるげな候

何事も見ざるにはなるきかざるは

たはほとけにもまさるなりけり

とよと聞せたまへば三人の者どもさてく尤も御歌のこゝろかな是はめんくの心得
もなくてかまはざる歌也さて今の御坊は佛神の現化なるべしと皆一同に感じまも歸りし
が一人の申やうのよめんく此歌の心をもつて三人とも今日よりして見ざる聞ざる
いそざるの願いたつべし皆もつとも同じて扱かたはらに立よりければ折ふし遠寺の晚
鐘かすりに聞へけるを聞ざるの願たてたる人何となくおもひ出て

今日の日もいのちの内暮れけり

あすもやまかん入相のかね

とふるき歌をそ吹ける處にいほざるの願たてたる人のいひけるをいのに其方聞ざるの
願ひなしくなりぬる事のもさましまよと手を打ゆびとさまて笑わざけるところへ見ざる
の願立たる人のいへるつさてくかたくの何を聞何といひてともに大願をやぶる玉ぶ
やかろかにあさましき事かまどがめらるゝ三人の心かかし

○又さる初心なる男ありさいく一休和尚へ参り萬うけたまはる和尚此ものを見るたびに
其方はたんき大也物おきに随分かんにんせられよと仰られる此もの答て申やうもつとも
かんにん仕候事隨身にまた一過て覺へ候去ながら我何のかまはもなく無罪無事にまかり

あり候ときいたづらもの來りてこれがしが面にかすはきとはきかけ候をおし拭てうんよ
 ん仕候と申和尙御玉ひて諸道斷せればはるきかんよんの心得やうかながへすも其
 のすはきとのとふべからずもし其のすををのおひ候はゞいきかけたる田夫もの我等が
 かすたきとむさくさたなさとおもへべころのおひたれにくき仕かたなりと猶々いかりか
 さねてはいななるめにかわはせんすらんさるほどに其かそはきをさたなくとも其まぶ
 きて于つけ置べしそれ何のともなき人の面へかすはきをさかける馬鹿ものは生有も
 のにあらまひとへに狂亂すいきやうばかたくらだ非人ともいふべじろの蠅といふむしを
 いか成貴人高位の人のつひりへもあられずわがり夫婦のかたらひ事をもなしあるひは糞
 とひりかくるされば其蠅はもとより虫なりともあへば腹も立ず眞そのとくはい同前のも
 のよ對するときは人倫のなすさのふまわらず勘忍のまゝろへ是等にもなくてはいでか
 わらん

因果歴然修羅のニツと御はな一申さん過去の因をしらんと欲せば現在の果を見よ未來
 の果をしらんと欲せば現在の因を見よといふを譬して現在の果を見て過去未來の果と
 するといへり因果といふは遠い事ではなく經文多き中大集經の十來といふ事があけ其
 中に命長きものは慈悲の中より來る命みじかきものは殺生の中より來る未來もまた然

なり今此悲しき浮身となりたるは已に過去の業因によつて四苦八苦よきに付あしきは
 付叶ぬ世となげく近くは成敗は行はれてかばねをさらし籠獄のすきまをいたすを見玉
 へ其中より重きものろきがあつていづれおろかとなげくも人を殺したるもの助あるひな
 し但し侍の職場にむのひで凶徒としりぞけ盜賊を討て國を治の義をたつるハ佛法には
 一殺多生とも慈悲の殺生とも申侍るうれとひとつ事ではなし梵網經にどくがとく一切
 衆生は皆これ累世の六親さんづく只頭をあらため面とかゆるによつて各相知ずとあり
 て六道りんゑのあいだ生々世々生かまり死にわりあるときは父となり母となり姨と
 なり伯父となりいとことなり縁者となり婢とありしゆうとしようどめとなり師匠となり
 弟子となりあるひは士とようまれ百姓と生し大工とあり商人となり夫となり妻となりて
 形はかり所はへだつれどもたがひは恩愛のはなる。とさなかりして凡夫は淺まし
 隔生即忘とて胎内よりうまれいづるときに過去にありさまをわすれていか
 なるものか今人にうまれ來りしやら何としたる因縁によつて親子となりたるやう覺へ
 もしらす少しの利欲も目がくれては人をころしつんさきて又それに敵をもとめ切もあ
 りきらるゝもありまづ未來までは遠き事あるひは口論して人と切たり打れたりしたる
 事は聞およばれん其如現世は修羅道のせめをうくる事は扱も淺ましくなしき事であ

らずや扱未來の事の諸經より多くといて曰殺生のつみよく衆生をして地獄がさちく生に落るもし人中より生れと二種の果報を得一ツにはたん命二ツには多病楞加經には殺生のもの、號叫地獄に落と説き因果經に切こるすもの死して刀山劍樹地獄の中に落るとどきつるぞの山に追立られてきた身とさかれ血もむせびてあらゆるくるしみをうくる事其かすつもるよもりつくされず

○北野邊にて十二三ばかりの童女の茶つみて居けるが俄にひれふし死に入ける處へ一休通りかへり立より見たまへば四五尺ばかりなる蛇はひかよりけるを和尚杖にてはらひのけ童女を引れこし子細をどひ玉へ、只今こゝよ若もの、來りてろこにふせくと仰られて其後ひたいに引ふせられ候が何とやらん頭のまはりをれそれおどろきたるふせいにて左ながらよりも付すして其ま、よげざりたまふなりとのたる一休ふしぎにたぼしめされしが髪を元結をどかせて見玉へば尊勝陀羅尼の書たる、引さき元ゆひにしたりけ。是におそれ近づかざるがふしぎなれど和尚あるとき且那方にて此事をはあしたまふ去程に此尊勝だらにの功德よりあまたの命とたすかりたり扱こりまもりといふものはもつべき事なり

○扱愛に一休一大事因縁の御工夫なされしとき諸且那あるひと御友達衆毎日とひらひ來ま

してさまたけとなりければかしましく思召て御心地あし、とて一えん人又出會たまはず昔人こゝろもとなく折々御見舞申侍れば御長髪ぼうくとし玉ひて何とも色みへす御惱とのみ仰られける且那を先として御智音衆もよりあひ是と氣遣はしき事なりとどきの名醫と入かへく掛まおらせ御いたはりはいかよと聞ば醫師申されけるは御脈をいかにもよし不審なる御煩とぞれもく申けるあるとき且那智音衆寄集り此御なやみの様子いにかさまにもしつ熱の病とは見へず若き御僧の事なればもしや戀なをなされてかく思ひわづらひ玉ふ事もやあらんと口々に申されけるがいやく人多く知りたりと思召ばあかし給はぬ事もや侍らんひりかによさ中の智音のみ二三人見廻てうとうかまひ侍らは誰と名さしあるべししからは誰人にてあれ此者どもがかかりなをなぞか御本意ととげられぬ事あるべからずと頼母して言合せてひろかに三人参りたり一休出立ひ四方山の物がたりすみて一人申出けるは此問さまの御療治にても御脈は常にかわらずと醫師とのく申なり平生にはちがひて何とて心深くわたらせ給ふがや定て戀をなざる、と見つけ侍るはひが目か有のま、に仰られよかなへて参らせんどうちつけて申ける一休いかよもうれしげなる御面はせよて此上を何をかかくすべき此日頃戀わびてさてかくの如くやつれとて、候あり能こそ仰出されたり何とやらん我等には似合ぬ事よて侍れども各は日

頃もよしなればひとへに沙汰なくのなへてたべ去ながら糸ならなくも心見だれははつ
かじやうれと名とば面上にはのべがたし一筆かきで参らすべし門外へ出給ひてれのく
ひらいて御覽していつきかなへたまえらば我等が命はながらへておのく方へは其かは
欠能き道敷へ申さんどておくの問へずんせ入一筆さらりと書て引ひすび彼三人に渡し給
ふ三人よろこび御安心く思しめせとて門外へはしり出て扱ころ申さぬ事はとてはる其
名をしやまはしくて彼文ひらきて見れば歌に

本来の面目坊むたちすがた

ひも目見しより懸とこりなれ

我のみか尺廻も遠方もあらかんも

ご乃君ゆるるに身をやつしけり

まか、れたり三人のものと案に相違して横手を打て日頃の御心もしらぬ身があらぬめ
さと思ひけることおかしけれ今にはじめぬおどけにたばかりけるこそおろかなれまご
とに有むたり御坊かな書にうつし木にきさめるは多けれとわたもち乃尺伽如来なりと
おまは人はなかりけり

○慶綱王御意坊といふ道心者ありけるいつの頃よりか首に蛇まどる付てりあれずさまく

の事をなして漸々とはなせば又夜の間元のとくにまどひ付ことをにひしり切たる坊主な
れば日々にさかより京へ出て鉢こひけるに彼蛇をかくさんがためゆたんと首にかけて見
へざるやうよして出ける此事ひとへに難義に思ひ其頃二尊院に一休おはしけるにかの坊
主たづね行わが身のやうすをくはじくかたりければ一休き、給ひいかさまうれを女のじ
うじやく成べし汝是より高野山へ上り候へさもなく退く事あらじと教へ給ふよろこび
て高野へ登りしよ不動坂より彼蛇うせてなした意いよく有がたき事に思ひ高野山より二
三年も住しが今は早蛇の事も打わすれ過しふる里のこひしさに又さがへかへりしが二三
日お何の子細もなかりしに又夜の間に彼の蛇まどひ付けり其ま、高野山に住ならば備り
でたかるべきに何ぞや古郷へかゑり二度難義にあふ事定業の程まうかなしけれ今に坊主
のすみじると蛇寺とぞみな申あへり

○一休旦那衆三三人同心して東山邊へ遊參に出たまふとさしも春の中ばにて梢の花さい中にしてこのしこにゆさん多しさる片はらに五七人うちより手を打た、きかどりあがりて大笑ひしてあうぶ何事のおもしろりけるときく所に屁をひりておもしろがる旦那の内一人の申やうのまり酒よてうじ何がそれはせ屁がおもしろるべし一休申さる、はいやおもしろきこそ事わりなりよく一昔よりおもしろき事なればこそ諷よもおもしろるべやあられもしろの春へやとうたふはをに扱ははるのへはかもしろきも道理と申されき

○一休和尚いまた十二三歳のころ師匠粘つぽを一ツ持てた、一人ある小僧にいさゝるも喰せずして汝是とありにもくふべのらずもし是を子どもがくへば忽ち死る毒ありといふてはたもの我はあり食ひては取置る、一休おもはる、は哀れ毒よもせよ死るとも師の出られなばくふべしと思ひて待ける處に折ふし師匠用ひりて出らる、一休やがてさがし出し棚より取ふるまさまよ打こぼしわたまへもきる物も付ける日頃くひたしどかもひけるまゝに先二三ばいいてあまつさへ師匠のひらうせらる、壺をうちおとしみぢんにたま

かくする處へ師のへらるゝに一休しみくゝとあるゝ、師何事ぞと問るゝされば大事のあめつぽを打りたるなり定めて御たすねのとき何と申べしとれもひ命いきてもよしなし子どもが喰へば死ると仰られ候はごに一盃たべし得せも死なず二三盃たべつれせも死なれずおたまよもきものにも付て死んとぞんじし得せもすべてしなれはすこの玉へは師の坊も言の葉なくてうちわらひてず入たまふ

扱講談の次をおこなし申さう一寸の虫に五分のたましいと申事のひ鶴鷹の逍遙を好むものぞ死して鉄鑊地獄の中に落ちる鶏をよろを卵を煮焼するものは灰河地獄としづみ鐵錫鐵中へ落て豆とにる事く尖石ちごくにいつてうつぶしに熱鉄の上ふし其せなるも尖石をのせ石の中より猛火さへ時せバしりて重くして熱きといふばありなくたへがたし皆これ殺生は因果より此身を請るさて鳥類肉類をころとも同じ凡血をふくみ氣をうくるもの皆これ靈地ありせ、なきのもの、は、づき造とくく死をおるゝ事をしつて人の足をとをきいて蚯蚓もちやつと聲をやめ蚤のやうなるちいさき虫も人にとられ七とどびまわりくもなせも空ふ家つくるをうち落せばしんだ顔して手足をちやめすくみたる氣色も命を大事にするゆゑなり大唐の交抄といふ國の實けんする人貞觀年中のはじめつあたつとめをやめて樂々と隱居していられしが此人自体ら鷹狩がすきにてひ

たど犬をころして四五十の鷹の餌にかへれしが有ときふとちりけもとよりつかみ立るやうに塞くなり大ねつし頭痛がしてくるやう正体もなくうちふまやみ皆醫術も及びざりしにゐる夜人しづまりてのちまたらと赤きしろき犬五疋きたりてとかく其方が命とどらではおかぬと五躰に取つきせめけるとき此人おもひ當りて汝と殺せまは家來通達が科なり我のころさすといへば犬の曰通達はそなたの差圖にてころせり余の人の仕業よあらず我等すでに他の食を盗まず門番のあてかひを喰ひて命とつなぐ何のあやまらわつて殺し給ふや此詞につまりてしからは汝らがために後生を吊らはんといふに四ツの犬の合点せしに一ツの白犬頭をふりて曰我すでにつみなきにころさるゝのみならず未だ死もさらざるに生ながら我肉を割れしくるしみ其とき怨念心肝にうみまれすとて承引せずこれを四ツの犬あつかひていふは此人の命を今どりたりとも我々が命のへる事をしと思へば追善ぼだいを祈り給は、誠は苦るしみをのがる善根ならずやと理をつくしていふに心をやはらげぬるとおもへばよまかへれりまかれども酒手足どうおかす事のないす夫より約束の如く犬のために追福なしたるに此病たちまち平癒したる事もあり其外巢をのたふけ宿鳥を射ひ雛をのほさる事儒教にもいましむいはんや佛道の大慈悲門にゐるていましむらんや空とのける翼地をはしるけだもの水にすむ魚

子をまはれむのこゝろ人より切なる事の子をもつ鐘といふ魚と追のけて三尺ばうりある餘のやうなる物にてくまくと突とさし母なるくじら子の脊中におひのさなり不我死るまでいつあれて終つ子さいだきながら釣鐘の事くなる聲と上て鳴はなれずさく不便なる事いふ斗なしこれ畜類の子と思ひろの身は死ぬるとても子さいはいとふなるに人間に生とつけながら巳の子尻の下にしきあるひは殺したるは世話にいふ熱火子からふとは此類の事なり然は畜生は人よまされり

○あるとき白河邊に住する衆門よ名譽なるある口の人待りけるが一休のゐる口なる事をききてをよびていつづの行て難句をしおけ心見んと常々心おけられけるが不斗をもひ書たる趣向ありけれをさらを参りて御知人にもなり扱一句して見んとはるくと白河邊より紫野へとぞいのがれける折ふし一休も庵にまゐりて御知人となりとめくするはせに内々たぐみし一句の句作も出来ければ彼僧申されけるはうけ給り及し御ゐる口何にても一句遊せのし句とぞ付て見侍らんと申されければ一休仰らるゝは客發句に亭主脇どころ申せ先其方ありませとありしを内々たくみ置し事なればさらば申て見んとてなん句をこそは出されけるが此處何と申す所ぞ一休むらさき野と仰られければ

紫野丹波近

とせられければいまだ息も引入ぬにはや付られけるはそなたはいづくの人ぞ白川のもの
也と答ければ

白川 黒谷 隣

とあるはしければあの僧肝とつぶしさしも六ヶしき章句あり一句のうちには二ツの色字二
ツの所の名いかなるひやうたんの川なぬれなるか口は少しはしふらとらと給ふべし
と思ひしに貝とる海士ならで息もつきあへず付たまふの、る名對ある上ははぢやくはし
とて空うろふひて尻をのらげてにげられけるとなり。

○又書書の土佐守より内々掛物の書を一ぶくたのみたる人ありまの終にのきてつるはさず彼
人心せきて直に土佐守の宿へ行て申ければ折ふし太鼓うち殿にはあらぬをひる寐してこ
る居けれ彼仁つねとくしたしくある中なり内々たのみおきし事なれば引ずり起しる、
されける土佐守おふりにたぬすたとひ一夜ぬすとなりとも晩にのきて参らせんとておき
ずしかれ共又晩といは、明日の川の瀬瀬と心かはりもやせん世中ありひらにといふに是
非なく筆と取るくともまはしそけかつとりさつと書てこれくとしてふせりける望み足
りぬとその書とつてかへりひねくりまはしてよくくみれ共さらは何ともしれず水を
かきて其中に二筆ぐるくとしたるものありさら見分られず余り合點ゆかされば土佐

方へ持行何なるぞと問へども我等もしらすといふかゝる書をもつて何のせん引やぶら
んともへども三國一出来たりとやせん角やせんと思ひけるがいやく一休和尚に讀を
とひて掛物とせんずるぞといそぎ大徳寺へはしり行和尚申けるは此書ハ土佐守の書し
儀がさらに此水中の物しれずいゝ御覽あると申ければ何とも見へぬとも談がの
まみならばしてまいらせんと仰られければ恭なしとて贊をのふ一休筆とりて
水中に物ありその一物をとへば書し書工も
しらす持ぬしもまらず贊する我は猶しらす

と遊しければこれを見る人きく人毎よさても異すぐなる御心をせや無二なし三國一の掛
物なるべしといひしが今にをみて其のけものたゞ人の手にあらずとのや

○或寺に五百羅漢を作りて堂供養しければ貴賤群集の見物ありけり法事やみてのち其寺の
僧らあるのまへに香花など取りいけるにこびたる世俗二三人羅漢のを見物し居たるが余
の人は退けども此仁一人つくくとながめて傍の僧も問けるは此五百羅漢に一々名こ
そとはすらん御僧はさだめて御ぞんじあらん承りたしと申ければ此僧はたゞ三尊の外は
一佛も名をむらざりければ何ともいはずして方丈のあたへにぞ入ける折ふし一休行
合せ居給ひて何事なるぞと問給へばまかくのよし申されける一休のたまひけるはいら

りあつてゝ未だおとつとあり相老にて
 妙家の御とらひて云々ありあつて大
 ぶそほの海へゆきしそとすらすと珠
 かみせしゆとすらすとすらすとすらすと
 一日おとつとありあつてありあつてあり
 ておとつとありあつてありあつてありあつ
 てもおとつとありあつてありあつてありあつ
 さいとすらすとありあつてありあつてありあつ
 うみおとつとありあつてありあつてありあつ
 赤でとれりおとつとありあつてありあつてありあつ
 助あつてありあつてありあつてありあつてありあつ
 更にとつとありあつてありあつてありあつてありあつ



さる凡俗のどがめたてやうくて藝にもならざる事たれば覺侍んやされと望ならば言て
 聞すべしとて羅漢堂へいざなひさらば一々とひ玉へ真中なるは釋迦ひにひだりなるは迦
 葉右なるは阿難さて次はどへば南無さんぞ其次はどへをすきやとや其次はどへ
 はおらちたど一々れんげ呪の文にて答へ給へば五百らかんはさて置百千羅漢とどへ共
 向かは答へ給はざらんなんくと問ばざらくと答へたまひ凡う百ばかりもどひしが此
 俗人さて和尚にはよき御覺へのなと申ければ和尚打わらひさもなく候いとけなきより一
 番ばかりは中にて覺へて候へと仰られければ此俗人心付取入てかへりけるとなりされを
 時にとつて頓作なる御心入とさく人感しけるとかや物と問て用にたらず覺ても用にたらず
 此事をばいそざるにまざるめてたしよしなき事と問ておやつられけるぞすべて羅かんの
 みにもあるべからず

さて殺生と止るべきのはなしあり楞伽經より曰佛衆生をみるよ六道輪廻しおなじく生死
 ふわりてたがひに相喰くらふしたしきものにあらずといふとなしと説れて先祖の祖父
 祖母いかなる罪業によつて今鯛とらまれ伯父坊がくじらになりて來やら兄弟がさびさ
 ことなつて來て着にしらるゝやら凡夫の眼からいしらぬ事をり出家たるもの肉食をた
 つはひとつこれらはいはれまた不淨なるものと殺生も當るゆゑにくはぬこの事な

り必わじそひにふけりて彼魚の肉をころしてしてやつたらばと思ふ心のおまるまい
 ものでなし此ゆゑにいましむると思ふべし抑今の經文のとく六道りんをのうちは生と
 しいけるものしたしきものであいのなしといふは彼の殷の紂王西伯をどらへてひそ
 めに西伯の子を殺して身とこまやかみさきりくだき煮ておくりしよ西伯思はず是とくひ
 てわが子の肉といふとをしらず紂王大ひにあざけり笑て誰か西伯を聖人といふ我子を
 喰てしらする事といよ〜惡逆さかんありと史記の文にあり是を合點すれば此西伯は
 聖人にてしかも子は生をまかへぬ肉をさへしたしきものとしらす我々を愚智の凡夫ま
 たくらふ鳥類肉も生をさへしたるものなれば正眞の母親が生かはりて來たるどもし
 らず宇治拾遺にも鮠にうまれかわりて來る人ありといふ事をかける近頃近江國は鮠に
 成てくる人もあり紀の國に人の親たるもの那智の犬にうまれたるはなし其外かな双紙
 よもこれらの證據多きともろこしの書など引て申さばこれも一日や二日に申つくとさ
 れぬはと澤山にあるとなりかやうに申せば向後常住しやうじんとなされよ魚類でもく
 ふ事ならぬやうふ申と思しめさんがさにてはなし是はたい經文のあらましと申のじや
 肴うりかもつて參るはしんだものなれば此方の殺生にはならず去ながら因縁はのがれ
 ぬは色にのみつから手に網をばり釣をたれて谷なきものと殺し給ふ御無用此わち

とよく合點してなる事ならばうまい事して人にもふるまひ參るがよししかし出家たるもの、徳利にせじやうを入たるるいかなるいひわけあるも存せずかく申憊僧もしらず惣して畜生のかずあまたなる事五行大義といふ文にあり羽のはへたる物三百六十其中にかしらは鳳凰毛のはへたるもの三百六十中よりきりんか司うるこのあるものが又三百六十龍がつかさをなす甲のあるもの三百六十龜が司裸なるもの三百六十人間がかしらなり又ある經より畜生不同なれども約めて三種あり魚鳥獸なり是一て無量あり魚に六千四百いゝる鳥に四千五百品獸に二千四百種ありと説き正法念經より種數不同にして四ヶ億ありといひあるひは金翅鳥尾の問長き串の八千由旬雨のつばさ横三百六十万里に羽うつ其飛ときは塞天の雲の如しと書跋難陀龍王は須彌山をまどふ事七のり鷹鷲大魚も長ヶ三百由旬七自由旬是莊子にかけり鯢といふ魚なり少きものは蚤蚊鼠人の身の毛の中に住む八万の戸虫さて其外ハ山に住川に住海に住土に住空に住じりある小虫をねらへばくちなハ又かゝるをふくし又なめくしり猪の鹿にとられ鹿また狩人にうたれ強きもれば弱きと伏しまたみぢかきものハ長きよまのれ呑だりのまればりくはれたりつきあひさしあひかみあひていかりよいかりをかさね苦しみにくるしみをまき變度か死いく度か生れるたちとかへて苦惱をうくるものは何を現世の過去れ

業因未來また現世の惡心より惡所よりまわれれと我身のところをよく分別ありて少なりとも惡心ともつまじ人事いはじ物の命をとるまじ何れの宗に取つてなりとも未來をたすかりたしと底眞實よりまんとくをもやうし是非の度は此五道六道の火宅を此がるゝやうにひとへは佛力經力とたのみたてまつると一筋に思ひとりて如來の大慈大悲のきづあにすがりたてまつらばやうやく億劫もあひがたさ身を取をなすと又もとの三途にかへるほどよ日夜心得のある事なりた々安心決定が大事の所かならず忘れ給ふな又殺生につひて鉄輪地おくの糞尿地おくの野狐の身うくる事何のかの酢のこんにやくの牛房大根のと申べき事あまたあれどもまづ講釋はこれにてとめませう

○去るままこびたる男一休のもとへ雀を一羽もちていかに御坊このすゝめは生か死かいかん和尙むと答へたまふ此ものいとまもこはずさりけり此心を生なりといはハ殺すべし又死なりといはハ放ちやらむとの事かしらす一休其後かれが方へ行給ひていり口のしきおとふままたげて亭主くといひれけるとき亭主出ければ一休此齋居を出るか入るかといひたまへ亭主なにの返答もいはずた々手を打て笑ひしとなり

○又或とき一休かつら川をわたり給ふ何とかし給ひけん川中よて倒れ流れたまふに折ぶし川ばたに人多くあつまり居てこれぞくといひながらたれひとりわけんといふもの

もなかりしかば一町ばかり流れて幸ひ川杭にかゝりやうくにてあがり給ひしかば人々よりつとおぼせて御坊は運つよき人かな何とてあがられけるやといひしかば一休打はらひてされば我川へはまりたれをこそあがりたり上りたればこそ生たれさまで珍らしき事よのあらざりけり申さるれば人々聞てさて口がまこき坊主かなとをつと笑ひて打過ぬ

○爰に山里も或ものつまさる男とひそかにかたらひ互に情にやかくちざりあさからざりけり或夜のむつとにいつがいつまで斯ましのびなんやいのにもしておつとを殺して思ふまゝに契りあんなやと互にうちとけて談合したくみ出して或夜男に酒としめてゑい臥さしめ夜ふけ人しづまつて後まをとおと二人してをこの頭針のうちにころしさて家に火をかけ焼死たる体にしうたがふ人もなきやうもてなし死たるかばねにとりつき聲とばかりになささけびけり折ふし一休通り合せ此女のなき聲と聞き不思議のおもひとなしたまひてあたりちかき人になづね玉へばしかくどかたる和尚さへ給ひて此女のなき聲はおそれたるてうしにて更にかなしみの聲にはあらずふしきなりといひて通り給ふあともて今の修行とやは人間にてはあるまじむかしよりいまにいたるまでけんさん放逸の在處へ弘法大師のきたり給ふと言つたへり定めて大師さまなりとおぼぬたり聲ばかりき

てそれぞとあかじ給ふは奇代ふしぎの御僧かなとてみなくかんじけるとなり

○世に一休和尚は天下の活僧なりしとて諸宗ともよをしなへて尊ひけるなれを何れの土人長老もあめ給はずといふ事なしあるとき黒谷へ御参りありしに寺中の人々一休と見奉り申けるは今の世に活佛と人ごとにするこの禪師なりよき折かなればいざや當寺も待る善導法然乃書像に談をたのみ申かの念佛無間とてあざける日蓮宗も見せて禪宗の佛必宗だまかく此方の祖師は尊み給ふと高言よせばやかるき僧なれを定て談し給ふべしと申ければおのゝ此儀しかるべしと相談してやめて一休を方丈へ請じ申件の書像をとり出し賛とたのみけるに案のとく易き事なりとのたまひ先善導大師も賛していはくばさらりとひらき一覽あり筆ととりたまひ先善導大師も賛していはく

末法出現名三善導一 則是彌陀化身也
濁世末代導三惡人一切衆生易三往生
法然上人には

傳聞法然活如來 安座蓮華上品臺
尼入道同愚痴輩 一枚起請最奇哉

と即時にあそむしけれをさて社とておのゝ大きによろこび侍りて此兩佛も淨土宗とし

てかく讃をいたさば家の事なれば手裏ありとて又日蓮宗のあざけるべきにのゝるうれし
 き事こそなけれとかの讃と日蓮宗に見せて大きに威言をぞ申ける其頃ハ殊に日蓮宗と淨
 土宗とは中あまくて犬のいがむが如く牛のつき合がとく眼をみからるゝけれを日蓮宗か
 の讃を見て大きにはらと立一休をそねみにくみける其中に一人申けるはいやく一休の
 御心はものにかざりのなき直なる御事なりいざや日蓮大聖人の像をかへせ賛とこひて見
 んわれほどの褒美のあるべしと申ければ尤しかるべしとていそぎふためきて書をかへせ
 やがて和尚の庵もち参りて讃をたのひよし申ければ元よりかるき御僧なればやすき事
 どのたまひ彼の書をひらき御覽じけるに此像はさても少くかきてうす黄なる衣をきせけ
 るよと笑ひたまへば人々申けるをさん候いかにもけつからに大きにかへせたく存候へど
 も實は先日淨土宗法然が讃をじまん仕候ゆゑ口をしく候ひてとるものも取敢ず先ちくり
 けにかへせて参り候いそぎ讃してたべと申せば心得たりとて先の法然の讃と所々を直し
 て

傳聞 日蓮活如來

香座則是妙法靈

尾入道同愚痴聲

一遍題目珠勝哉

とまされ其奥に

ぼらすく小坊主まめの粉はぬりぼらす
 とそわそばされけるとかや其頃また永觀堂の住持黒谷の讃のよしをき、てよき寺のから
 かつなりと浦山しく覺しめしかはとかるき御僧なるよ何がな此方にも讃たのみ申さんと
 てまづ一山の人々を呼よせ談合せられければ其中に一人申けるは何と申すでもあるまじ
 先宗の祖師なれば當寺に傳る半金色の善導大師の肖像に讃をたのまれよと申せば各々申
 やうげに、是は代々當寺の重物なればこれ増したる物あるまじさら其方使僧ふ成
 り給へとて彼の半金色の善導大師の肖像と持せ一休へまわり一休に對面して申けるは黒
 谷の讃のよし承りあまりにうら山しく候ひて是まで参りて候あはれ此方の善導にも讃を
 あそをしたへと申ければそれこそ安き御用とてかの書をひらき御覽ありたながら一筆
 さらくとをかき給ひ元の如くした、め使僧ふわたされればかたしけなしとて睡んでい
 た、きいそぎ永觀堂へ歸へりしか、のよしを申ければ扱もかるき御僧のな本望とげた
 りまづ一山をよびよせ拜見せばやとてやがて人を廻しければ各々よろこびはしり集る
 さてかの肖像を方丈よかけ拜見しければいかに大文字ふ紙一首あり其うたよ
 くらからんころものすその黄になるは

善導大師のこそたるらむ

とあそばしければみな人をつとめぬらひ興をさます人もあり威にたれたる人もありしが今のよまで傳へて天下に一幅の名物となりけるとかや

邪淫戒といふ事を御はなし申さんさても月日のたつは手間のいらぬ事入日かとおもへば明てひるになる又八ツ七ツの鐘は諸行無常とひきぬるを余所に聞事かなとて此無常といふ事とさへひとつ心にわかれねば余り後生は遠き事はなけれども世々ありくと千年万年もあるべしと思ふよかりあらゆる罪業をつくる事なりよう氣を付て見たまへ目と耳にふるゝ事一ツとしてながらへ止まる物でなく人の死別れ行はきのよまで語りなぐさむ男女今日はむなしくなり頓死はものといひながらも思たゆるやうのとは世間に多き事なり花のちり木の葉の落ち露霜のきへ雲煙の行へ水のながれのかへらす泡のはかなく淵わせになりあるひは山もくづれて海になり川もくがちなり長明が方丈記とみれば地震火事又幾度か幾千万の家居もめつしあるじと家とをわさがはの露にたへて書たる如く一物として常住なる物よりさばる物とをみな無常なれば我命もたのまれずしおればうつかりといつも十三月と思ふてくらす内にかの無常の刹鬼がせめきたるとき俄よあはてさばきては詮ない事なりかねて臨終の用心が第一じや談義説法も明日の日かあると思ひぬだんして夕をまたで死たるときは悔ても甲斐なき事とつねく

合点したまふがよしある人のうたに

あすあまふとおもふころにやだされて

けふもむなしく日をおくりけり

といふふおそろかれよしれぬは人の命談儀をきくもけふがかぎりなるとおもへば一事と聞も大切に思ふ道理なれば此心得がよしさて談義はなしようちつゝいて大悲經の文中の種の字に心を付てはなしました昨夕のは彼の人を殺し子をころせし事は付て殺生のむくひを申ましたか逆もの事に殺生戒よりついでに五戒のすがたをばなし申せどの御望ゆる今晚は邪淫戒の所大ていあらしく申ませう物して戒律については五戒八齋戒二百五十戒五百戒十重禁戒四十八きやう戒とて異類異形のいましめをば梵網經四律等にあらたなる中に儒は五常をもつて國をおさめ佛法は五戒をもつて惡をやめさせん其ころばせはかなじ物に侍る先此邪淫戒といふ文字はよこしまに淫をかかるといましめらる我妻よあらぬと妻よする事を邪淫かいと申さるほどよ此戒と在家戒とも申なり出家にはいらぬものかと思へども出家よもさましくあり是はたいかのくゝの身のうへと思ひ給ふがよいはづの事妻といふは女の手前から男を妻といひ男よりも我女と妻といふは男女通する詞なり鹽屋判官が妻の方へある者文をつかはしけるに女の方よ

りの返事のうたよ

さなきだにおもきかうへのごよころも

わがつまならぬつまなかさねそ

とよみこしたるは何れもおぼへのある事此やうなる不義の事をするゆゑよむかし今の代まであらぬ死とするものあまたあり何國も同じ色の不義京大坂には殊に繪草紙に賣るゝものあまたあり現在に恥をさらすハ淺ましき事なり扱未來の事は經文の邪淫の罪衆生をして地獄が畜生におちもし人の中に生るれば一種の果報を得る一には婦貞良ならず二には二の妻相争ておのが心ふしたるはずと説給ふは老めの婦貞良ならずとの今生にて人の女房をぬすみたるもの後生にたま〜人間どうまれて女房もちても其女ひたと又余の男にあひて我心にしたるはずとなりそれゆゑよはらとたて、又聞男めをおさへてく〜つてと心意のほむらをもやそやうなるを婦貞良ならずといふ義なりこれみな報ひやうのしなをあらはすもの二に兩の妻相あらそふとは或は本妻の手あけをねたみ妻は本妻をねたみ針をうちたりとくがひなんせしてそねみねたみたるは大きな禍ひとなる誠まことに國に讒言の臣下あれ君のならずほろぶとは聖人の事は下々に多きものは夫婦いさかいなり大きな壁としてつかみあふやらなくやら敷がねをは

なにかけて後はづかしき事をわすれて常はかくす事もわめきちらしあたりほとりの外聞も方便もかへりみずとがもなき鍋をわるやら釜となげほるやら道具家材たまつた事なし何事をも思へば々のりんきより事ふこりての騒動これははやとてもかんにんもせまじ又それなる時宜でもあるまじとおもへばいつの間にならなき寢入してたつた一夜のうち中直り何の氣もないかほしておるせつるく人のあつかひ中直しなかつちのときは角もはゆるきつ相して明朝はうれに引かへ小ばなしあるはさて〜おかしい事と人の指さまをして笑ふとしらぬといふ其人もおのが非わ見へぬものにて何國の夫婦いさかいもみなにたる事は等のも乃いひ口舌があれば面々家職におこたりていかほど損のたつ内證のつづれやらしれず然ともたび〜有ゆゑに終ゝ家のほろぶるすいさうといつれもおもひあたりあるべき事也それまでは遠い事先此邪淫戒といふ事は天下の御法度なれば道を心さし義理をたてんと思ふほどの男の念もない是等の非道はせぬ事じや一心さへみださねばそのまよひのやむといふはなしと申さん

○正月元日より三日は元三といひて歳のはじめ月乃はじめ日はじめなれば一天四海の人々のかしくきも思なるも愁あるも愁なきも買もいやしきもいはひよろこばざるはなく屠蘇白散にはとぶろこなりとも續につけ御鏡すはるとて尻もちなりともつきてそれ〜に

いはひませるありさまの誠まことに昨日きのうにかはりたるにはあらねもと空そらのけしきものどやかに霞かすみわたり大路おほじのさま松まつ立たわたし家いへは長ながき代しろのためしとてしめ繩なはひきめぐらし昨日きのうの夜半よる過するまでは人の門かど打うたゝきて何事なにごとにかあらんことしく足を空そらにまどひたるもたゞ一夜いちやあけぬれば引ひかへ心こゝろもゆるくと又晦日つごひの來くるべき心こゝろもなく野邊のべの小松こまつに千代萬世ちよばんせいをいはひそめいつ死しぬべきものとはなしに萬よろづの事ことをいみをそれ朝あしたの露つゆに名利めいりをむさぼり夕ゆふの陽ひに子孫しよんを愛あいし魅まが茶ちやうすどめぐるがとく同じ事ことをぐるりくと五百七十年七ごひゃくしちじゅうななまのりといはひて世よと秋風あきかぜの心こゝろは露つゆちりほどもなき人心にんじんを一体いつたいと加かしく思おもしめし誠まことにおろかなるかな朝あさがほの日ひ蔭かげ待まちまもさかり久ひさしき花はなとながめかけらうの青天せいぜんは羽はとふるひて樂たのしむ間まもなき世よ中に糞くそに箔はくぬる正月しょうげつとばたゝ時の間まの煙けいとなりなんと打うち見るよりいで物もの見みせん人々ひとびとよと墓原むらばしへ行いて餓饑うせうせいとひろひ來きり竹たけの先さきにつらぬきて正月しょうげつ元日げんじつの早はや天てんに浴中りくちゆうの家々いへいへの門かどの口くちへこのとくくと彼かのされかうべをさし出し御用心ごよしんくと歩あ行りたまふ昔人むかしびといまはしくとて門かどさしあめて居ゐけるより今いまは正月しょうげつ元日げんじつは門戸もんことさしけるなりといはりしかるに一体いつたいを見み參まらせて或人あるひとのいへるは御用心ごよしんとは尤なほしくなりたといひいひかさりても終つひはみな人ひとかくのとくされども世よの習なづにてかくいはひよることぶ折まに其そのむくつけなきしやれかうべをば家々いへいへへ出いさるゝ事ことハ御ごちがひならずやと申まければさればよ我われもいはひ

て此こゝされかうべを各おのづかに見みするなり目出めでたしといふといか心得こころえけるぞやむかし天照木あまてらすき神岩戸かみいわをひらきたまひしより事ことおこるといへども此こゝされかうべより外ほかに目出めでたき物ものはなしとてよめる

にくげなき此こゝされかうべあなかりこ

目出めでたくかりここれよりはあし

是見これみ給たまへ人々ひとびと目出めでたる穴あなのみのこりしはめでたしとこそいふなるを昔人むかしびとかくとはしるらめどきのふも過すし心こゝろならひにけふをくらしてあすか川の淵ふちつねちらぬ世よ也なりハ目めに見みぬはしに風かぜの音ねにもおどろぬ人々ひとびとに用心よしんせよと思おもふてたゞ人は是まにまならねば目出めでたき事ことハ何なにもなしとのたまへば諸人しよじんこれと見てさても賢かしこき聖ひじりとてかがまぬ人はなかりけり

○一休いっけのもとに犬いぬあり或あるとき子こ五ごつうめり其その五ごツの子このうちひとつと親おやいぬよくみて乳ちとも自由じゆうにのまさずしていがかみくひふせけり下人げにんども此親このおや犬いぬをよくみうちけるがある夜和やわ尙なほの夢ゆめふつげていふ我身わがみを前生ぜんじゆうにてかしのといひし遊女ゆうにょにて侍はにしが五人ごにんの夫おつとを持もて候まうひしが四人よにんはとにささけある心こゝろざしにて淺あからず思おもひしが一人ひとりはいつわり心こゝろ多くまて却かへて我われをわづらそまけし事ことたひく侍はにりしかば心こゝろよく、思おもひあがらうち過すぬ今いま此こゝ五ごツの子こはかの五人ごにんの夫おつとなり四よツはひかしのささけ深ふかきが故ゆゑ乳ちとのましめていととしく思おもふ



也一ツと我となやめし夫なれば乳をさへのまさん事心にく候ひてかく當りしありとこ
まやかに前生の事をありくとかたりしと一休旦那のうちへはなし給ふと也

○七條邊に有徳なる町人ありあるとき佛事供養のため諸出家は申に及ばず乞食でもかく
のこく慈悲としけりあるとき一休を申入しゆく不審ども尋ね次手に問ていはく何れと
さして善としいづれをさして悪とするや和尙こたへていはく善悪かぎりなし只善惡をし
らんとならを其よし惡をなすみちもとにあるべしかれよ行て尋ねよと答へたまへを亭主
尤と感じける扱和尙たち給ふ折ふし雨降ければ亭主暫く待て雨と止給へと申し一休申さ
れけるは

ふらばふれ降すばふらさふらすども

ぬれて行べき袖ならはこそ

と言捨て出給ふ

○加茂河ちかき邊に五郎右衛門と申ものありかれがうちへいつの頃よりか犬一疋來しが打
どもさらざるある日人と頼み二三里外へやりけるが又歸りける此度ととらへうち殺しす
つるにまた同じやうなる犬來るときならず夢見おしければいか心もとなくおもひ一休
へ参りくだんの事を一々はなしけるに和尙のいはくゆめく其犬にあらく當り玉ふなそ

れは其方が前生にてその犬のものを負つひにかへさずして今人となりぬとなりてこ
に來れり至くわたくし事あらねばすつるこそころしたりとも業力の犬なれば其家をは
るゝといふ事あるまじ賈やうしなひたくのかれに米壹二斗はどあてがひおきたまへ喰
たらん時をかへるべし左なくば何とすともかへるまじとぞ教へ玉ふさらわざと歸りて
米とわたへ置けるにある夜の夢に汝われをなやます事たびくなり打せもころすども
せまじされども今その佛和尙におしへられ我をはおくむ事まんぞくせりしかれを汝が
もの喰尽す事やうく一斗ばかりあり其間は我につらくわたる事なかれとぬふと思へは
夢さめぬ此者いよくおどろきさては和尙のをしへに少もちがはざりけりと猶々ヒを
はどこしけるに彼がいひしとく一斗の米なくなりてのちくだんの犬かきけすやうにうせ
にけりふしぎ成る事なり

叔知恵にまよふ女意といふ事の候もろこしに林茂先といふ人ありしが學文しやなれど
も前世の因果かいかにしても貪にくらされしが其隣に大きな分限者の文もなる仁
の女房わが男の不學なると氣のどくがりかの隣に林茂先が才覺にはれてある夜ひそか
に忍びきたりて學文のまどとほとく音つれたるを誰ぞと思ひてさしのぞけはどふ
してこふして執心でぶぶつてと袖にぬる涙をつゝみかねてかくさまよひきたり侍る

とふかく思ひ入たるやうすよてくどきけるをたれぞと見ればとなりの内義也もより
 器量も人にすぐれとよ金もちの奥さまなれば我がやうよ貧なるものがこちから想した
 るとる今どきの後家さへ承知すまじきこれはかたじけなき事御意はふもく下地はいや
 てない事夢かうつ、か最早人しつまりあたり誰をば、かるものもなし明日は開浮の
 ちりともなれこれはじぎに及ばぬところなんと若ひ衆此やうな事があらばなんといや
 とは申されまじすあ十人が十人ながら飛つくところを此林茂先じつとこ、ろを一つめ
 しばらく物もいはなんだがさすが學者といはる、ほざあつて皿はどな目をひき出し
 の女房をきつとにらみつけ去ては其方は人てあし妻一人もちて居ながらかゝる仕か
 たの淺まじや天地かくつがへるとも道ならぬ事と某はいたさぬそはやく歸られよとま
 ぶふたとはたどたつるとき女房のなみだをながま是はどに申事をつれなくもかへし玉
 ふかせめて一夜なりどもとなげさてたちのかざりしを林茂先はしり出て季下に冠をた
 いさす瓜田一履と直さずところいへまたなまめかしさくどき事をとて小がいなどを
 引立かへしければ力ねよばすすこくとたちかへりぬ此林茂先を其明る年つひに官位
 に經上り榮花にさかぬける道をまもる人のこゝろのいふふちがふてゐるではないか今
 ときの物讀でも道と聞ても耳と口とにかばぬて居ながら不義なる事は結句もんも

なる男の律義なるには劣りて悪事をするがちなり是と世話よいへる論語よみのろんで
 いらすといふは此事ならん皆さ文がたも朝晩口を結構言せられんがそれは世話しり
 のせはしらすといふ物ぞかし面々の身のうへは柵へ打あげおきて人の噂はいひ安ひも
 のでおざる又利口さふ申拙僧もそれは同じ事なり人の身の中でしこひものの上下二
 まいのくちびると舌ばかりふるくども大事な事心と身とに先おこきはせられよ此心
 の萬事に通る肝要のところでおざる或經に人となつて他の女とぬすむものは鴨ようま
 る、と説玉ふは何たる因果有て鴨には成ぞととへば鵜のさじのといふものはめい、
 雌鳥と一羽づ、か、へて道をたし鳩といふ鳥は別て其やうなる事のさびしい物に
 て都にのらない田舎では飼鳩といひていろく、羽色の見事あるをあつめて家を作りなら
 べ置にもし雄鳥のゑをひろふ内にも隣の鳥留主のうちちよつとのぞくを見るときま
 んどびあがりて其男鳥をくひころすほせよせちがひ又わの女房鳥もつ、きまはりせち
 がふはいかさまよとなりの男鳥ののぞくからは合點の行ぬしかたといはぬ斗るればく
 少々にても其けふらひなる事もならぬに鴨といふ鳥は池やあせ道にいろひ事むら
 り居るよ是は誰が女鳥これたれが男鳥といふともなく常住ながれとたつるやうよ一
 日ふ男鳥の十羽や二十羽といふかずをしらす男鳥もまた女鳥の五羽も十羽ももちてあ

ちらちち相逢ふこれ此身になるもの何が成とれもへバかの間男したるもの女房をぬすみたるものがみち此鳥るいに生るゝとしりたまへ此やうなものに生たくば好色のわるひ事を折角して思ふまゝに不義をなされよ御満足ではべらん誠におぼすかなる樂みに永劫のくるしみをまふくる事はあまりに愚かなる事なり過たる事はかへらず今より思案して見たまへ別にかえる事もなく刹那の嬉樂は現世後生をとりうしなひ苦しむにいたまじきと一分別れて見やうならばこゝじやうれに付去所は男女より合おかしきけんくせせられたりなしといふて聞せませうか先未來の物がたりと一寸いたさふ

○或人一体に問いはく人は死て躰なくなりはつれ共魂をどまると申がさやうにてもあるまじきはたましひが死なまにあらば躰はあくとも矢たり其まゝ居て物がたりなまもしさふな事よであるまじきか何れふしきなる事にて我等が存るよは佛に成たるものまたのしみにほこりて愛の事をば打わすれ來べき心を露もあるまじ又地おくへ行は鬼をもにかしやくせられ照少しもあるまじ又かやうにてもなきものやらん世中に安樂とて死したるもの、來てさまゝの事をいひなせると承る何れ是はいかある事にて候や和尚のいはくさればわれも其儀はしらす候へども若きとき談義などをちと聞たるが誠のうそのしらぬたまじむといふものが有て佛とも鬼とも成げに候うのくせものがるんま王とやらんの

前にて公事奉行の手にわたりしやハにて作る罪とくろ鉄が赤がねかはしらねをも帳とやらんに付ておき鬼に見せてまづ是程の罪人なり急ぎ呵責せよといふに色々の鬼をもが受とりてさまゝのせめにあはするよししやばにて作るつみほせせむるといふさりながら毒藥へんじて藥となるといふ事あればさのみつみの多きもあながちになげくべき事にはあらじと見たりのくいひしときば

作りれく罪がしゆみはとあるならば

ゑんまの帳につけどころなし

とあるときは鬼といふものも鈍なものなり釋迦が一代の藏經はみな人間をいためんがたゆなりあらつらにくの尺加とのやいろくのうををつきたたまへりそれはとへを一字もいはぬといひ給へり又さふかとおもへばしゆつさんの語には一佛淨土くまけんはうめい艸木國土悉皆成佛さう木も佛になるともいひゆちちとひた物に身ぬけばかりいひちらし人間の永代まよひの身よちからまてありとおもへを又うたふひ舞も法の塵穢をみどり花のくれないあらおもしろのはるのけしき

しやのといふいたづらものが世より

多くの災とまよばせるかな

○去つしきの天井の蛇とかきておける其座敷にて酒を飲けるよ盃の中へ繪のうつりしをのみてそれより煩ひけりある人きたりてわづらひのやうをしかくの事にてうれよりかやうにわづらい給ふよしをさけりと問ふふいかにも其通りなりと答へければ或人の申さるは左やうの事あらば何とも気分あしくしておさふしも是のみ心にかゝりてわづらひも成べしさりながらさやうの事は一休和尚へ行て子細を御たづねあらせじかるべしと申さらはとて参りしかくの事にてかくなやみ申也いかある事よて候や和尚の御しめし預りたくぞんず是まで参りて候と申ければ一休聞給ひやめてしめしたまふ其語にいはいまほろしを知節敵のうべんとなさす一切のしよはふを皆是まほろしなり何なれば水中影像をじつなりとおもふや愚也早くなんぢが自心をあきらめよ

とて扇をもつててうくはたき打給ふまづ右のころはまほろしとしりなば方便は有まじ一切もろくのなすわざは何事によらずみなくうなり水のうちようつろふかけをみて實のじやなりと心得やまひとするそれおろかなる心なり早みづからの心を納て見るときは實か無かあらはるべし其心納るときすなはち病本服すべしとしめし給へば此ものやがて得通して頼によくくまわんするふ天井は繪のあるといふ事思ひ當りそれよりして必

すきとなりやがて本ぶくしけり何事も善惡の源とたづぬるときは心の一ツより生ると見へたり扱ころ三界唯一心といわり

○伏見深川の里に森本善兵衛といふものあり其内につかゆる下女もとより邪見の女よて朝夕の飯の残りともさしとて非人にも呉ずして普揃へ捨しに其ことくは皆蛇となりてはひ歩行家内へ還入しかば家内のもの人々おそれいか成とやらんとひしめさける其折ふし一休其近所へ來り居給ふよしをきいてやがて使をもつて請じ奉りことこのよしとかなるに和尚きこしめし扱々るれば笑止なる事かな是れ此身上のくづる、瑞相なりそれは全く蛇ふてはあるまじ皆飯の残りしを捨し勢ひあるべし其蛇をのこらす釜へ入てたきて見るべし必らずめしとなるべしとのたまふさらはとて教にまかせ皆あつめて鍋に入一休經呪とじゆし給ひたかせたまひしに成程されいなるめしとなる此飯とゆの女は殘らずくひ尽させよ少も残るならは身代わやうなるべしと仰らるゝさらばとてかの女にくはせけるに普喰つくす事ならずして又かくしてすつる此下女あるときかのれが在所へかへるに進みて蛇よさへれ死けり日をへずしていくほどなくして天厨あたりうせしおそろしき事なりさるほどに一ツぶにても喰殘したるあらば決してれろうかにすべからずとて和尚旦那方にて折々御物がたりあるを今まよしするす

さて男女いたづらの評判ありしと御はなし申さん此ころ町を通りたれば四五人うちよつて何やらんせんさくしけるを聞ば世中に不義をして浮名ながしたるもの、事を評判して一人の男のいふやうは世の女ほほいたづらなるものはない一人のをつとふ定まりて居ながら不義なる事をしたがるはゆだんがならぬ世界じや七人の子わなすとも女に心ゆるすなどはよふいふた物といへば一人の女房はらをたていや／＼それはわるひ了簡でおさる男といふものほほあさひかないたづらなるものはない我手前に女房一人もつて居ながら人の女房をぬすみたぶるの正眞の生盗人じや其くせに男の心と川のせは夜に七度かはるとはよふいふたものといへばかの男とせいていや／＼男といふものはれせけにもいふて見るものじやに合点する女がいたづらものといふ詞の下よりいや／＼女の方から盗んでくたされといふ女房がいつくにおさるをふしても男がわるいや女がいたづらものとしたがひに大きなけんくはふなりて其あたりがもや／＼にへかりましたこれは婿のわかぬせんぎでの侍らぬかえんぼう男が口説たとても女が合点せぬばならぬ事なりたどへどのやうなよい男が火をくへといへばとてくひはせまひが下地がいやでないから御意をよしとつひらちもあひ事になつててけるすればいひかける男のひとりであるでもなし女もまたあしく世の中にはまたなるはせ律義なる男に女の

方より文などやりてくせさかゝるがあらばうれも一がいにははなしたがたしつまる所はせちらへもかた付てきずは付られぬ二人ともよ悪といふがよい了簡といふもの也是程になきとさへ二人で婿を明でかきはぬとかく互に心とひとつにしてしめし合せねばならず千人万人の中でもせまひとかもふ事の我心ひとつてたしなみやすし此界をよく合点すればせちがよいわるいのせんさくはいらぬと思ひ玉へ然ども人にそののかされぬやうにこゝろをもつものはまれなる事なりみだる、心のうは氣なるははちをさらす高いもひくいも身を持そこなひ恥ぢよくをもふくる事の皆此やうなよわき非義なる心よりたこる事なれば若ひ衆はよく合点めされて大事なりとれもひたまへ女の心もちほうへは梅柳のやさしき枝に春の雪つもる如くよほ／＼とほのめき心の内は石金もかたくもち玉ひてかりそめにもあだなるふるまひをせぬやうに化粧ものこしにも氣を付たがよしとさる上つ方の教訓の文に遊したるか眞實なれども今どきは皆さかさまにして上はかたく見せ内心はよほく心得るはひが事の第一じや女義に善惡のこゝろ申さかせませう

○愛にはなしあり某どのやいへる人の奥方相果られけるに今端のとき遣言にわれら此年まで佛とも法ともしらすじてかく成はつるなりことに女はつみふかきよし後の世いと心

もとなし承花はむらさき野の 一休さまは今の世の蓮尸とやらんいふなる間我等が引導を
ば和尚さまへたのミ奉りて得させよと念頃にいひれきしかば妻子ないく一休の草庵へ
参りて其由とかくと申上ければ其年まで佛とも法とも知らずは大かたの事にてはうかみ
がたし去なから我等が一句とさづけそくふべきなり水葬にせん問鴨川へつれ行とて其ま
座と立ち打つれ川のほとりになりしかば其死人を出せよとて和尚かの死人の首に繩を
付けひつかたけて川岸に立てのたまひく

河ふねをどめてあふ瀬のなみまくらうき世の夢を見ならはじの。れどろか

ぬ身のはかなさよ

とて川へさんぶとなげすてはや一かへり給ひける妻や子どもれどろきて御氣ももしやう
やろなるかこの一句い江口とうたひ給ふなりかゝる事にてはうかびがたしとてかの死骸
を引あげ念頃にとどめてある寺の上人におん導たのみければ其背よりかの夫も子もさま
ぐにわな・き夢見けるは一休の御引導にてうかみしものをよしなき上人の引導にて引
もどされて中有の旅にまよふに又一休さまとたのみて我をすくはせたまはずは夫子とも
取ころし手と引て三途の川を渡らんとまおつくと夢まぼろしに見へければ是はとれどろ
か一休和尚へ参りて其由をしかくと申上ければ我よく引導せしに又異人をたのみしゆ

恙なりとてふた、びかへり見給ひねば親子のものさまぐになげきしかば扱も不便の事
やとてうづみし死がいを掘出させまた加茂川へかたけ行川岸よ立て一首
大水のさきよながるゝとちがらも

身とすてゝこそうかぶせもあれ

とてがはとしがひを川へなげそてかへられければ其夜親子の夢にありがたや御引導にて
今こそうかみけるぞとて白雲にうちのみて西の空に行ければみな人ありがたく覺ぬけ
るとなり

○一休和尚山婆のうたひと作り給ひしときひぬい山に中よき人ればしければ談合に登の給
ふは佛あれば衆生あり衆生あれば山姥もありといたしける此次をいかはせんとのたま
へば彼人もさすがの人にて定て柳は見せりとなされつらんと有ければ一休さてもよく推
し給ふものかな柳は見どり花はくれあひの色々扱人間に遊ふ事と仕らんとのたまへばさ
こそといひて興せられ誠に同氣相もとむる心ざしいとはづかしく思ひけるさてきよ次
手なりぬい山の堂社を拜みめぐり給ひしに山法師ども是を聞て一休はかくれなき能書な
り何にても書てもらわんとて手にく硯紙を持きたりてたのみかは一休思しけるは聖
遺のあて字とかや定て文盲なる法師どもならんと何が書て取らせんといかにもよみぬ

たき一句さらく一筆に書ちらして遣されければ一山の僧よりあつまりかゝる能書の名僧此山へ来る事の後の世までも寶物ども成べき語とか、せ置べしとて其中の老僧のいはるは先より各かきてもらひけるは一字もよめず又語も余りにみじかくて此山の寶もが成たしいかにも大文字にて長く書てたへよみがたきは有ても詮なしいかにもよみ安き事とたのみ奉ると一山ともに望ければ一休のたまひける紙筆は候か中々古へ大師のあそばしたる七八尺の大筆あり紙は何ほどなりともつぎ申べしと申されければさらば紙つがせ給へ御望の通長々と大文字を書よくよめるを仕へしいそぎ紙をつがせ給へとありしかば何ほどありとも紙は御のぞみ次第とてひたもの長くつゞほごにぬい山の金堂の前より坂本の人家までなごしくも紙とつぎけれをさらば筆をそめんとて墨たつぶりといくませべたと紙へかき付て一さんかけて不動坂まで一筋にひかれてよめるか法師だちとのたまへばいや何ともよめずといふ又墨つぎて不動坂より坂本まで一筋にはしり引よひきつゝよめるかくとめき給へを一山の法師たる肝をつぶしいや何ともよめずといへば是はいろはのあさきのくだりにあるしの字なりながくとかきてよめやすきは是也とのたまへを皆人興をさまし扱も聞及しよりたどげびと哉と一度よどつと笑ひて興しけるとなり今の世までも其しの字ひぬい山の寶物となりて有けるとなり山法師たちも望し事

なればいやともいはれぬ御作意とみな思ひけるとなり

前夜申おきました女の賢愚の心のもちやうと申はさるどころにうまれつきのうつくしい女房衆がありしに亭主の留主のうちに行一人あつて内々笑貌よき内義なれとなるべき事と思ひよきすきとくれくときければ女房何となき顔にてそれは忝なき御執心其うち折とみあわせて御談合申べしといふに男うれしさがきりなく此上は亭主をたらかすまでの事と前方よりひつましくとさら亭主もまづしければ無心もいはぬにこたより金銀に氣を付て借などしけるに男は其心いれどは夢にもしらす後日のため手形書申べしといへば彼の男隔心なき跡にて合力とはあまりあなづりがましけれをたゞやり申べしとて金の四五兩もつかはしとて二三十日も日かすたち男のひまを心かけてひろかに内儀にちのづきせんと申たる事御談合せんと申されたるは何と談じ合も今宵ほどよき首尾もなしとをなだれかゝるを女房かたちをたゞしされは談合と申は御そんしの通り私も男もちたるうへは我身ながらわがまならずあなた望のとふりを亭主へ談合して見るべしと思ひ先日よりいひ出すやすがもなくてとややくと思ふうち運なはり申たり今少しまたまへ明日も亭主と談し合亭主のゆるぎを受たらば御心にしたがひ申べしといふに此男大に驚き談合とは御亭主との談し合かそれは何とも迷惑なりと

て念頃になすなかに不義なる事をいひかけしとさげすまれんも迷惑なりとに短氣なる
うまれなれを我等が命にかゝらんもしるべからずさらば此事の決して思ひとまりか
さねて申出すまじ必らず御亭主に御さた御無用なりとさましくとわりてかゑり其のち
はたましく行ども此女の手まへもなんどなくはづかしくなりて後々は終に遠ざかりま
したなんと此女はかしい女房と見せました又人によつてたましく不義とせまじと思
へば人の害になるとも思はずたけりまはるもあり去年の冬であつた日ころ念頃に入
いたす者がひとり来て語りまする夕部さる所にて二三人はなほに参りましたが元來
心易き方ゆゑ夫婦衆のと一緒にたつへあたり四方山の咄しのうちひとり男そさう
者にていゝなりたりけんかの内儀のふとも、のあたりへ手か足かさはりたさふにおさ
るがかの内儀其ま、こたつをうつら立といふ物にはつと立て人の女房に手をさすは覺
期してしやるかよの女とはちとちがふ所こそ多きに男のあるそばこれになにとしたる
じだらくぞやいたづらな女にはそれやうな事したらうれしかろうほんに木のそらへの
ぼりやるぞと大聲上て勝手へはいりましたか此手さした男たれと知らねと自身に覺
れは顔に血とあげ巨たつの機にひたいと付て夢になれとめいわくがるわたくしはそ
に聞何とあいなつものしやうもさく汗をたらたらかきわたるに亭主はさすが世間をひろ

くする人はどあつて物じてあの女は少しの事をも仰山にいふものでござる此やうによ
りこそつてあたるからは手もあしもさなるまひものてないふさやうをなやつにてはな
しのじやまと申せしたましくかの遊ひ玉ふに無亭主ぶりなぞかく何れも御かまひ
なさるまじさて今のをなしの跡はとふでござつたといわれしにやうく色をなほしか
へりましたがこれ何と賢女といふものでござるかど問ました此やうなる愚な女もあ
る世の中これほど人にきずを付めわくからせいで女のみち立ふとおもへば何のさ
たなしに我胸のうちにてすむ事なるにかに間男をせぬといふ潔白を見せんとてたけ
しく是はあまりなる事也能々合点してみれば此やうなひんじやんとはねまはる
女が結句内しやうでいたつら事をしてゐるものじやとさる人のいはれしもかくあらん
事ぞかしとかく女は物事しづかに只心の内ひとつとかさう持が道といふものでござる
こゝとさつとのみこんだるがよしと心得べし成實論の偈にいづく愛欲無厭鹹水を飲
轉其喝を増が如しとあるは此色欲にふける有さまは熱のからき咽のかはく物と仰山に
取こみてひたもの湯水そのむ物の如くのもんでゝあたる事をきは丁どそのやうなも
ろ又たどへていはゞ犬の枯骨とかむにひとしと有は犬がひたるきあまりに死人原に入
てしやれたる骨をくらふにかたきものなれば已が口中とやぶりて血の出るを知らせ此

汗は骨より出ると斗覺て終に舌も咽も己がでにくひやぶりに死すといふに似たりかつへたるるときにはあと先覺へずくらふは愛欲さかんになりてかんにんならぬと何の事もうちわすれて主あるものを盗み終にそなんなくとらへられてはじをさらし世の人にうき名をうたわれて我身と我心でころすは此まよひの二つとしり玉ふへし戀の源とさみしてみれを濟とにおるとのふたつなるは次に御をなし申さふ

○さて御目のさむる御はなし申さふさる田舎人はじめて京都一見のために登りけるに或人のいひけるはその方京都へ登らるゝならば文を一通よとつけ申べし所も名もしかとぞんせす定めて都は通りへ明らかにしれ小路へは猶しれやすきよし承る何方にて尋ね候とも心やすくしるゝと申候間此文をまぬらさる口上にても申きかすたしかに覺はられといけ玉へ則名はさにし秋北春南五百の涙の立かへるとたづね玉かれもし口上りするゝ事もわらば此文と見せて尋ね玉へとて渡しける此男文盲なればいふより早く忘れさて都へ登り文をとり出し人に見せけるに讀もの有ともことばりのとふりしるものなをりける此男申やうさてくゝきのどくなる文をたのまれしものかな是をとまけすして歸りたら難まれしかひもなくふみひなしといはれんもはづかしたづねんとすれを埒明すとやせんかくと繁じわすらひしがある人申やう此文を千日千夜たづねらるゝとも合點するものあり

がたかるべし所詮この文をもち是より北西ふむらさき野といふ處に一休和尚とて名智者のまします此僧に尋ね見玉は發明ましますほどに定て教玉はむ早く參られよ先都ひろじといへども是と合點し沙汰申ものりかつて覺はずとかたるとき此男さらそ其紫野とやらんれしへ玉れといふにくわしくれしへけるやがてたつね行き此よし申ければ和尚文の上がきと御覽して是は都の烏丸通りとそこにて雨や千阿彌とたつね給へどくばしくをしへ給ふ此人さてくゝかたじけなしたつねまぬるべししるま此義理ととても事にとさきかし給へと申ければまづさむしむき北はる南といふときはみなあめ也五百の涙の立かへりといふ時は五百をふたつ合るゝ千なりさてなみどるゝとさきに雨やの千なみとあらてを讀くたらずとをしへ玉ふ

○又和尚御在世のとき下京松原通中ほどに制札あり其札のこしらへようは板を丸竹にはさみ其竹のようお錢と一ぱい入札の書やうは

一餅食たがるもの、事

一酒すひたがるもの、事

一茶のみたがるもの、事

右之通くひたくば買て食べし只世中は皆錢也已上

かやうに書付立わりしの一休折ふし通り見玉ひさてくめつらしき制札のさき思はず
 細めるべしと立よりうかひ見給ふに世の常のせいさつとはかはり柱と竹にてこしらへ
 たりしは心ありけに見へたりとて供のものよ汝はまの札を取てかへるべし我少し思ふし
 さいありはやどくくと仰らる、男申やうは是は和尙さまも覺へざる仰られ事かなか
 りそめにも是の定めて公儀よりの制札ならんしかるをむげに奪とつて歸らば後のわざは
 ひいか、あらん我等に於てお御めんあれと申ける和尙さま、給ひ尤も汝がいふは斷なれど
 も去ながら子細としらねば道理なり先此札とはさみたる竹の内に錢あるべし此札をうば
 ひ取べしとの書付なり早くとりてかへるべし若た、りあらばなんじが身にはとがはるく
 るまじ此一休の心ふまかせおくべしかつは我あたまをまん丸めし身なれを半錢も身には
 付じみな汝が尤一世に、とらせん早とれくとす、めたまへのさやつもほしくや思ひけ
 んさもあらと取べきとてのしりよつて押たをしまづかなめと引てみてあつはれ和尙は神
 通にてましますとよろこびいさみ打かたげられ世の中にぬれ手てあはごつかもどわかや
 うのとといふらんとてちどり足にてむらさき野へぞりる其後公儀に此札と一休う
 ばひとり給ふよしほのかに聞めし和尙へ使と立られけるに和尙かしこまつてやがて目代

へ上り給ふ奉行のいひくいに御坊何とて往還に立し札をうばひとられけるが一休され
 ば制札のれもてを見候に餅酒ほしくは買てくふべしよの中には錢があるほどにか、れ
 候扱も御公儀は御じひにましますのなとありがたくぞんじ殊に貧僧の身なれば取てかへ
 りて候と申さる、奉行聞しめし根本これは君より御じひのために國々にたてられ此書付
 の面をよく合點いたしたるものは此札とうばふべしとのしたくなりよしと歸へり給へ
 るしこまりて一休はむらさき野へぞり給ふ奉行の曰さてもくあつ坊主ならではか
 やうのふだと引ぬくべきものは覺はずたとへ心を知りてうばいたく思ふともとやかくと
 思案しあるひと世間とは、かり即時にうばふべきものはまれなるべきに何のそかりも
 なくうばひしはきたいの坊主かな末の世に至るともかよふの坊主は二人ともあらじと感
 じ給ひけり

さて御約束の戀の源と申御はなしいたしませうまことに人の身を觀じて見れを地水火風
 空假に合してうすまかほのうへにはりたるどころを男女のかはり有て美人もあれば見
 にくき人もへだてあれども彼一重た下は高きもいやしきも不淨穢らはまきうみ血れく
 さきと包たる斗書屏に似たりつぼに色々のさいしきとして書をかきて見事なりと思ふ
 なかよ蕨を入たるがとくむさきものとのたどへなり先男女の八穴九穴とあるまづあた

まに目二ツこれもやよといふ物がながれ出とまよるよしたかひて常に汗が出耳にもあ
 かの出るを長崎療治といふ唐人のすがたしたる男が何やらん陳ふんかんといひて誰な
 りとも耳とよくしてもちふとき見れば異形のものが耳の中よりまきまき出てくる
 くきたなきものが出るこれも不浄なり鼻からと青ばあをたらし口よりはよだれをな
 し或は口ねつありて人よりてはさしむかひもなすもならぬはさくさいにはひがす
 る物もあり其外懸といふ其みなもをたつぬれば濟とにゐるとの二ツありて頂上より
 あなうちまで一つとしてきれいなものはなしそれをたい有がたがりて懸しがりの
 しむ凡夫の心を佛は見通してさてもかはいの衆生や誠にたのしみといふは此穢土をい
 どひて極樂といふ國に生れてさむいともひだるいとも思てでくらす極樂をいやがる事
 のむざんや何とぞしてすくひとつてやりたいと思しめせどもこのく我等はたゞ此世
 界のみに煩悩さまりに懸とまじていつまでか、に遊びたはひれ能事かしたしと斗思ふ
 より種々さま／＼の罪とつくり又しても迷にまよひをかかねてむなる、事がならぬは
 此邪淫といふひとつより事おこりてのせんさくなり思へばむさいものといひ少のまの
 歡樂に未來惡道にださいして長きくるしみを受ける事はやうもさいものすき扱邪淫と云
 ば人のつまをかすばかりのと思へるにはわらじ子をばらみし女をかすも邪淫の

内乳祖母を犯すも邪淫あるは非所といひて寺道場の内在家を持佛堂のあたりさて非時は
 盆や彼岸親先祖の命日逮夜さてはわが女房の心ざしありて精進する日持齋のとききか
 男何の大事かあらふとて犯すを邪淫また非犯とて若衆と犯すも邪淫のうちなりとある
 經文に佛の説玉ひたまかれを今どきの出家も男色をかかすはまた手がらのやうも人も
 ねもひ其身も殊勝なる心ざしてあると自まんしらる、と少と合點のしそこないのとおも
 へばそれよととり得があるといひ分をなし先此やうなとまで邪淫戒といましめ玉へば
 いて居たるがよし何と思もすきもならぬ御制戒これはまたかると戒門についてばうれ
 く四重四提二不定僧殘滅靜舍陀單陀五戒八齋とてどうもならぬつとめが侍る爰が
 了簡の付ところき、給へ五戒の事はさて置き一戒も半戒もこのやうな六かしき事なれば
 見ぢんもたもつ事はならぬしかれバ佛には得なりがたしこの法師も咄してきかせまそれ
 どさどらぬ内は心もとなしさて經文なぞみたまへ女犯は七百生三途よふち非犯は五百生
 惡道よしつむとあり女犯といふは女をかかす事非犯といふは若衆をかかすせかひに人の
 數何方向億わろふやらこの二つをかかぬものは有まい然ばいちんもほとけになる
 事はさておき皆々惡道へれたませうなのく落るふきまつた事いかにとあると佛のいま
 しめれたせられたをやぶるからいふちいで叶ぬ事さだめて惡道のせめは往生要集其外方

を談儀講談にも聞玉ふへさがこはらとも苦しきともいやといはれぬかしやくよわひ申すと思はそこへ落まいとて多年後生をねがひ寺参する事じやがどかくは我々ぼんぶの力で地獄へかちまひとせいはいはれず佛ぼさつのありがたいといふが大事の所なるぞ然にあみだ如来末世濁惡愚頓なる惡業深き身の一戒もたぬ惡人三世の諸ぶつの手をうちはらひ玉ふ凡人をすくひ玉はんどの御誓ぐはんむなしからず不取正覺とちかひ玉ふ此なむのみだ佛をとなへ奉れば身は不淨にあらふとも戒律をたもたぬか、る罪深き惡人と西方あこたなればころ助玉ふ一心不亂一念十念の御念佛のくどくによつて八十億劫の生死のきつなをはらりととしきり弘誓の舟にとび乗と大慈大悲の追手の風を帆を揚てせつなの間に極樂へ往生するは何とありがたい事よては侍らぬか扱又この法華經には惡人の提婆をいじめ龍女は女人の手本をあらはし乃至一不成佛ととき玉てた。一遍の南無妙法蓮花經に即身即佛をとぐるはうたがひなしとよく惡業はさんせすとも只まんぐのひとつで往生成佛は決定と思ひ取てとなへ奉るより外なし能たねといふ此念佛題目あるい種といふが此邪嫉これにて種の子の心がそみました又御咄しは次にいたさふ

○ある人牧溪和尚の御筆なりし靈照女の繪と持けるが一休和尚の活機なる事をしたひ讀を

たのみ申へまとしてやがて一休の御庵へまいりしかも、のよしたのみ申ければそれ社安き事なれ望の賛して参らせむと筆かつどりたまひさらくど書かのものに渡されければありがたくいたゞきさてもかるき御僧ふあとよろこび内へかゝり友だちをもよびよせ日おろの繪に一休の御賛なされ下されしどかたりければたのく、拜見申さんとやがて床にかけて拜見しければうなまじりふ

汝が親の策作り 馬祖にだまされて 寶を海にすつる
阿羅居士の娘

と遊しければ皆人よこ手をうちさでもたはけたる御事かな魔居士も靈照女も唐土にての賢人なりとみな人いひ傳へしほどころ定て左様心をもあそばさるべきかとおもひけるに格別なる御事かなまことに天下の活祖師にでましますとみな人感にたへたりけると也
○又一休和尚は金を山に捨玉と淵にならべてもあらん御けしきなれを元より一鉢のもふけより兼てたぐいへなかりけるに大晦日の暮方になりければ一僕中やう明日は元三なりなにをの参らせんハツ木の一合もなく青き銅は一錢もなしとあげさければ一休き、玉ひてうれば歎く事にあらずいざ出よとの玉ひて一掃ふりかたげ山家街道へ出玉へば折ふしかえらけ賣通りけれそのがすまじと追かけたり彼者ねどろさ一荷のかいかけを捨てにげけ

れば扱ころとてめしつれし僕にもたせて是としろなし初春をむかへ玉ふがはからず大名
 いて玉ひけるとて和尙を引導し請はればいや參るまじとのたまふ何とて御出なきぞと
 申ければ錢をくれなば行んどのたまふ安き御事哉何はぞか御用を申せば一貫八文はし
 くといへり安事と申奉りされば其錢をもらひて彼おひはざしたまひしところへ行てかは
 らけ籠に錢をく、りつけて札とたてられけるは先月の大晦日の夜の土器の代一貫八文但
 一枚に付一せんツ、帳けし玉へと書つけて傍に一句

貧のぬすみと偷盜戒はあらずいかんとなれば
 戀の歌も邪嫉戒にあらざる證據あり慈鏡和尙と
 て貴き聖乃よめるなり

まが戀はまつをしぐれよそめかねて

まくつがばらにかせさそくなり

と侍りけむとかやしかれバとて邪嫉戒をやぶりたる人々をはいひがたし
 我も貧のぬすみなれば偷盜戒をやぶりたるととはいふまじきなり

と書れけるとかやさて引導に出玉ひて曰

人は六道の錢とて六文出す汝は引導とて一貫八文出すさつしんがいちじう

さては汝は人に一貫貳文まされり十方又違わり行たい方へつ、と行成佛ま
 さにうたがひな一懸いかなとあらば有产地獄のさたも錢がずる

○或僧一休の活機なる事と聞つたへいか程なる道徳かあるとて大徳寺へ行てたつねかれと
 折ふし一休は門前の酒屋が方へゆき酒よたべよい前後もしらす臥し給ふところへ小僧ま
 たり只今唐僧とかや見へし大和尙の一休はと尋給ふはや御歸りあれと引おこしければ一
 休御めいまだ覺きうかりととしておはせしよ酒屋の亭主出て御醉眠御心よく侍りたるか
 と申ければさてはよき氣味やとて一首よみて亭主に取らせけるは

おく樂をいつくのほど、おもひしよ

杉はたてたる又六の門

とめそばしければ亭主大によろこひけるとなりか、るとあらへ小僧またきたりてはや御
 歸りあれ先に申せし和尙の御待かねと申せを答もなく又うちかへしていびきかいてろり
 かへりて寢玉ひしかば小僧のへりて何程おこしてもおきあがり玉はずと申せばよし
 その寐入て何とも思ひよらぬと引れこし一間のけたらば志いよくしれ侍るべしと彼
 唐僧一休の臥れるとよろへさし足とて行枕元へどうと座し何ともいはず引つりれこし目

もいまだあま玉はぬに一越聲と上て曰

西來意の祖師の話に俗語ありや

と問へばその息もつさむにぬに一休も大音よて

汝が俗よ

とこたへてつきこかし玉へば彼大禪師も舌根をふるひて立れけるがさても活祖師やまじしよは十倍せり汝が俗よと即時に出まじき答話なりと感氣肝よめいじて踊り玉ひけるとなり

或とき新右衛門誰の話を参じけるに一休しめしていはく

尺伽みろくそ是他の奴しはらくいへ

他はこれ阿誰とどひ玉へば新右衛門歌をよみて答へけるり

たうといふまどその下にあらはれて

たそこた誰よたそたれなり

とよみけれを一体あれをかんじて此一そくにて千七百則をゆるし玉ふとなり

○一休和尚老年ふ及玉ふ頃親ももてる若きもの心持べき事諸經の中にこれありとて示し玉ふにそ入の子として親に一日も孝行の心むするべしやうなしていへをも就中孝行の心

れこそすべきは

正月元日 五百日の孝行に向ふ 同十五日 百日にむかふ

二月五日 三百日に向ふ 同晦日 百日に向ふ 三月三日 百日に向ふ

三月十日 千日に向ふ 四月十五日 五十日に向ふ 五月五日 百日に向ふ

五月晦日 九十日に向ふ 六月七日 二百日に向ふ 六月十八日 七十五日に向ふ

七月十三日 五千日に向ふ 八月十六日 五十日に向ふ 九月九日 二千日に向ふ

十月廿九日 千日に向ふ 十一月七日 五十日に向ふ 十二月晦日 四万六千日に向ふ

毎月朔日千日に向ふ

右の日親に孝行の心を猶更用ゆるものはうれくの日數ふ向ふと釋尊の經説ももればうたぬふべからず勤よかしく孝行といふは左のみ六かしき事にもあらずた親たちにからもなしかくもいたしたあらは安心し玉ふか何とそ安心させ申たきものなりとする事なす事に朝暮心がけるのみあれ則ち孝行なりさて勤めとわりたると前に申た種となりて其子もまた孝の心父に倍増するものなり主人に忠義といふも名目こそらはれ心持はこれに同じと常にしめし玉ふは有がたかりける事也けり

一休諸國物語卷之二畢

○爰に天台坊主に秀清とてなまこびに悪こびたる坊主あり多の人によこしまなる道とす、
 め凡佛法はわか心にあり身の外は佛なしなどいふてあるひは宮社等の木を伐せ佛像を破
 却させ先祖をもとむらひす邪見放逸の坊主なり内々かれが申へ承之れば紫野一休和尚と
 申小法師の何程佛法たてとして悟道はつめいの僧なりと世間よさたそるども是もつてか
 かまきとたとへて井の内の蛙が大海としらぬに似たるべしおはれまの坊主にあひなばお
 そらく只一句を以てばいごま都の住居させまじあつはれ途中にても逢たらもの哉とより
 く是をうかまひけるある日夕ぐれに一休かへり玉ふは其頃は和尚眼病氣よて一眼はあ
 しき折から彼坊主に大宮通一條の辻にてはたど行あひたまふ秀清されをこそねがふとこ
 ろの幸ひなりとこもひてするくと走りよりいかに御坊くといひかゝる一休この方の
 事かど仰らるゝ其とき秀清のいはく汝一眼とてらし歩行する事もしあやまちある時は黒
 闇なりあやうき事全く頼みがたし一休やかて汝が兩眼より我一がん星まんくたり一月
 にかへがたし見物するるときんば明らかなる鏡のとしかやうに答へ玉へばこの坊主かさね
 て一言よ及ばず尻からけて足はやに行方しれず飛うせぬ

○或とき一休に問ていそく何ぞ和尚さまつくく世のなり行あり様をみるは人間のきやう
 界をあんするに替我々が知音といへども幾人といふ數も知らず大のた先だち行けるがづ
 おにたれあつて言傳ありといふふとも聞ずいあやうの處に何とやうにして居るといふ事も
 なしこれのみ心元なき事ともなりやうくあちこちとする間にはいつじのあゆみ近づき
 車の庭にめぐるがとく我々が番に當り侍らむなげかはしき事ともなりかやうにあるとき
 は死ては先きに成侍るぞ一休の曰

死てのちいかなるものとなりぬらん

めし酒だんお茶とるなりけり

と仰られければ此人また和尚のかる口れいと出し玉ふとどつとどらひけるが又そばなる
 人の言けるはさりとて御坊このうたの心面白く候がまた行もあり行さるも口よしこれは
 またいの成事やらむ次手なごらきかせ玉へ一休

とまるとれもはるこにどまれよ

行どおまのやとくとくとゆけ

といひすて、歸り玉ふ

さて前冊よは邪淫のすがたに付て未來現在にむくふ次第をあらく佛法ばましのべ

ましたかまた申事がこのつてあるを少し申聞せませうさて經文は前によみました大悲
 經第三の卷の中の重といふ字に付て申事なりとかく何の身になつても種がなければな
 らぬ世界の人數いか程あるやらしらぬをも同じ目口鼻手足はありながら脊の高いもあ
 り低いもありあるひはやせたも太つたもあり目もひからめのたれ目のしほの目の筆奉行
 といふ目はやぶにらみの事じやげに御さる此種は方等部の中の經に眼目眇昧なる者は
 他の婦女を邪看するもの、中より生ると御説なされた此眼目と眇昧のすがめとも横に
 らみとも讀字なり他の婦女を邪看するものとは他女房をよこしやよ見ると讀字なり
 是はどうしたる經の心と思へば世間よ人を横に見るやうな人の目がおさるのイヤア此
 内にも其やうな目の人があるかしらぬこのやうなる目と生つて來る人は過去よも人
 の女房のよいのがあれば人と語るうちにもひたと見ぬやうで尻目でよこみたるひくひ
 によつて今生よは常住よこばかり見て居るやうな目に生つくものなり見度は眞直には
 見ずしてなせによこには見るぞといへば人に悪う思はれまひと己どあやまりて横にみ
 るを他の婦女を邪看する者の中より來るとはとかせられたかく申たらはまた目のろく
 に生れつかれたる衆のおれが目ははや悪う目てなれと思ひれて油斷なされたらば未
 來でまた眼が目よなりませうがわるふ合點なるよなこれ目ばかり邪淫してさへは

や目がかくのとしとく目といふが大車じや目がいたつら者千里と行も一歩よりはま
 るといひて千里万里の道を行もたゞ一足よりはじるとくたつた一目見るといふより事
 おまりて及ばぬ戀の思ひのと罪を作りて果のさまくのせんさくのあるはむのしの人

人の身よ目ばかりつらさものあらじ

みずばこひしどおもはざらまし

じよみ置れしも誦いたまたしからばおせ座頭まなも事も思はずくらすかと思へば見
 事心とうごかし情の道深く結句目のあきらかなる人々よりはいあうあり且るこが拙め
 からき物のくさり味ひがするやら漆にありの知くなものと聞なればあながち目ばかり
 がわるいものども定められぬ古人の詞に月花もさのみ目にて見る物かいと昔にかれた
 は能すませばおもしろき詞じやまづ各われらは目でなければ物を見ぬやうよ心得て居
 まするをさのみ目でばかりみる物がはそう見た物てさらになし心でも見よみる目さへ
 あれば犬も小判は見るけれども是は黄金といふものにて七寶のうちのたからともこれ
 のへもては向もかも自由自在に買るよものしやのを見たる斗でいかにしてるもの見ら
 るよ物の正脈としらぬすれば目で見たばありが見たといふものではない物とに心を付

て其道理としらねば其方を今殺すがといふ書た物とみても其文字を覚えねばい成事
が書て有やらはそ長きは見みずといふ字にてあらむすいりやうにやつて見れどもあは
ぬしからばさのみ目にて見る物かほといへるが面白くないかさらば目にてみる見ぬの
はなしを引て聞せませう先御茶ひとつ

○洛陽に天文はかせ某といふものありあるとき一休の庵へ行けり和尚出合たまひうの方は
久々見えざるが何方へ参られたるぞされバ私を此ころさる人にたのまれ南都にまかりわ
りて候二三日以前を登り申候和尚の曰何ぞめづらしき事もなく候や博士こたへて曰され
ば奈良にてめづらしき事を承り候ればいかやうなる事やありけるを博士はんよや坂
の邊りよ齒とぬくものあり壹ツを二文ツ、にて取と聞て去もの、虫くひ齒をもちて時な
らすいたむときには身体さへたゑがたきとてだへける者かれが事を聞かよび齒をぬき
に行一ツを一文ツ、なりと申此ものいひけるのそれのしつ間友ひ遠方より参りたり壹文
にまけてぬかれよといへばいやく少もろら直をなく候御用ならば何とさなりとも御
越われといひてまけず色々とはりと言つくしせんかたなくかへるべきと思ひしかども御
角此事を参りてむなましく歸るべきにもあらずとやおもひけん是非々々まけなくば二ツを
三文よてぬられよといふ先方のいふやう扱々其方はこまのく直切たまふ人かなまけてお

まじやうとて二ツを三文にてぬきとりけり此男のしこくも直ざりてぬきたりとおもひ大
きに自慢がほして歸り去をわたりのもの、申やう扱々た、今の男はせんなき事をしける
ものかを其ぬくべき齒ばりとはぬらすしてぬくまじき齒までもぬくの壹文の錢とをし
みてぬるでもくるしからざる齒をぬくさりとては世にめづらしき笑ものこれを小利大損
ともいふべきかと笑ひけるかやうの珍敷とをき、て歸りましたとてはなしける和尚とか
しくおほしめまころくどわらひ誠よりればおもしるきいあしなりされは世間の人利や
うに心ふかきを事にふれて利ふんとかもふほどに因果の道理もしらす當來の苦果をもわ
きまへざるが如くなど、四方山のいなしおはりて和尚西の方の遣戸をわけて出らる、博
士みてやがてかくぞいひける

いのはかり西に朝日のいるづのな
一休やがて心得たりとて

天文とかせいにかゝ見るらん

といひ玉へば博士手をうちて大に笑ひいとまもこつてかへりける

○爰に一休和尚の庵ちかきはとりに四十からといふ小鳥と養ける人のありしが物のあたり
にや生ある者なれば死する期あつて籠の内にもなしくなれり朝夕愛し手なれし可愛さに

殊外不便に覺おぼいどかなくして子こよわかれたる思おもひとなせり凡おほ非情無心ひんごんむしんのものにも各佛おん性と具そせりましていはんや生なまあるものや死出しでの山三途さんじゆの河かめどの閑ひまか、有あらんしかるべき智者ちやを頼たのみて引導いんどうわたさばやと思おもひ一ひときう和尙わじやうの庵いんへ参まゐりてしかくの事こと頼たのみ申まをたきよしなげきければ折せまふし和尙わじやうの弟子でし出いわひいとやすき事ことなりいでく成佛ぶつとつ得とせんとして佛前ぶつぜんに向むかはせ

むかし釋尊しやくそん八十三はちじゅうさんつたい河かにおゐてねはんに入いり
今いまなち四十しじゆから紫野むらさきのに成佛ぶつとつとぞく

とたからかほこそさづけける彼者かのものたのもしくおもひやがて葬はなりてかへりぬ是こゝを一休いっけものこしに聞きじめした、今のいまのゐんどうはやくでかしたる小僧せうそうの風骨ふうこつによると思おもしめし大方おほまよろこびたまひ機嫌きげんよき事ことな、めならずとみや
維い摩ま文珠ぶんじゆのはなしいたさふ初はつ維い摩ま經きやうの中に文珠ぶんじゆ大士だいしゆいま居士こしの病やまひをといに御ごこしなされて何なにと居士こし御宿ごしゆくに御見ごけんまひのため不來ふらいのさうもつてきたり申まをたと仰おほれたこのまゝ不來ふらいの相あひといきたらざるすがたを現あらわして來きるといふ詞ことばじや何なにと來きておゐて來きらぬすがたもつてきたとは何なにとやらむ六むかしく公事こうじではぶざらぬかそのとと維い摩まは方はう一丈いつじやうの庵いんの中なかにおはしました今いまとき寺てらの長老ちやうじやう和尙わじやうの御ごさるところと方丈はうじやうといふは

此こゝ、ろじやしかるに維い摩まこの詞ことばとさかれてこれはく文珠ぶんじゆぼさつようこゝ御世ごせいなされたれと維い摩まもいまで我われ不見みえんの相あひをもつて見けんるとこたへられたこの心こゝろは不見みえんの相あひをばうなたさまの不來ふらいのすがたで御ごこしなされたなれば我われもまた見けんざるすがたをもつて見けんまするといふ心こゝろじや何なにとこした同士どうしの出合いあはれもろい問答もんたうてそざらぬかこのみ目めにてみるものゝさのみ足あしにて行ゆくものかはと書かたさものとされちなみに申まをさふなれば鴨かひの長明ちやうめいが海路かいじゆをへたつる戀こゝろといふ題だいに

おもひわまりうちぬる宵よひのまぼろしも
なみちを分わかて行ゆくかよひけり

あれをわじはふてみれば兼入けんじゆたるうちよて思おもふ人ひとの方かたへ心こゝろがかよふたあれば此行こゝろやうでは足あしのいらぬしかればこのみ足あしにて行ゆくものかはと書かたいと申まをが實まことじやまたまつしすの法心ほふしん上人じやうじんのうたとて

足あしなくて雲くものひしるもあやしきよ
なにをふまへてかすみたつらむ

とよみ玉たまふよし沙石させき集じゆの中に無住むぢゆ法師ぼうしのかきたまひてこれ楞嚴らうげん經きやうのこゝろにかなへりとありいかさま雲くものはじりかすみのかつ合點がてんがまわらぬ春はるたつといふばりのりよや

見よしの、山もかすみてもよまれたかよふによんでも同じ事じや歌よ
足なくて舟のはじめるもわやしきよ

なにをふまへて涙はたつらん

實にも楞嚴經の中に釋迦如來と阿難尊者との問答に眼見心見不見の見なといふ事があるぞと殊勝に有がたふおもふ事じや此やうな理に似たることを申さうならばある者の聯句に舟に乗りて山の巔に上るといふ句といたした世間に無理な聞へぬ事を山は舟を乗やうな事じやといひまする是に和と付わぐみましたかさま付ふくい難句なるを是にさるものがつけましたり

田子の浦なみ間に富士のかけ見入て

なんとよく付たではござらぬの舟に乗て田子らうらに魚などを釣ながら下と見れば富士の山のかけがありくとうつりてその上に舟とうのべたときには舟はのつて山のいたいきに上る心がしましよがな池に望めば天脚下といふ句もこの心と同心事をかく物には感とせして見たり聞たりせいで見たりちても聞たり内でもな月花と見るにも月はいつもまるき物とばかり變へて花といつても咲てあるともふの本の目とばかり見たりいふもの世月もかけ花もちるるといふことと合点するを心にも見るといふものであつる

此心をもつて邪嬌をいませめたがよいそれはなせに申たきりやうのよい女を見るやもたうつくまの執心やと氣をうつすは目やをり見るといふものじや心をうつて見るといふはあの女にかう美目よぶてふれの心が何をやらさきめくたれとばやあの方にえ主があるによつてならぬとかくおもふまい主ある者にてゝろとかくるは生盗人といふものなればその證據には罪にたあなはるぞとじつと分別をしてひとりなる事をやむるか心をもつて見るといふものじやさてこの心を納めてからの見たとて科にならずへりもせずともこの事に此こゝろがあるならば見ぬがよいはす見てもとも埒があかぬと男の胴骨をすゑて持がたしなみなりさて物と仕ぐこないもなし侍の殊さら此つよき根性をさげねば武邊も高名ならず先いやらしいは見聞からなまぬるく誠の用に立さるもなふ思はるゝは免よも角にも詮ない事は是にかざらずあほうらじう涎ながして見ぬがよいさて女房と山神と申はなしをめさましにいたさふさりながら鮎川といふ男の才智發明の義とちよいと入まど

○鮎川新右衛門親當その身のみしき才智發明の道士なるが和尚のもとへ立入禪法に參じられける誠は佛心の妙具をつたへ正法眼藏とききはひ英雄の士といひつべし和尚を心通相かなひてゆゝじくおぼしめさるゝもとほり也されば定期きたりて寂滅の室にいらんとす

胎下のひかしより是を待と年久く思ひまうけたる道なりとて快氣の留さらになく既に一門はせめつまりかのく今はのかざりに名残ををしましたひ歎くとよりの見る目もあはれよてしらぬ袖さへぬらしけるはことばりとぞ見へにけるかゝる愁歎の折ふし青々たる西の空より紫雲たなびき空中よかはひ音楽さこへ盤香薫じはなふり妙なるかな三尊廿五ぼさつ赫々たる聖衆を引つれ間ぢかく來迎し玉ふはふじぎなりとも中々有がたかりける瑞相なり實うたがひもなく新右衛門の西方十萬億土極樂世界に往生せしめて九品上剎の臺にいたらむとはたなびくと見るがとしとどのく感にたへざるとなりけりされは落日よちかき老士まだ物なれぬ若輩のやあらひ天に身をまき地を伏しともふ死なんとぞくするひける道理の至極とぞ聞へし其中に嫡子は新右衛門がひさの元によりそひ泪を袖に包みながらいかにも御覽候へ頼母しく思しめされて往生安全にとげ玉へと指をさしておしむける其とき親當ぬれる眼と活と見ひらき我子をはたとにらみてそれ弓馬の家に生れけるものたへと安養淨刹にいたりて九品蓮臺に座すとて弓箭をわするべきにあらず書院の床に立たる重藤のぬりぬめに矢とそへてもちきたるべしといふ聞人驚かざるはなかりけりこはいかにと見る所に親當る弓勢何人なりとはしらねどもさじもつよかるらむと思しきがやがて引くはへ引しばかり暫しかためて兵どはなつ其矢あやまたす三昧の中尋

ひかりを放ちてきたまふ阿彌陀のむな板とあなたこなたへ射とうしてければ空にあまねき紫雲のよそほひも諸の聖衆とればしきものもたちまち消て蔭もなしひかなる事ぞと了簡すれば所に久しく經るむじなの化かうを經たるよぞ有ける賊も希有の次第なり終に一首の辭世を作り殘されける

生ぬるものあかつきに死ぬれを

けふのゆふべはあき風ぞふく

とらやうにつらね臨終をどげ玉ふ奇なるかな空寂の玄妙を會得し邪尸の障得とはらひ其身は死門に入あがら活人のねぶりをさまたされけるを世の人の珍事とする所なりその後一休と導師とたのみ奉り御引導とこひければ一休もこの新右衛門には一かはりかはりて引導すべしとたくみすましておとしけるよはや新右衛門が亡骸と輿にのせて來りければ一休たち出たまひてかの新右衛門が乗たる盆とたゝきたまへば死たる者高らかなる聲を出して一首の歌とば一休によみかけけるころふしぎなれ新右衛門も只人にはあらじと今の世までも人のいひつたへ侍るなりその歌に

ひとり來てひとり歸るも我なる

道としへんといふぞをかしき

とたからかにとなへければその詞のねはらざるよ返歌を玉ふこそ有がたげれ

ひとりきてひとりかへるも迷ひ也

來たらずさらぬ道をふしへん

このたまへは新右衛門も實もとやなもひけんろの、ちを音もせせ成りけり世人これをつたへ聞て一休は誠にも人間ならず佛菩薩のかりよはらばれひとり來てひとり歸るも道といへば來たらばさらぬと即答を給ふは所謂老子に死てもほろびざるものは命がしといへるもかゝるためしなるべし

○又新右衛門の景愛の妻いときけなきときより萬に心みちかく武々しありければかなしき者にも慈悲のめぐみなく召つかふ童にも哀憐のなまけ薄かりけりされば人は似て友とするならひなるに悟道の居士にむねをひて尊きをしへをしらざりける事いかさま報のばらなるべしと哲人おとにさとしける新右衛門あけくれ不便におもひてもとより道者の事なれをたまじひをくだき柔和のをしへをす、めけるしかれども露ばかりもまたがふ氣しき見へざりけりあるとき余りいたく制しければ女房顔とあるめて聞へけるやう
うむのふたのをいつかひなれん

とた々かやうによみてれどもせせ親當かどろき日頃のふるまひは相違して歌の必あまり殊勝なりければづかしくおもひわが歌るに及はずとてさきに銘じて感じけるふしきなるかあ今までは放逸邪見は身をまかせ誠にくらさ人なりと思ひしおさてと我より先にさとりける物をと思ひ舌とまきける其後の夫婦のなまけあさからずひよくの契りふか、りけり上しも水魚のこゝろ同じむつびけるにつらき者のいひなしにてやわりけむ密に異夫とかさねて二こゝろあるよしまことしやかよ新右衛門も告げる新右衛門もとよりいつはりを信するものよはわらざりけれども實と思ひあたる事ありとて物に忍びぬをのこなりければ暫の延引もあく離別してこそ里へたくりける女房はとりふし懐妊の心ありて腫みければ恨みの心あさからずつるぎをのみほのををかしむらんともだへかなしみけれど力なく出にける無實の程こそわはれなる然れども跡方もなきいつはりなれば誠つゆよあらはれて讒言のしわざとしりよけるより新右衛門後悔して又よび迎んとて我あやまりなるよしひつつかはしければ女房返事に

秋かせの人のこゝろに立ちあらば

見のらぬさきにねどらばなる

どかやうよよみをこせて二度かへらざりける夫より女房のなまけたらひなくいらぬ

ふるまいは返りてまざりけりと寝ぬものなかりしとなん或人かたり侍りいみじきともしろく寝ぬけれをか耳の底にとまり忘れもやらす有けると假初にあらはし侍るさればかの歌にいづれもかげうたありしとなり

扱女房を山の神と申せば御さしつかぬもござるふかもしらねども山の神といふものに目を見合すればそのまゝ死ぬると袖人のつたへて奥山ふかく入て木を樵に山の神らしものどもあたりへ来て態と見らるゝやうにとまん前へちらくすれども見ると死るによつて随分見ぬやうにする也もし同じ山人でもまづどのやうななりを物ならんどもふてちよつとでもかの横目をして少しばかりでもみると死るとか一度じやこれをわすれさせらるゝな世界のうつくしい人の内儀たちを常住山の神じやと思ふて見ると死こそはせまいけれとわざわいの種じやと思ふてちつとも見ぬがよい兎かく見ると死ぬるとさへをもへば手がつかぬ若い衆合点させられたるそれゆゑまことに人の女房を今さのはやり詞又山の神くといひます此やうなとからいふかしりませぬたゞく情もどがきつらによつて山の神のとくこわいといふ事かそれわいづれもがよく御せんじでもらふ身をもらかやうな法師のしらぬ事く迷の衆生は愛があまじう御するど何でもかでも見たがるひとつとして役に立ぬ事とひたもの見たがるなんば合点して

居のらは見たりとも何の大事かともた言にも弁口をたゞきて連の泥より出て泥よそまらぬごとくころが清浄なれば一心が極てからはどても見事にいふけれを一事とやうにきれいにいふほどの人の泥にうめたも一心の極らぬとも見てまじたによつてまづは眼て見るふ類にさはりものでござるさふな程に今の山の神をわすれぬ様にして見たりとも犬が小判を見たやうに心得てござれしたか今さきの若い衆や氣たいのよい親父たち笑止などは後生でみな白眼のやうな目にならせられうと思ふてさづかいふ存するが後には世界に生れてくる程の人が横ににらみやうてござらふと思ふてとかしうござるうれにつき邪嫉のむくひをさしと申てさかせませう御世話方御茶一ツくだされ

○愛に雲初大原と申所にゆるりや藤太夫と申ものあり久しく京都に住けるが元來出雲は生國なれを又本國に歸りて住けるか京より國へ下りさまふ妻とかたらひて下りける此女京にてねんおろしけり男のかたより度々たよりをうかいひ互に文のかよひありけり此よしさる者ひそかに知らせば男あるときまたの文をもの有けるをとりかくしけれと我ひひとつも讀ぬ無筆なれば力なくたれにか是を見せはやとおもふふ頼むべき人もなく打過しが折ふし一休この藤太夫が近所ふましますよやがて和尙と請してよき次手なりとおもひ

て件の文ども取出し御坊さま内々ながら御ざんじの通り某の目と持ながらの明めくらよ
ひとしければ此ふと少し子細ある事にて候も一々よとて給はれと申ける一休安きとな
りて此文どもとよみかへて只尋常のふみによみなし玉ふ時に此男さてい苦しう奇き文
どもなり余人に讀たらんには疑ひもあるべきを殊に和尙のよみたまふ上はさらによつは
り玉ふとも思はずさては人の云しは皆いつはりなりけりと不審をばらじけり此女和尙の
恵みあまりのうれしさよひそかに禮ふみをつかはす次手に

しなのなるきうちにかけし丸木ばし

ふみ見しときはあやふかりけり

どうれしさのまゝかきてつかはしける一休返事に

見しときはいかなる事とどう太夫

よみをかりてはこゝろゆるりや

これよりかの女ふつく身と慎みけるとなり

○都に口癖の妙薬を覺へて秘藏しける者ありけり一休功徳をさこし召いかにもして知らば
やと思召されやがてたづね連絡ひていかくの御薬を知らせ給ふよしと承り及さふらう
天晴この愚僧に御相傳被下たくはるゝ是まで尋ねまひ候と申されける彼人うけたま

はり中々の事に候この妙薬と申は我等代々つたへ來り一子相傳の秘方なれば他も知らず
事思ひもよらず去ながら貴僧ゆゑしき御僧と見奉れば否がたくこそ候へふかき御執心に
てわたらせ給はゞ他に口傳あるまじき御起請をかゝせたまへ然らばゆるして教へ侍らん
とぞいひける和尙聞しめされわが身の大事一代一紙の誓文あれども愚僧におしへてたび
候はゞ心得侍るとて墨ぐろにこそ書れけるやかてならひ得て庵にかへりあざむらひて宣
ふやう人の病に薬となるべき物を秘藏して獨覺へたらひは慈悲のうとき心也是等の事を
秘藏とせばれそらくの秘してもひしがたき一大事の因縁をばいか、せむ去ながら佛神の
冥罰そられそろしさらば札と立て世は知らせんとして

一口癖のくすりの事もし口癖をやむものあらむかならず密柑の實を黒くやきてのも

べし活る事すみやのにしてふたゝび發ることなまこれ奇代の大妙薬なり

と書付たてられけるさて教へける男これを聞 以外た腹を立せはねをいからしていそぎ
紫野よのしりゆき一休とたづね出しいかよ御僧破戒無惡の賣主坊主かな何とて大事の秘
薬と習ひ得て他に口傳せまじとて起請と書ながらあまつさへ高札を立て萬人の目にさら
す事いかなる曲事やと打つたしても忍びがたしと眞黒になつて怒りければさしもの一
休なれどもかめき殺れとぞ見へにけるされども驚くけしきもなくそらさぬ顔にもてなし

あらとくしの有さまや何事と斯はのたまふらん起請とかきしも誠なりしかるに札を立
しものつばりたあらず去ながら口傳せまじと書ぬれば口傳は一人もせざるあり札とたて
じと書ざれば立たるがわやまりか起請よ少もうむのされば佛神のばちもあろしからず
とてそらうそむひてまじくける彼者あくまで罵しり怒氣にわかされ方寸にせまりける
が一言のぬけ句に返答をうばはれ歸りける

○一休和尚とひとしき沙門ありけり我が繪像をみづから書てうつし心づから一入よく出来
たるよとうれしくてさもあれ一休に見せばやとおもひ急ぎ紫野にもて行ける和尚この繪
を一目見給ひぬを見くるしやとて目と閉大きに嘲り給へばいかあれば所存をもかへり見
すかくわらひ給ふすと打腹だちのしりける其時繪像を取て庭上へ投付土さうりとき
ながら散々にふみにじり一帯かうぞかゝれける

世とすて、かたちとすてすづんはつときりて煩悩をきとすのりに繪像と
あきておのが悪業をかづけ置給像大きなるぬいわくあり

○五月雨のふりつゞきはれ間も見ぬす打しめり四方のけしきうるはひ梢も見へわのため徒
然わびしく思しん柴の戸とさし込みたん然として在しさと感へ六十のまりの男と見へ

て破笠をかむりいかもおもひ余りうれひに沈みたる有さまにてしづかに物申さむと
かゝひける一休たそやこなたへと宣ひて柴のあみ戸をひらき玉ふ彼男いふやう我は近き
はたり又侍る者なるが明日はさる心ざしの日ふ相あたり候へども智識をたのみ奉つるか
たなく候へば恐れながら和尚を請おたてまつりれるその成齊をまゐらせ上たく候て是ま
で頼み來り候也とおもひ入て申ける一休聞しゆしもとより出家のいとなみにいと易きと
なり向處のほせそと問玉へば男たへてさん候わが家居と申はにおり川通りこぬけびし
やく町と申てかくれなき所にて侍るなり尋てわたらせたまは門にしろしを置候べし必
らずまら奉り候とていとま申て歸りける一休あとにてつくくと案じ玉以渠はふしどな
る敵へやうといひつる物かなさらば了簡して見ばやとて躑躅とぞひらかれける抑に
おり川とは今出川あるべし底ぬけ柄杓といひしはあがわ町といふなるべしいでくたづ
ね行て見んとて思ふ當とと玉へば案にたがをすゑがわ町といふ處に行わたらせ玉ひ
ける印とひしは何なるらんと見給へば表に杓子とつりたりけりこれずしるしなりと
てやがて内に入て見玉へばきのふの男にあひ玉ふ目出たかりける事なぬめならず我等の
おろかなるたのふれを申參らせ候へと一々よとまわから道をもまよはせ給はず御入候と
そいつのりもなき天眼通にてればしますとてひとへに釋迦のおとくに思ひける男もくせ

ものにてむつかく難問をかけんと思ひけるが法事も遇ぬれば膳を出しすえたりける其
 とき和尚膳にもかひ殊に亡者法味のためあかうをなして三界に手向と蓋をあけ見玉へ
 ば飯にはあらで小ぬか也ふしぎに思めされ汁のふたを取見玉へは是も同じく小ぬかなり
 残りの物もみなくぬかなりければよこ手と打てあらいたはしやさて亡者の三七日に
 あたり候よとてかぶりもふらずのたまひける男はいよ／＼きもつけし恐れをきて敬ひ
 けるそのとき男いふやうの仰のとくそれがしは父をうしなひ候て三七日になり侍る佛果
 よやいたりけんもし地獄にやおちぬらむ後生の事おぼつかなくてかきしく候と問ひけれ
 ば一休仰られけるは何事かあるべきたゞ存生のふるまひとは他人はよしとはむるや悪き
 ぞろまゐるやいかいふぞとひそかま宣ひければ平生は常によこしまなるを候とす
 ひとへに正直にてまつたき性あれば他人は佛にてわりつるとはむる者多く候と申ければ
 一休聞し召しかれば氣づかひなる事なし是あみだにもわらず観音にもわらず則ち正直佛
 なり佛果を得ると疑ひなしと事もなげに仰られける男つく／＼と承りさては心安く候又
 ろれがしが兄にて候もの三年已前もひなしくなりたりしが常に佛道をもちしらす徒にわか
 し暮しはづかしながら天性愚頓よ／＼て人の口にぬりものと名を得候事くらをしき次第
 なりたゞし罪もつくらす候へを佛果も得候はんやと問ひける一休聞し召中々つみとがな

しといへども佛よはなりがたし左様のものは愚僧がゆるしても人がゆるさずれば其落と
 ころの地獄を則ち候はう地とくといふなり但し今生のせとくと後生の事も侍れば佛果と地
 獄と少しも疑ふとなくと仰られける

さて又因果のむくひと申へなしをいたさふむかし今都今出川の藤とりに色どのみな
 る男ありあるとき水無月社の森の夕す、みうちひらいたる河原にかり茶やたちならび
 京中の上下うつして御手洗のながれよて汗をす、さ暑とわすれかへる時分西山に入日
 ろげ四五尺ばかり残りもどさらひねの山をろしもひや／＼と心よく又も御出の茶やの
 机床は腰をかけ休らふところに今出川ぐちのかたより大勢出来る内にもかづきのるり
 ふあく風俗のよさが年ふけたる姥一人つれてくるよ／＼と目をはなれずはるかに詠て
 むたる間に近く来て此男がかけし茶やよつとはいりあらあつやとてうばがいさめもき
 かずして水のみて片かげのかたへよひたと顔ふりてむらるゝを見れば日おろ熱心に
 おもふたる人の女房じやまでこれは夢かうつ、かところり／＼と近づきて是はようこ
 そ御参詣といへばされば最前よりこなたさまをも見及びて居まぬらすれども御ぞんじ
 のどふりこちの人いかひ世話やきき人にてかやうなところへ参るとはきはれす
 うち参るといふでは御ざりませぬわたくしの里へちよつと往てまゐると申て横にきれ

てまのりまゝたゆへ離るも逢とがいやにてそれゆゑ詞をもかけさせなんだといへ此男それはわたくしよくしつて罷るしからば暮ぬさきに神前へはや御参りなされたまゝの御出に此うらに見へしゆくれば家は人の見ぬところなればわれにてゆるく御すゝまをされもし日かくれたりとも私が御供といはし御里へ参れば別義なき御歸りにかならずおよりなされよといふを聞そで女房は神前へまのりたるうち男はうれしく茶くも喫に今の人のればしたらなともいふとめて給はれといふうちにはや只今歸りますもはや日も暮れまするといふを茶やのゝも心得てむりに袂をひかへまづ御茶ひとつとさしつけてかの奥の方のかりざきへ引はり行どころへるの男出きたりてもとやわたくしもかへりますとじりにとめて酒よそらゆんよといふうちあんなく日も暮すまじければ此女乗もかねて此男がこゝろあるよしはしりたるよや焼はわるじのかいど物がたりするうちにつる間男になりて扱ふれより親里までおくり道すがら行末の落ふよとみをはや談合して人しれずその夜はいとまぢひして別れたげにござる世よと性のある男も女もあるものじや然るに人の心はそめるにいろをますじやてくれをかりでかく事か其のち二ヶ月三ヶ月と逢にまきりてまたしくなり互に心をよす折から東山の邊りに此女房の方の家へいつでも齊にれじやる出家の給をせんだくたゆまれ

れも後生と念佛のたてに離しひめたりに硯のあるにまかせ其まゝかの男のかたへちよと文して音づれんとさねはながみよ一日二日御とふくまくなつかしきよ近きうちにかの方にぞ御めたりたりたさゆるくかたりなぐさみつもある御物たりいたし度神かけてなどこまゝと書てきりくしやんとむすぶところへ亭主何心なく來りしに南無三寶をかは血をわけながら離立し此せんだくもの、袖にちやくと入てかくせしと亭主これを見とやけながらさもなき跡にもてなま問近よりて飛り、りまづせんだく物とらばひとりかの文と取出女め是はいかにとひらき見せるに女房たまらずすがり付をつきたはして何々御なつかしきにまよむに女どもはやつ、まれせれくよ走り返るみそり取てのどふへあきりたりたせれる亭主はこれをもしらす女二三べんよみかへし名がきを見るにそれ様まゐるどばかりあるにさては此せんだくもの、主坊主にやがひなし袂にあるこそふしぎあれさてもく畜生めと女房と引たて見ればとや息たへたりいよくかんにならずと其頃の太守へうつたへければ坊主をめてして問はせ玉ふにさらぬ覺へなきよし懸りなき通りあきらかに申わけすれとも相手の女は死まてかの裕のそでに入れさしが證據となりていひわけ立がたく終に引わたされて女の死骸も、もに木よ乃せられまはいと漢ましき事さても先世のいかなる因果がめぐり來てかゝる

からき目よわひぬらん人の身にはいつもくひがめぐり来るやらむしれねば現世も覺へ
がなくとて此坊主のとき由断なりませぬずさてまたあの間男めが科なき法師を殺し
たる因果のむくひにてその身の果ながくしきはなしがござる次にたはなし申そふ
○さるところに何ともならざる邪氣なる男ありあまつさへ身をよろしくして萬不足なく殊
に下人多くもてりあまりわびまゝをいへんとて表の入口は法度書してけり其私に

- 一 へつらいあつて奉公をまがちの事
- 一 つのひたをしの事くひたをしの事
- 一 をんはどりがちもらひがちの事

とかやうよ書て立ときけりあるとき一休を申入萬の咄はりて一休申さるゝは何とこれ
の表はめづらしき札をかきて立給ふあれを下々への法度がきにて侍るか亭主なかく
とこたふ一休ねかしく思ひ給ひやがてあへりさまにかくかきそへらるゝ
へつらひてたのしきよりもへつらはで

まづしき身こそころやすけれ

かく書てひそかにたはかりて睡られけり

○或人一休にとふていはく世の中の人の申事よて候人の人たるといふ事いかなる事を申

候や一休答へていはくされば此坊主もしらず足らん身よて候ゆゑいそんや人の人たる事
としるべきやさりながら若き人の心さしあつてやさしくも尋ね給ふをしらぬといふもい
なものにて候むるし物しりたる人の咄しとちと聞つり置候ほどに申て見候はんまづ人
よ人たる人と又人たらぬ人と候がゆゑに人たる人と人と申げに候たさへも鷹などの鳥を
よく取は鷹の鷹たるに候鳥と得取らずして鼠などとするは鷹の鷹たるよて鷹とといひが
たし猫の鼠をよく取はねこのねこたるにて候へもし又鼠とと得とらずして着などを盗
みくらひ候は、猫の鼠たるにてこそ候へねこの猫たるとはいひがたし人の人たるとは人
の道をしりたる者を申げに候又問ていわく學文にうけ賣と申事の候いかなる事よて候や
一休答ていはくされば是もしかとは知らざる事ながら申て見候はんまづうけ賣と申はあ
るひは四條五條の辻にこそまの店とて棚ひとつにいらくさまものものと取あつめれ
き人の用次第に賣もの候此者に一いろにてもあつらへて見給へ何れにても我が職にあ
らずして皆上手の仕置たるを請買にいたし候間御用ならは其人よあつらへて参らせん
いふがとく學問にもうけ賣の人こそ多く候へわつらへて行はん人はまれよこそ候はめ
とに老子莊子諸子百家のさたまでも取まじえて評論し物知りどの、しるは皆こそまの店
に似てこそ候買手の爲には用にてこそ立ともやあらん賣手はさせる商人にても候は、一言

一句にても我ものよして守り行ふ人をばるかよすぐれてありがたるべしと申さるゝと
 きこの人つくくしと聞居てさても理りかなどてあつと感じける
 ○頃は七月十五日の夜若もの、飛上りのあど先しらすの男一兩人申やうはいさやかた
 一休のかたへ行夜すがらなくさまんと申一人が申やうされば我等もさやうに存ずる處よ
 くこそ申出されたりかの坊主もうきにうさし坊主の事にしあればこよひはとさち十五日
 いざく往てうからかさん尤とてうちつれ行ほどに折よく和尙寺にましくて何れもよ
 くこそ参られたり祝儀なりとてはや酒盃を出されて舞つうたひつするま、一休たつてた
 とられける竹の切よのたまり水すまずよこらす出ず入らせ人としざらばうすくちざりて
 未までとげよ紅葉をのみようすいがちるかとき先ちる物で候たどれやう人々よ若か
 ふたゝびある身かや只何事もかともまき時にはたれもかもいたづらくるひはあるもの
 よそれもくるしいものでもれじやらぬとく薬變じてくすりとなり候なにとなげくぞ川は
 た柳みづの出ばなをなげき候それなげかばあけかうまてようらゝか身にかゝる事あて
 わらゝこそ牛のうしせれ馬はうまつれおださうき世はどんなものじやと破れ扇のひやう
 して取てうたはうたへまゝ舞へ舞廻のかか、はやしゆたら女くよい人々をたどり
 をおさめ給ふみな人はこれと見て扱へ御坊のおさりと久じぶりで見まじた歌のせうが一

だんれもじろしとて一度にきつとわらひけりいざく此れもしるさふ町へ出でれどらん
 御坊も同道申べし一休心得たりと太郎次郎と申下人をつれ給ひ巳上四人の火と思ひ
 にいでたちしが先和尙のしやうぞくにまかつたいのきの布なげつきん紙子のそでをし羽
 れゆこしには九寸五分よひやうたんをぶらりしやうりどさげられけりわきざしは門前の
 彦六が一子に竹がしやうぶがたなをかねひらざしあひらめきわたして出たまふさてれさ
 りを五條の橋より四五丁西にありとてこ、ぞくつきやうのをぞり場なりとてうちまじは
 りて爰とせんと、おどらる、彼二人のつれも見うしなひた、主従よこそ成給ふ何とした
 まふらん足もどもしどろよなり若き女のかたへへらゝくところびか、り給へを女もども
 に土つかむ彼をつとが是を見てそつじなる曲者かなのがすまじといふま、に大おへ上て
 はりかゝる一休も心得たりといふま、は大はだぬきあはだぬいで大手をひるげてか、ち
 れけり五人三人取つきてあなたへそむらく此方へはむらくどれしかるしねし戻しし
 ばし捨あふ其ひまゝ頭巾早やぶれとびければ紙子はうしろのすそよりもぼんのくほまで
 引やぶり前後ふかくにひしめさけりかゝる所へ太郎次郎は見るよりもまのせたりといふ
 ま、に大はだぬきで相人のすねおさ見ちかへてをぼんのすねをむすとどり曳やつといふ
 て引はせにをぼんのつけに打たふれ腰に付たるひやうたれも見ぢんよ成て失にけり大勢

打よりろうせきせきせきと我もくどはじりよるやめて御坊はをきのがり東をさして
にげらるゝ下帯をつれてけつまつき命からくまのひて寺へ歸らるゝをかしかりける事
どもなり

○都にて大官家なるもの大事のともらひをしける事ありけるに折節導師はいかなる人を
の請に奉るべきと思案まぢく暮しける其頃名たかさ知識あまたをはしける中にもむ
らさき野の 一休和尚にしくはあらじと明日は法事にありければとていそぎ人を不遣しけ
る折よく和尚の庵のちりをはらひ庭のさうじしてをいしませけるが少もなづまぬ御僧な
れば心安く願望し給ひけるが思しよる事のあるにややがてこつがい人よ身とやつし手
足にすゝをにじり付くさり衣をまよひもぐつの中より出たるやうに身とやつし彼門にた
ちたまひ乞食ののゝしるごとく御供養の御施行をたゞ御慈悲と下されよとどりくよのた
まひけるあるじ邪見に腹を立見ぐるしき奴原とひ出せよと下知しければ其とき下男二三
人のしり出供養は明日の事なるふ今日来てをめぐ曲者やとて元よりたれとはいざしらす
いたりしや一休をたゞき出し奉りさんくまてうちやくしふみたをしてぞ入りけり一
休はからき命とやうく助かり無さんのしはざと思しめし紫野へと歸りたまふ明日に
もなりければ昨日のさまに引かへてあらたゝ湯あみし給ひて衣を改め召されつゝ七丈の

御袈裟とすそながに引のけ金襴まじりに取つくらひもどよりしゆしやうに見へ給ふ一休
御こし給ふぞといひ返は旦那大よろこび佛前へあそせうじけりされども和尚すゝみ給
はずいやそれまでばまいるまじ僧はこれに候とていしらすになりじりたまはず且
那はもたへて是は何ことよとてはしますわらひまはしやこゝは下郎の庭なりこなたへ
とふらせ給へとて手を引たて奉れば一休御らんじてしうらば此衣に料供を給はるべし愚
僧がたまはるべき子細なしとて一首の狂歌をのく
わらばくの三十棒とあてられて

身よはれきたる蟬のぬけがら

とよみ玉ひてこつじきも愚僧も同じ火と水なれ共きのふは棒をくらひ今日は御齋とたま
はる事偏に此衣の色が光るゆるなりとてぬぎ捨てこそ歸り給ふ

さて前夜御やくそく申たむくひとこやきと申御はなし申ませうのまへに申た問男と
の日頃の本望はとげ其うへ後難をさへのがれたれども其のちは一人もいられどして女
房をむかへくらしましたが此女房に子なくして年の十二三年も家つぎなきを人の命を
しれぬ世なりとて親類のうちより異見して手のけ足かけなりともこしらへられよとす
ゝめて去方よりのきもいりどじて土手町邊にかこひ置しがまたこの本妻しなれたによ

つてすぐに御手かけのを内へ入おきて一年たぬにさつそくらなかつたならずつ
 ひに安々平座とりわけ見れば玉のやうなわこさまができて足つ末のはつものど一家一
 門いはひよろこび御ふくろさままで御達者よとていつしかどのとさまに直し奥さまも
 ついなつてうへ見ぬ女となるしかるよ此御手かけのじゆれやぎとよおられたとき一
 んかた付るん結ばれ一男がありしよ貧福はしれぬもの不仕合にて渡世もなりがたく一
 先江戸へ下りてのせぐべしとて四年巳前にわかぬ別をふしあふさのせき越て東に
 だり三年が間あつたまは住ども仕合れもはしらすしてたより音信もなし其のち親のう
 ちに脊だけ乃びたる女子とかへたく事もあしがたくして爰に奉公分に出したるにか
 らる仕合とむすめのおげられしかりしにの過にし頃江戸へ下りたる男のへり登りて
 いとまもやらぬ女房をとにがくくねたりかこれ三年は待たるにまがひなしとて
 どりわけずこの男元より身躰ふらちゆゑ外よは足もためられず何れにかうりてなりと
 もとあもふ所よ今の男は身躰よしなれば彼といひ是といひ女めにもくしと彼のところ
 へ行てだんくをかたり尤我等たより音信ざるは越度によつてかやうに手とさげ申事
 なればとじめの女房よまがひなし只わたくまにかへしてたまはれとまふに亭主何がひ
 ざふの新内儀なれば念もない事やうへすとすじのらばもらひかゝるかられかくと

いたした程にどげしきするを手代や中間どもよりあひたゞき出してやつたじやまでさ
 れどもいきどほり底心にてつして無念なれば今日のはたしにうけ込ん晩のどしちがへ
 るとさたするを一門よりあひ談合してあつかひになり命があつてあそと銀十枚より小
 判十兩までよてかんはんしやれといふと一々奴まではとれもふ心があつてまかくか
 んにんせず又亭主も命にかゆる事なれを一貫目や二貫目やりたどて身体のかいになる
 事にてまなけれども出してすむべきが然るべきに少るところがあるのしわん坊とかく右
 の通りよてかんはんをらすつともかくも分別したいとつきはなしけるよしをらばかく
 ぶいたしたとて宿にかへりましたさて其じふん東山ちかきほとりあ萬日の回向がはじ
 まり我腹の参り下向引もちぎる間もかくくんじゆの中より脇ざしのさやはつして切て
 いづるものと今の男なりまゐるにかの亭主がまおりたるを見あけての事なればやがて
 それといふ間ににげまはる何がこのだんになつては内のものどもとてあたりにつつな
 んだときよかの巳前に問男しられた男とりふし参りあひ近付なればにる中にかへ
 だて、あつのとんとせしにつきのけく難なく大げさに切たとし女がたき愛へたるか
 きそのうへよ腰かけて見事よ自害までしてました何とむくひはれそろしいもの何のあ
 やまりもなき出家を無費にころしたむくひが此やうよむぐりきてそのまをさるあやま

りもなきに死しこの間男め命と大事につゝみたまりぬて出家を殺させよそに見て此の
 がどがをゆづりても何のむくひもなふして今までゐたるにむくひ来ておくのとくまた
 取さへたる眞の男も甲斐もなく結句あまり太刀さきにて胸のあたりを勝負しが當座よ
 は死るまでもなく百日はうりなやみてくさり死になりました何と悪因の業報と申たり
 其のち此はなしをこ糺の茶やよて取くみたるとき付てお姥たがはなしました此姥も姥
 での坊さまの越度になりましたれをこそ何のせんさくもなくわたくしが命もたすか
 りましたとかたり申たが此姥めも出家をころさしてよくれたのか命をかばふて居た事じ
 やいつれもよく聞しやれこのだんくの因果うのとう分くよは目に見へねど自然も
 くねんと此やうにつおよは追つめられて死ると因果とが同じもので若きうちはいつ年
 がよつていつ死るといふ事をまだ違ひやうに覺へはるか手のとくかぬやうにれもへど
 どやかくするうち一日たち二日たち今年が去年になり去年が又去々年になりさて來年
 が今年にあつて一ツツ年がよるほどに十といひしが廿になりそれから後は月日もは
 やくめぐり心もせばしくなつてくる三十六遍をくるよりはなほすみやかにはや正月か
 これはしたり又盆の節句か朔日か晦日かといふ内よ暮ては明て玉手箱ついで白雲の雪と
 いたゞきこしかたをおもへば夏のよの夢よりみじかき市太郎長極よそや子が五人三人

またその孫にも子が孫枝がしげりきて冬がれのしぐれさためなきかたはしよりころり
 くど死ぬるとおくりて歸くる人もはや空しくなつてある口無くなきはかすそひまご
 る世界に見しかりたる者のみなどこへやら往て見ぬと思へば彼未來とやら來世とやらへ
 日々ばらりくど果行くほどにもはや地ごとくもよく樂もつまりてさうく借家もたて
 られまいとたもふよちがひて無量無邊のひろい國かして一人もつまりて居られませぬ
 とて歸りたる者なしとこへ行もるはたくさんにあそこへも生れこゝにも鉢まきしてぬ
 らりくらりどうみ出すは一日のうちに國々村々町々や何萬何千何億にもせよ此世に生
 れくるほどの者はみな死ないでかなはぬものなれどもいつかくといんぐわの道理も
 一度はむくわいで叶はぬもの也余所の人はあれ程悪い事したるはなけれど今に達者で
 息才で仕合もよふてゐるればむくふものでもないかと必らずおもはるゝあと申事じ
 やそれはくおそいかはやいかせひに參ると心得るべしさて今の物語のありさまを聞
 て合点し玉ふべしたましく嫉欲の少ない人あれば又妻子をあらそかにして邪見にあた
 るものもありかゝる物は狼中より來るとどかれて狼の生れかゞりなり或は嫉をこのむ
 物がたりを悦び人々にいせらるゝものは鸚鵡の中より生をうけあるひは邪嫉をすけ
 るものは又おのれが女房にのみほだされて親にあしくおたり不孝になるはけつく嫉の

つみよりもまだふのーこれらのものは斬舌地獄にちてくるしみをうくとも説せ玉ふ
 誠まことに三界さんがいに人をつなぐきづなはこの嫉妬いんよくなればいづれもやめ玉へじかじながらとまら
 ぬば此色このいろのみちなればかたじけなく往生かうじやう成佛ぶつはなり申まいかとそんじ候ふきのふ申たる如
 く戒かいをたもち威儀いぎをたゝして申念佛ねんぶつにもあらず成佛ぶつしがたき所ところのわのくわれらゝ助
 けましとはいさゝか思しめさねども願ねがはくはずこじにても御苦勞ごくろうをかかけ奉るがうとま
 し又またそのが積犯せきはんの惡業あくごうつよければこのづらひのれを引さかりてちかひの綱あづなにもれな
 んも漢あまをしければ二百戒にひやくかい五百戒ごひやくかいはたまたすとも先まづさしあたりたる所の御法度ごほつどの邪淫じゃいんと
 おかしてあらぬはちとさらし玉ふかと申事也まうごとわるうきるせ玉とすともすこじにても
 めじき事はせぬやうに心こころもち扱あつかうのうへの忽たちまち佛ぶつ題目だうみくはいよくすぐれて佛ぶつもうれし
 とははしめすべしたゝ種しゆの字じは今の因果いんぐわのたね木の實みにて有と日ひある合あ点てんしてござれ
 これまでめて邪淫じゃいんのさたはずみました其うちまたく御ごはなし申さんまあなかまこり
 ○扱あつかも一休いっけ和尚わうしやうを活佛くわつぷつにてまじまじけると世上せうじやうに風聞ふうもんしけるがあまりよいんを去人そじん申
 けるはこの間一休いっけへ参まゐりければよく來るとのたまひ虚空こくうは座ざし給たまひて御庭ごていのまつまつの枝えだよ
 御腰ごこしとあけられ御ごす、みなされしかり不思議ふしぎなる事ことにあらすやとしかしくとかたりけれ
 ば昔人むかしの人それの偏ひとへにこそ人間にんげんと生なまをうけかゝる自在じざいのなるべしやと取抄とくせう汰たしける事こととほの

かま聞きりし一條いっじやうの辻つちに札しやくと立たられし書かに
 佛法ぶつぽふの修行しゆぎやうまで道みちなり天眼通てんげんつうを得えたり虚空こくうに座ざせんとすれば則すなはち座ざし座ざせまじ
 とかゝれたり皆人みなひと是こゝを見て此間人このあいだの評判ひやうはんしけるがかく書かせらるゝ上うへは更さらにうたがふ所ところを
 じ去いながら魚うまとくひて生なまして吐ひと仰あやられしも誠まことならず左ひだりなる事ことにてやわらむといふ人も
 ありしがいやくそれと品しやうかはりたるとてすまびたる人ひと三三人さんさんつれたち一休いっけの庵室あんしつへ
 行い御札ごしやくの表おもてうたがひはあるまじけれと直ちやうにおがみ申度候まうごとてこれまで参まゐりたりと申一休いっけ出
 おひ給たまひ中々ななかの事こと天眼通てんげんつうを得え申候まうごとと仰あやられければ其中このちゆうにすこひたるものすこし出い申ける
 は是こゝはいつはりよてあるへ去い虚空こくうの事こと思おもひもよらず先まづこの扇あふぎの上うへにあがりて御覽ごらんあれと
 申まけれをいとやすきとなり去いながら其そのあふぎの上うへへものらんと思おもふ心こころ出いれば乗のる今日けふの
 早天まうてんよりのらふとおもふ心こころなし虚空こくうへものぼらんと思おもはねばのぼらず重ねて御出ごい出いられ此
 ぼらんとおもふとき上うへりて見みせんと仰あやられければ皆人みなひとあまきれて踊おどりける其中このちゆうの人ひと申ける
 はいかにしても一休いっけなり人のあまりにいはんとて天眼通てんげんつうと得え給たまふといふとあかしくおぼ
 しめしめ玉ふなりと感あはれて歸かへるとなり
 ○或ある且また那なきたりて申けるはこの御寺ごていへ出入でい致いたし候人まうごと々々申ける、話則わがの一ひとそくもぬけたるか

ななどとしてわれらの愚痴なるをのなぞり何とも迷惑いたし候間何よても一そく御じひに
 示し玉へと申ければ安事なりさらば参じられよと有ければ参ずるとは何なる事にて侍る
 と申すいや何なりとも佛の道よて合点の行ぬと尋られよかしこまつて候とて佛殿さし
 てはしりいづる和尚ふかしく思し召見ぬ顔しておはしけるせつなの間より走り歸るとい
 くへ行れしものたまへば佛の道に不審あらば申せと仰せられしにより佛の道とは佛殿へ
 行く道なりとぞんじ一走り見参りましたがいかにもがてんのまゝおらぬ事ころ候の山門
 の邊りの松に巢をかけて候が何の巢とも更に合点まぬらす大方驚の巢とも見白て候得共
 しかとわきまへす候と申ければいや／＼からすこそ今時分は巢をかくれとのたまへば
 やとてもの御事に御慈悲をたれて示し給はれと申ければ其儀ならはしむを持てのぼり
 見給へと仰られければかのものいそぎのぼりて彼巢をたろし見れをなかあ鳥の子もなく
 何とも見ぬなり一休何なるがとのたまへば何も中に御さなく持ると申せば
 怒の巢とたろしてみればからすよて
 されにつけて見たまへて、が一そくなるはとれほせられければ彼ものなり／＼何ともつ
 け申べきことろはなくと申ければ一休仰られけるはうごなるを我も汝も一則とづけし
 すへき心はなしとしめし給へばかのものれどろきとては一休和尚さまも仰られるたく侍

るかと申ければ自心自佛と答へたまへばよこ手をうつてかへり終に自得しけるとなり
 ○洛陽ある遺世しやありけりあるとき一休の草庵へたづね行ひて見参に入奉らんよ
 し申ける折ふし和尚御病氣にて此間はたれよても御目にかゝる事まかりならず候御用の
 事もとろくかさねて御出あるべき由申出さるゝに此坊主かさねて申やう御病氣のよむ御
 尤なりじかまふがら立ながら御見参に入たきよしたつて申けり一休かゝるき御僧もあは
 まじきといもさして應したりとおもひれんもいかゞとやがてたち出たまひたぬめんした
 まふ此坊主申けるは某は洛陽にまゐりある坊主にて候天台の法門をもかたのとくうけた
 まはりて候しかれども御坊へすこし不審をたづね申たくうんじ参候一休いかなるふじん
 ばし候や我等は愚僧の身にて候へばいろはの講釋もあらぬべら坊よて返答申さんもれも
 ひもよらざる事なりとのたまふ其とき僧のいはくいかなるとりこれ草木成佛一休答へて
 云く卿木成佛よりなんぢが成佛とするや又とんせいじやりの成佛はいかなる所よかある
 一休なんぢが心にとへと答へたまふときやがて此坊主閉口して歸りける自心の成佛をも
 しらすしてなんぞや外をたづぬる事恐なりたへと盲目が黒白をあらそひるんかうの月
 をのぞむにさも似たりうれ道人といつは生死の一大事を心よかけてむしのりんをたし
 むとぞるをころ道人といふべきにふのれが心とさへ悟らすして外を求といふぞをのし

とて笑ひたまふ

○一休和尚ころしも春の半の事なるふ花よこ、ろとよせ玉ひて幾枝もあつめ花籠にたてまじへて酒など参りこゝろもわか〜となりておはします所へ一休の旦那の奥がた参りけるよくこそ来り玉ふとてさ、なぞす、めおかしきとぞ御はなしありてひたもの酒のみて遊ばれければ日もはや西山におちまちのたつきもしらぬ御寺に彼女房もべん〜とはなし居ける和尚いか、たぼしめしけんこよひは御とまりあれと仰られける女房の申けるはかりそめに参りながあそひ仕候さへおよとやらん似合ぬやうに侍るに一夜とまり申さばうき名やたら申べし其うへ夫ある身の事にはいへばいかふ心はさはおもひかなひがたく侍るまづ御いとま申すどて立かへりしを一休袖にすがりひらにこよひのとまり玉へと引ど〜玉ふに女房中やういさ、では一休さまの生釋迦のやうに思ひしがわらはは御心ありてと〜玉ふるや狂がるおほせかなと申ければ一休笑ひ玉ひて其方へ心をおくれればこそ愚僧も是非にと止め申せ心かけぬ者が御とまりあれと申めのかと仰られければ沙汰のかざりや夫ある身がかゝる事侍るべきかどふり切て興に乗立るへりけるさて夫におひて一休は佛のやうに思ひるなれ様もおぼしめさんがいたづらなる御坊なりわらはは酒をすゝめ玉ひて今まで引とめ利さへこよひは一夜とまれとかなに仰られけるかならずあの寺

へ参り玉ふなと二心なきいけんをくりのへ〜申ける夫はさるものにて手と打てわらひざりどては佛なり汝がかくいふも断なりよ〜思ひ見よいるなるものよても我をたのむ旦那の女房になれ〜しげに一夜とまれとせな〜出家の身に〜いひがたしよし一休和尚と枕とならぶれば今生後生のうつたえ成へし我等とかね侍らす急ぎ行て一夜遊びたまへ赤に〜の誓言ぞ我等のねたみ心はなしと申せば左あらば引かへし参るべし御よろこびあるべしと申ければ急ぎ参りてゆる〜と和尚をなぐさめ玉へと申ければ女房よろこび一間の處へたちこもりたしろい口紅さつねの化たるがとく引つくりひ衣裳とかざり急ぎ興にのり一休へこそ参りけり一休のや藤玉ひしに門はと〜た、くたどろき立出給へばあの女いるにも細々としたる聲にてさきには是非に一夜とまれと仰られけれども夫の心うか、はしくてふりきり立歸りしが余り御残り多くて夫にいまを乞ひへを苦しからんと申ゆえおはつかしなならと参りたると申せば一休いや〜もはやいやにて休御かへりあれささ程はこなたへ心か〜りたるがはや心か〜らず候はや御かへりあれ〜とて門戸をかたくしめ音もせずさりとては御なぶり候かど申ければもあへて音もせず是非なくかへりて夫〜しか〜と聞ければさあらんと思ひけること、て笑ひて天下老和尚也心うごくときは動かしうごかざればうごうしたまはずもはやいやさは誠に行水の

如き御心やいさぎよしくどかく凡人にははなしとていよく尊みける

○扱一休和尚の時代までの方々の寺々より七月十四日には大内へ灯笼をさ、げける大徳寺にも開山大灯國師よりゆるありてさ、げしかば後々まで例になりやめがたくありければ一休こもつかしくや思召けんあるとき大裡へ灯笼をあけるとて狂詩を一首つくり灯笼にそへさ、げ玉ひける

性靈 今日出来迎

雨露 直供 萬葉 棚

挑得 灯明 天上 月

松風 流水 讀經 聲

と遊しければ 帝教覽まましくてまよ一休の詩なるものをやうなき灯笼をもとめけるなり自今以後大徳寺よりも何方の寺よりも七月に灯笼をさ、ぐる事あるべからずと仰出されけるとなり世の人これとき、さてもく名僧かなか、る御心さしにては定て御寺も性靈祭りはあるまじ若あらばさこそかはりたるにてやあるべしいざ人々一休の御寺へ参りて見物し末代の語り句ともなすべしと四五人つれふて参り一休へ御目にか、り此間 禁裡へさ、げ玉びし灯笼の詩浴中にて是乃みさた仕候定めてる、る御心さし候は性靈まつりも遊し申間敷候と申ければいやく、われらは三界の衆生をおもふゆゑに有縁無縁の悪鬼とまつりてしゆ、の物を手向候ゆる廣大無邊なる性靈まつり仕候と仰ら

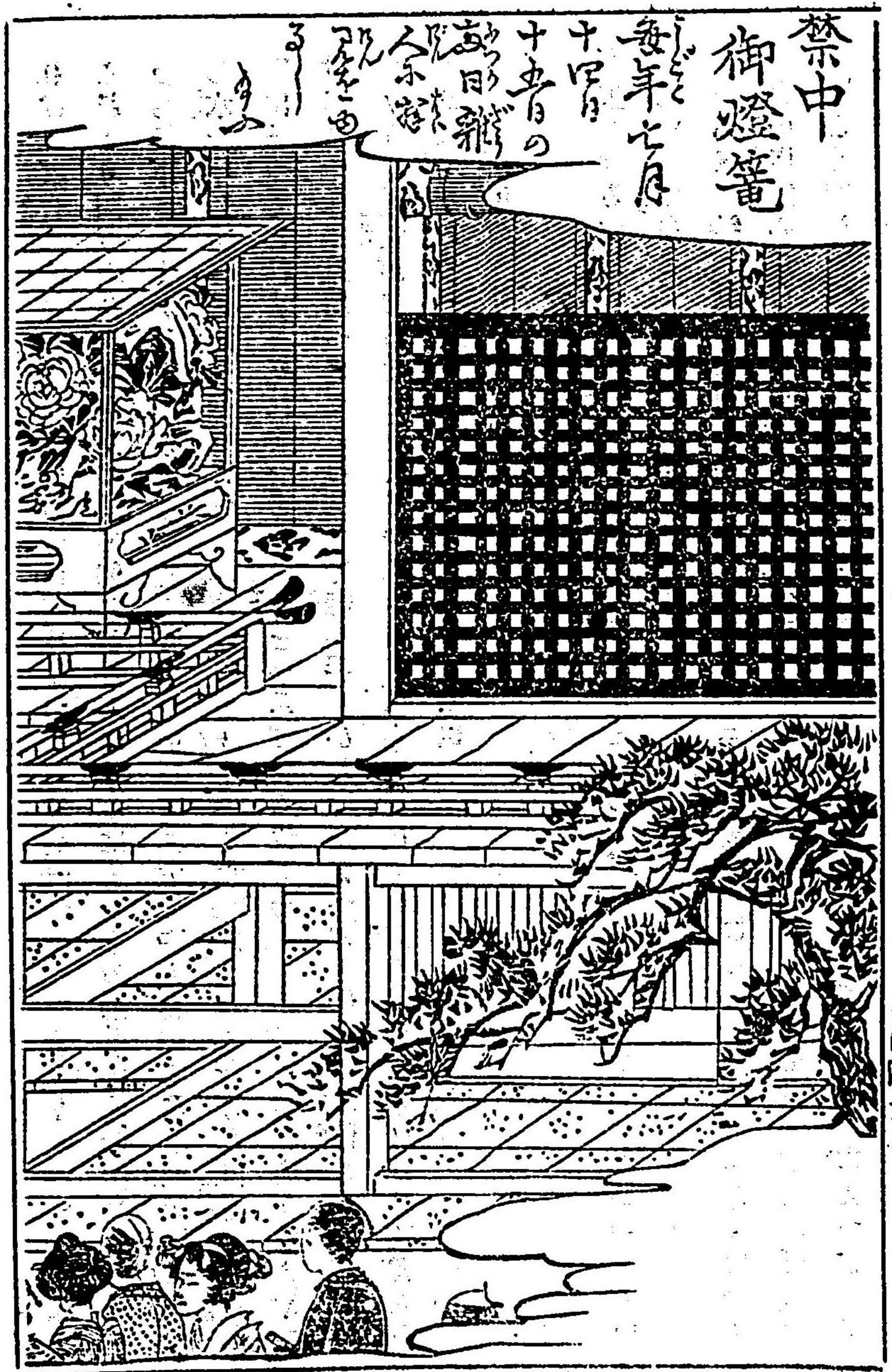
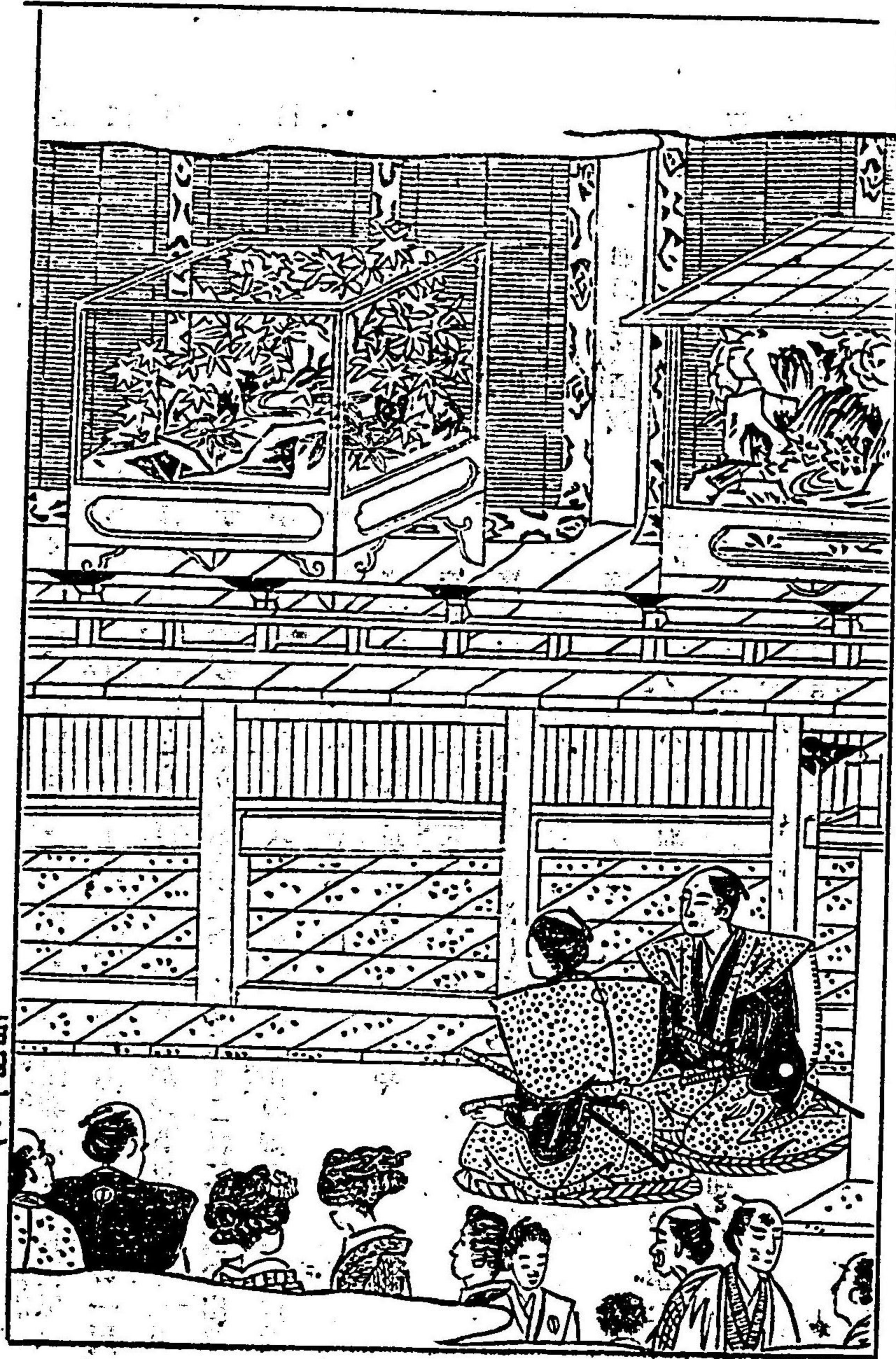
れければ皆人案に相違して此御寺には見申さず候が何れにて御まつり候ぞと申ければこれより四五町よきをかりて候と仰らる皆人申けるはとももの御事に見物仕度候御人ぞゐられ下されよかしと申ければさどく成事をいひ玉ふ方々や人までもなし我等同道申べし水ひけし給へと願しやのに仰られければ皆々よろこび御跡に付て行ければ東の河原へ御出あつてこれ、見たまへとて両手をひろげ給ふ皆々さももにて候ぞとさ、げられ一休は見給へとてくる、と舞ひ手をひろげたまへとも皆がてん行ざりければかの、は見物がなるまじきそといてきのすべし只耳にて御聞あれと仰られければ皆人あきて立居たり一休一越調あけて仰られけるは

山城のうりやなすびをそのまゝに

たひげになれや賀茂川の水

聞玉ひけるが是大なる性靈たなにてはさきかと仰られければ皆人さてま、くいともらはれぬ御意やとて感にたえてかへりける

あるとき懸川新右衛門来て佛法となしなまをてぬそひかけるに一休の仰らる、は今とまきの出家心さ、うすく佛は五百戒をさへたも玉ひしとかやせめて其かす取の五戒とばよくたもつべきとなりとのたまへば新右衛門申されけるは眞に沙門は申ふかよはず



禁中
御燈籠

毎年七月
十四日
十五日
の
御燈籠
の
御
人
を
御
見
せ
し
ま
す

俗のうへにてもせめて五戒たもちたき事にと申に一休いや俗の是非なきと也出家に
はもたせたく思ふ也去ながら目に見て耳に聞ゆるもの五戒とたもちがたしむる一尺
の扇さへ五戒をやぶるうへはまして僧俗生としけるものたもちがたきはとほりなり
新右衛門これをさきて此扇子さへ五戒をやぶり候や中にやぶりたりこれ又和尙の出来
口よて侍らんいで一々をひ申さん答へてさのせ給へいつもの御願作の御ある口うけま
わらせんと申ければさらハ一々をひ給へ新右衛門とよて曰

如何是殺生戒

答て曰 竹を切て骨とはなざるや

如何是偷盜戒

答て曰 虚空の風をぬすまざるや

如何是邪淫戒

答て曰 かなめとくめはせずや

如何妄語戒

答て曰 給をらとさのくざるや

如何是飲酒戒

答て曰 開てまゝんさいはざるや

れ扇の破戒ならずやと仰られければ今にのしめぬ御口なりけれども一入ありがたく
ぞんじたてまつるさりながら五戒のうち偷盜戒のおん答に不審申たく候和尙の曰いか
なるふしん候や新右衛門のいはく古語ふ

扇是日本扇

風不日本風

とあるからはぬすむとごころかやとをきけて一句申ければ一休新右衛門どのたふや
わさうや
音もなく香もなき人のこころにて
よへはこたふるぬしもぬすむと

とわそのしければさてもよき御口や先ほどよりの問答を御六あしながら一筆あそばさ
れどて書てもらひてそのま、掛ものよさ、れけるとなり此かけもの都の中よ持たる人
ありこれを聞す

○或人一休よとふて云く何と和尙さま世の中に化ものは人毎にきこくふしごと申ものと覺
白候さやうにて候や一休答て曰いや只中にぶらりとこたへたまふこのをどこ大よはらと
たてさても御坊はさこえ申さぬ御返事かなそれ人の物をとひかくるに凡そ法ごう有べき
に中あふらりといふあいつは終らうけたまはらずうれば人をなぶりたまふか御出家に
は似合ぬきふんや是非とも此うへは子細をたづね申さで置まし坊主どはいのせまじ誦訪
八まんも御示現あれど大にいかり申ける一休この有さまを見給ひさても、其方へたん
きなおろしき人かなそなたのやうなる人こそもの、咄しもならぬ子細は其はましくは

ふといふ氣ふんなり先よく合点しておみやれそなたはもの、不思議をどふゆゑにそなたへ幾度も申聞せる事なるも同じ事を又はいひ又云おめさるゝがてんのゆかぬ人かなとももひて只今のやうふ返事いたす事也それもの、ふしきを立ればふしき不思議もなしと思へばふまを成事の一ツもなしました佛も神も有とおもへりあり無とをもへりなしされはあるよもあらず無にもあらず扱あるときは中にぶらりといふ物でそなまかといひるれば此人手を打てのんじけるとなり

一休諸國物語圖繪卷之三畢

一休諸國物語圖繪卷之四

○一休和尚の御弟子に雲知坊といふ者あり江州に住けるが年月を経て師の御もとへとむらばんとて紫野へ参り寺門へ入らんとするに小法師梅をもつてうたんとすとは何事ぞといはんとすれども物もいはれずよげ去ぬ是はいか成事やらんはか／＼思ひたちて来りしかおもあくむなしく歸るべきかどれもひて又行るときに小法師此うしはいあるさと思ふ事のわるやらん度々来といひてまづかたひらふ引入つなぎおく其時我身を見れば牛なり心うき事かぎりなり是を日來の信施のつみふかきゆゑにこてとおもひて尊勝陀羅尼こそしんせのつみをせうめつする功德われとこそか聞置て誦せんと思へどもならはざる事をれをかなはずせめて經の名なりともとなへんと思へども舌こはりていはれず只うやめくをかり此牛は病のあるよや卿もくはず水ものますそやめくと人言けれども心うきに食物の事をもうちわされて三日三夜うぐめさしが心さきのつもあるにや尊勝陀羅尼といはれたりけるとき本の法師になりぬさてつなをどきて和尚の御前に行ぬ和尚仰らるゝは御坊はいづきたれりといひ給ふに三日巳前に参りたりと答ふいづくも今まで有つるがと、い給ふに馬屋よさふらひつるとて有し次第をかたりける和尚不便におはしめして彼尊勝だらよとお

しへたまへばいよく此坊主得道しけるとなり漢まじき事なりおるべしはづべし
 ○江州しやうれん寺に一休おはしませける時ある夜ふしぎの夢を見たまふ其隣家より角助と
 申もの、親喜助といふもの三年已前に死けり今生は居るときはまさしく片目にて有しが
 一休へ夢中にかたり申やうはまれば死て雉子になりたりぬつ幾日には地頭より御狩に出
 たまふさらそ我命はたすかりがたし此寺へにげ入事あらぬかくしてたべ生々世々にうれ
 しとおもはん我もどより御ぞんじのとくかた目しいたりしが其折からなれば定めてきじ
 のかずも多く飛入る事あるべけれども片目しいたるをしにたんけたまへとものおも
 ひたるすかたにてなくくかたると見て夢覺ぬあやしく思しめす所は次の日あんの如く
 地頭たる有り有けるしかるふきし一羽寺のうちへ飛入ぬ和尚御覽じて扱はかの夢に見つ
 るまじき是ならんと取て見たまふに彼かいひしとく片目なしやがてかまの中へかくして
 ふたとなしさゆらぬ体にもてなし給ふところへかり人うち入て愛かしく見けれどもれら
 ず力なくして出けり和尚此まじき取出して今の世繼角介にしじうをくわしく語りたまへ
 ば角介みだを流し此鳥もらひ飼おろしたると聞へべるふしぎなりし事どもなり
 ○江州に竹林寺といふ寺あり此住持生質脊低くして三尺ばかりなりけるがさる方に思ひ入
 たる美少年ありしとひるかよかたらひ折々寺へよびよせねんおろせられしが何とあして

うちたへ久しくきたらざれば此住持大氣をくさらかし何事もうちすてね間にうちふし
 けるよ下人少しのおちやうはふゆりしを腹だちまざれに枕をなげうちしてさんくんに悪
 口しける所へ一休もどより竹林寺はしたしけれをはからず來られ此体を見て是は何事と
 いひて腹立し給ふぞまづくかんにんめされよ何とばしいたされしやと申されければ住
 持ひそかにかたりてかやうくの子細ありて此ごろは打たへまいらそ何とぞしてよび度
 候か親兄弟の前としのふよし承るが何そ夫となきかこつけしてうちたへきたらざるそい
 かなる事ととどひやり度候御坊には才覚人なればよろしく頼むといふに一休うちわらひ
 夫は何より易き事なり此ころ澤山にある菜と錢と小糖ととすこしづ、紙につゝみて遣り
 給へ竹林それはいかなる事ぞ一休申さるゝとなせにこぬかといふ事なり竹林きゝて一だ
 んをもしらく候さらば明日はこれをもたせやるべし今日は雨中にて猶さら心さびし幸ひ
 坂本より珍酒をもらひたり一ツまわられよ我もたべ申さんとてたがひよさうつさくれつ
 酒宴をかばよ一休たつてをせられけるがせう哥よ

君がこぬとてまぐらがしろか。枕をなげそとがはなし。ちくりんくちんちん
 りん。さなちくりんじやほどにきのそんよな。をせりはなんよさで。ちやせん
 やころの

とうたひかなで、かゝられけりをかしかりし事ともなり

○其頃江州島山村といふ所、六條なまがしどの、御領分までありけるが久瀬又右衛門と申家老とよく心のもの成がゆる百姓とひたものせぶりとりあまつさへ農具までもとりつくすにより百姓をのづから耕作もならず在所に住れずして一人ッ、行方しれきのく程にやうく、残る百姓わすのになり、何れもこれとをげきいか、せんとひしめきあへり、其中一人が申やうはいかに百姓なればとて是はあまり道無なるしやうかな耕作の道具までもとられては何を以て作りをせんしかれば在所にありてもせんなしとても死せる命なれば此事を一先うつたへて其後はともかくもならんとれもふはぬかよと申ける此儀もつとも一同しさて訴状を認むるにおよんでたれかれといふといへども皆一文不知のものどもにてたれか書んといふもれもなし折ふし一休はちに行玉ふと、幸のとなりとて皆々立寄りて訴状と書て給はれといふに一休さ、給ひて何事の訴へにやと問給へばしかく、のよしとかるに一休聞て、や、それは訴状までには及ふまし是をもちて六條どのへさ、げよとて歌を書てやり給ふ

又もまたとりてもきかね一村の

のふ具残らせくせやとり山

とよみて是をつかひされければ百姓どもかゝる事よて中くより上候事思ひもよらずと申ければ一休いや、これにてよし是非これとさ、げよと仰られて歸り給へば、つれもいか、あらんとおもへどもみな土百姓のあかりをものより合なれ、論ずれどもめづらしき分別も出されば是非なくして彼うたとさし上げれば六條どの御らんありてめづらしき訴状かな百姓の分としてゐる事は思ひもよらず定て人だのみて書つらん有のまゝに申べし若陳じなむくせ事なりと仰らるゝよつて一休をたのみしに一休これにて事足と申せし趣を申上げればさればおそ其おせけ借ならでいかゝる事ははんもの有とも覺え、ばと興じさせ給ひて其のちは農具をもかへて百姓になさけふか、りしとぞ

扱も前冊についで講談かたりつめ終り侍りしがまとにかやうに座をおなしうし詞をかわすもみな他生の縁と申そのはなす事もおほくあるひは役跡もない物がたり、夜日をわかしときとらつすは同じ事ながら日のつゐへとさらいか馬があひたりとて人事そしりてかたりおそぶいせんもない事たがひに罪にありすれども此やうな講談脱法のみまねをいたして一遍の念佛題目もとのうるはまづ悪縁でいなし座興もかどげよもよい事のまねとすいふんしたがよしわるひまねはなるものよい事はうそにもまねられぬつれ、脚にも此こゝろとわいておかれたとふりたさへは氣ちがひが丸はだかにな

つて大道をはしりあるくになるはど氣のちがはぬ人があの狂人のまねとして見せんと
丸のたかよなつて同じやうにはしりまわらばこれもとも氣ちがひといふものあり然
も其心の違はぬなれども形がうおけを先誰を入にしても亂氣でないとはいはぬたどへ
内は悪心があらふともま、身の行ひ心の持やう物のいひやうとまねびて儒者のやうに
身をもて其儘じゆじやといふものなり扱内心は俗であらふともあたきをそつて衣と
着けさ袋かたちでもくびに引かけしやくでうふつて出もころさぬやうな形とては御
出家さまなり誰か俗人といふべきや然れば惡のまねをすれば惡人善人のまねとすれば
善人といふものなりとかくよいまねをすべしよいまねと申たら身体のならぬ金持衆
のまねをなされよといふ事でないせめて眞實より佛法はありがたい物といふ心は
こらずとも身のうへにまねとしてなりとも善根をつむやうの手立と申事なり故に惡心
僧都の名利の二字を拜見し給ひて

世をわたるはしと思ひてふみ見しに

まことの道入がうれしき

とよませ給ふ僧都もはじめはたゞ佛道とそれほど眞のら底からにと思しめさず彼禁中
にわいて紫の御衣などたまはりしやうなる事を手がらにし人々學文者といはれたや知

職となつて人に用ひられたやとひとへに名聞利養に修行し給ひたがいつの間よやら
の佛心にのち心がかひてやれ今までは名利にばかりか、はつて一大事の所をとり
失なはんとせしよと急度心をとり直して見れば今かくのとく大道心の心をあこるはこ
しかたの名利と求めんくどおもふて修行したるがもと、なりぬれば世をわたるはし
と思ひてふみ見しにそれがたねとなりて眞の道に入たるは此上もなきうれしきよとよ
ませられた此僧都さへはじめは名利と心にかけ給ひたとあり今さきの各何ほは後生を
ねがひたてなされてもさあ今其方がくびをさるがうれでも佛道が有がたく思ふかと
をふり上たらばもさやすすきと後生はねがひますまひゆるし下されと申す人多かるべし
すれば身命おしまぬ佛道者後生ねがひとはいはれずもとより今生から劔ふて身をさる
るよといふは今世からなる修羅道じやあう申愚僧などなかくうれはどの信心はおこ
りませぬ其くらぬ成てもひるぬ佛道者はいまどきはめづらしい事殊に名利よさへ後
生とねがふと有はとかくまの命かけるまではちかひ事名聞に成共佛道願ふがまねよき
と思しめしひたもの談義寺参りもなされたがよし又貧きものもあらばはどこすもよし
心くは叶はぬ善根のまねをし給へまねにのてはなしが御さるが次に仕ませよ
○さて一休江州にましますとさるる寺の卒都婆がばけて八尺ばかりの入道よなくとどば

の影に立ちふて居ける下部のものども是をおそろしがり用事とど、のへる事もならず増
 てあたりへは猶參らざいかなる子細ぞと知人もなし或人和尙よかくとかたる一休その卒
 都婆を見たまひけるに文字のちがひありさてはとてやがて改ため書たてられける或とき
 くだんの安齋夜半のころあらはれ一休の前よりひざまづきてなみだとはら／＼とこぼして
 曰我地獄の中に入てさま／＼の苦を受る事たへがたしわれ御僧すみやかに救ひ給へど
 たマ／＼は／＼とくささける和尙のいはく汝圓通より出て圓通よいたる何れの所よか地獄
 ありやと仰らるれば入道あたへて曰いやとくちうを論ずる事なかれた、此跡を見よ和尙
 のいづく其跡まつたく佛性同跡にへだてなしどのたまへば又入道申やうしからは名を付
 てたべといふ一休のいはく本空道入禪定と申さるゝとき其まゝ、靈きね／＼としてうせに
 けり其後は二度出ざりけり一休にとむらわれんが爲よ來れりと曾人申あへりけるあはれ
 なりし事なりけり

○あるとき一休疝氣よてこをいためのびるゝみも自ゆるならず迷惑し給ひいろ／＼養生
 し給へどもいたみやみがたしさる人來りて申やう其せんきは拙風呂がなによりもよく候
 其いたむ所をいく度もふき付れをやはらぎて即時によく候私も此頃せんきさしおこりし
 と風呂にてふき候へは其まゝやはらぎあくる日はゆる／＼と立るも自由にいたし候間御

内の次郎太郎御つれなされるれよ其いたむところをよくふりせ給へどとしゆるにさらば
 とてやがて拙風呂へ入給ふ次郎太郎もともあ入りさてかのいたむところをふけよとて
 ふのせらるゝに二人のものやがてふきにかゝりける其ふきやうにちくしやう／＼と
 いふてひたとうちた、ひてふくときに一休つく／＼とさ、給ひて何どか合点し給ふやら
 んろのまゝ返答に不奉公／＼とこたへ給ふ太郎次郎もふしんよおもひけれども主人
 の事なればいか、と問ふともならずしてうち過ぬある人湯よりあがりゐたすみにおてつ
 く／＼と聞てはらすちをよれり此人わざとだまり居てゐくる日和尙のもとへ行申けるは
 和尙さま夕部風呂へ次郎太郎と違させられ御入なされ候やされば此中はせんきにてめい
 わくいたし居る所へある人のたし／＼にて風呂へ行てとらいたむ所をよくふかせよと有ゆ
 へ夜前湯へ参り候其方は何として知り候ぞいやさる人のいなしにて夕部うけ給り候しか
 れば世には風呂とふくものも多ふかるゝものもおはきになんぞちくしやう／＼とふけ
 ばふかるゝ者不奉公／＼とこたへ給ふはさて／＼めつらしきふきやうふかれやうと風聞
 仕候さやうにふさ又こたへ給ふはいかなる事にて候ぞと申けれを一休すれば次郎太郎が
 ちくしやう／＼といふは合点まゐらす拙僧はもとより畜生にてもなしまたちくしやうと
 りはるゝへき覺へなしとかしちくしやうなるしとぞがもああらば彼らが奉公のしやうが

あしきもえならんさるよよつて不孝公くどこたへたる也とのたまへ此人を送り上り
手をうつて感じけるとなり

○江州堅田の浦に彌五郎といふ船頭一人ありけるれのがわざながらいやしきいとあみや
つれそて一生がま穂の襖楫の枕をそはだて眞の道にうとくして心さしなながらるびすの
九重の花にあそぶどもがらにのせるかれどりれのづからいやしきになれていみじあるべ
き事を露しらすのたくなに尊きれしへをはちくやまざればいとわさましきよすがなりけ
るがつるに身まかりて死よける妻子したひなげく事かぎりなくさてあるべきにあらざれ
を火にやせん士にやうづまんとおなじみけるせめていかなる知識をも頼みて後世れくげ
んをたすけたきと思ふ折から一休風雲の行衛と思しめして浦のかたまねまりて四方の
致景をたのしみておもしろす所に妻子これを見て衣のすうにすがりた、今かやうのあさ
ましきもの、相果候がわはれ御じひをたれて彼もの、後世のくるしみを導きてたまわれ
かし生々の厚恩にて候べしとのなじみける一休よびんよ思しめし何より安き事なり引導
さづけ得させんとて此家にきたり給ひ其し給ふ様おそふしんなれ先々死人と米ごもにつ
いめよとてたのらに入て繩をかけ丸太舟おかきのせ湖水の波にうるべけるおきあいたり
て聲よあげ高らかにのたまふやう

此儀はこれ元來米儀にもあらず豆儀にもあらず汝をかたの彌五郎儀なり
江河よしづんでうろくづのえとなり佛果と得よ喝どの給ひ水の底にぞつ
き入ける是成佛の引導也

○又一休堅田の庵よおへせしとき海ばたへ立出給ひては毎日つりぞたれては魚をとりてま
かりけるに御弟子兄弟の僧達これは不律なる仕合なりとて一休を一問のところへよび入
口々に異見しけれを一休の曰 各 たちは學門をするとて何事をかし給ふや我等は古しへ
の祖師の眞似る禪宗の學問と心得たりしれば例なき事を仕らずいで古の例を知ら
ずば見せんともとより給ばきやうなり蜺子の海老とつり給ふて喰ふ處をありくと繪
に書一首の歌をか、れける

いにしへのかじこき祖しは蜺と釣し

我はあほうて魚をつりてくふ

と遊しかの僧たちにし付さあらぬふりにて居られけるみあくかの繪と見てよても奇
容なる繪や見事なる歌の書ふりやと感むける其中にての老僧あざわらひ古の祖師の蜺を
釣参りしとて貴僧の若きなりにて魚をつりまいらんを鵜の眞似して鳥が水をのむといひ
し類なりさて貴僧はこの蜺子和尙のえびつりてまいりし御心機をしろしめしけるか中々

及なき事やと笑ければ一休少しもさばがず色をもかへずさて、貴僧の愚なる心よては
 観子海老を喰し心根がてんはまゐるまじそれ人は若にもよらず老たるもよらず道にお
 つて老若はあゝあるまじ老たるが悟道せば門外のひく犬も悟道すべし世尊は三十成道と
 け給はる我等が祖達广大師のいにしを承るにゐる時般若多羅尊者の來り給ひて光明か
 くやくたる壁とさへげ三人の皇子に見せ給ひつゝ心とためさんとてれの、此玉と寶と
 したまはんやと問ひ給ひまとき御兄二人のこの壁にまざるたからは又あらじとの給ひけ
 るに達广大師の七歳よて一の乙皇子なりけれども此玉の世實にて實にあら老智光の珠こ
 そ又なき寶なれとて彼玉となげうち給ひければ尊者れどろきかゝるいとけなき身にして
 ふしぎなる人かなとて則樹名と達廣と付られけるはじめと菩提多羅と申せしとかや達廣
 とは萬事に達し通じて見がき立たるやうなる人なりとの心とかやしかれの悟道は老若に
 はよるべからずと一休手を打て彼老僧が異見の拙きを笑ひ給へは老僧も人中よて込付ら
 れ赤面して申されけるはかる口にまかせて申されたり如何に口ふてはいふとて必をさ
 もなきものなり貴僧の實正観子のわびまゐりし御心根としり給ふの一休答へて日中々存
 知たり老僧申さるゝは各いかに思しめすそれ禪宗を以心傳心なりいかで観子の御心か知
 るべき観子の心は観子ならずはしりがたしとあざとらへば曾々尤と打わらひて観子の

心はながく凡人のしるべきにあらざまかし一休は観子となりて御覽しけるか一休少しも
 おくせず扱々れの、はれろなる事をのたまふものかな我等の観子にならねども観子
 の心はよく知りたりと宣へはみな、それはうけがたき返答ならん一休されはとよおの
 くは此一休が心になり申れねを愚僧が観子の心になりたるかならざるはしれ申まじと
 大に笑ひ給へはおの、藤咲門にてよげられけるとあや

さて愛と善惡とも真似によると申事の御はなま申らうある人會我ものがたりの淨る
 りあやつりと見物に行き彼十番ざりの處がおもしろしとのみ思ひこん、彼五郎十郎が
 助經を討た所が不斷目に見ゆるやうにあつたとき日頃念頃なるものひとりさたりて
 酒に夜をふかしてつひそこにて前後としらす高いびきしてねるよ此十番切のすき男
 居ねむるに目がさへて寐られず折ふし彼夜うちの五郎十郎が淨るりをおもひだして
 ひかしの祐經がうたれまも此とくね入つらめなぐさみに兄弟が討たるとよろを仕方し
 て見んとふつと起てあたり刀脇さしゐるにまかせ兩劍さめて其方は工藤でとないか
 我こそ會我の何がしなり親のかたきのがさぬと刀をすらすらとぬきながらね入たるもの
 討は死人をきるに異ならずかくもゆたうにゐるものか覺悟せよと枕元の縁おどりのあ
 りつてふみならせば此男目と覺し南無三寶とふんせしもせず、げ行て次の間の屏風

の間に飛かかれてふるびくさしのどき去とては人たがひならんさらく身に覺念なし我は生たる鼠一疋ころしたる事侍らずと手を合て色青く其興を覺せしかほと見て此男もをかしさかきりなく是はあやつりのまねじやと大笑ひになつた各くはにせしめるが此たどへなりかたきといふは八万四千のぼんのぶの敵つるきは念佛題目の利劍也かの煩腦の中の大将無明や元品やといふ敵めは聲聞や縁覺といふ修行者さへ手に余りますましてこなた方の千人万人乃勇力では行ぬ事じや是が行くらしいならば何れもまねになりとも名聞に成とも後世をねがはせられよ善人のまねをし給へとは申さめどもそれが行ぬふせめてもの事によいまねを止めされよまねに成ともとれば今の如く人たがひておざらうときもとつふす敵もあればどころでは功をつみ徳をかさねて名聞の中より眞實の道理があらはれて眞の道に入事が有ぞと申事を悪心僧都もくれく仰られし事なりさて眞似にも物事さまく多ければも此やうよ經文のいしくれでもよみたり聞たりするまねが其中ではよし少でもわるひまねなごせぬがよい世話よ佛のまねはすれど人まねがならぬといふ金持どのや位高な衆のまねれのが分に似合ぬまねがならぬといふ事じや今の眞似といふは其やうなけつかうな形すがたのまねではなし只心内とあしく持つかたちによき取まはしをうつせといふ事をうたよ

かまごきにうつせばなせおうつらならん

花の色なる山ふきのいろ

どよみたるやうにうつろふす又まなぶと思ひ品形をめんくの生付貧福は過去の業心ばなごかしくこきよりのしこまようつさばうつらならんと書たるとよく心得て眞似あされよと申事也今の聞まがひなきやうに身を持給へ又まねよ付ておかしきえなし次に申させう

○爰に一休の時代に越前守備門尉親當といふ人ありけるが禪法よ身とやつし心をなやましけるに一休の發明なる事をき、及びて導師とたのみ奉るへしとてあるとき一休の草庵へたづね行樂の扉をほとくたぐよ折節和尚出たまひていかある人ぞと問ひ給へはいやくるしうも候はず佛法修行の大俗まわりて候と申されければ一休はやとひたまはく

なんぢはいづくの人ぞ

答曰 和尚と同國

國には何事も侍らぬか

鳥はかうく雀はちうく

こ、はいづくとかしるや

むらさきに染たる野邊

いっんどしてか染けるや

尾花朝か紅菊紫蘭

ちりての後はいかん

宮城野がけら

原には何事か侍る

水の洗れて沈々風は吹て颯々

よき哉やまれくと請じ茶をまぬられよとて

なにをがなまぬらせたくそおもへども

達一宗には一物もなし

返歌

一物もなきをたまはるころこそ

本来空の妙味なりけり

と申されければ一休のたまひけるを聞及びしより蜷川さのには道心者なりとて感ぜられけるさて四方山のはなし過て親當申されけるは少し承りたき事あり邪正一如といふ心得はいかなるがよく侍るや一休聞給へとて邪正一如の心を

生れては死ぬるなりけりたしなへて

しやうもたるうもねこも杓子も

又問空即是色といかん答へて

しら露のれのがすがたは其まゝに

紅葉よればくればぬの玉

又問色即是空の心は

花を見よ色香もともになり果て

ころなくとも春は来よけり

又問世法はいかに

よの中ぞくふてはこして寐ておきて

さてろのちにはじぬるばかりよ

又問佛法とはいか成心得をよしとし侍らんや

佛法はなべのさかや石の露

繪にぬく竹のともすれの聲

と一々問ふ言葉の下に歌よみてこたへられければ親當舌をふるはかして聞及びよりたけき活僧かなと頼もしく思ひければいよく道を示したまはれいつまで語るも濱の真砂のかすくなれば先御いと申すとしてしほり垣の邊まで歸りけり手がはたとうち立歸りて一大事の安心わすれたり佛にはいかして成けるぞと申ければ一休きやつはくせものゝ法と思しめしそれはいと易き事也とてふんぞりかへりて目口をひろげてらくして佛に○は侍るほどのたまへば親當れどろき活大禪師かなと心空及第してころかへりける

○一休和尚と奈良のたき木といふ處に折々はたてしきす其邊の村々は近衛の、御領地にて有けるが左近尉といふ家老百姓をひたものせぶり取けるに百姓どもこれとなげきていかせんといしめきあへり其内老人申けるといかよ百姓よあたりきつしとて武家とははるか違へし御公家の長袖なれば訴へ申て見んとて訴状とたくみける所へ折ふし一休鉢をひらきに出給ふ百姓ども一休を請じこの訴状と御書下されよとたのみければ安事ありいかなる事ぞやとのたまふよしかくの事よし申ければ長々しき状までもなし是をもちて御館へさげよとて

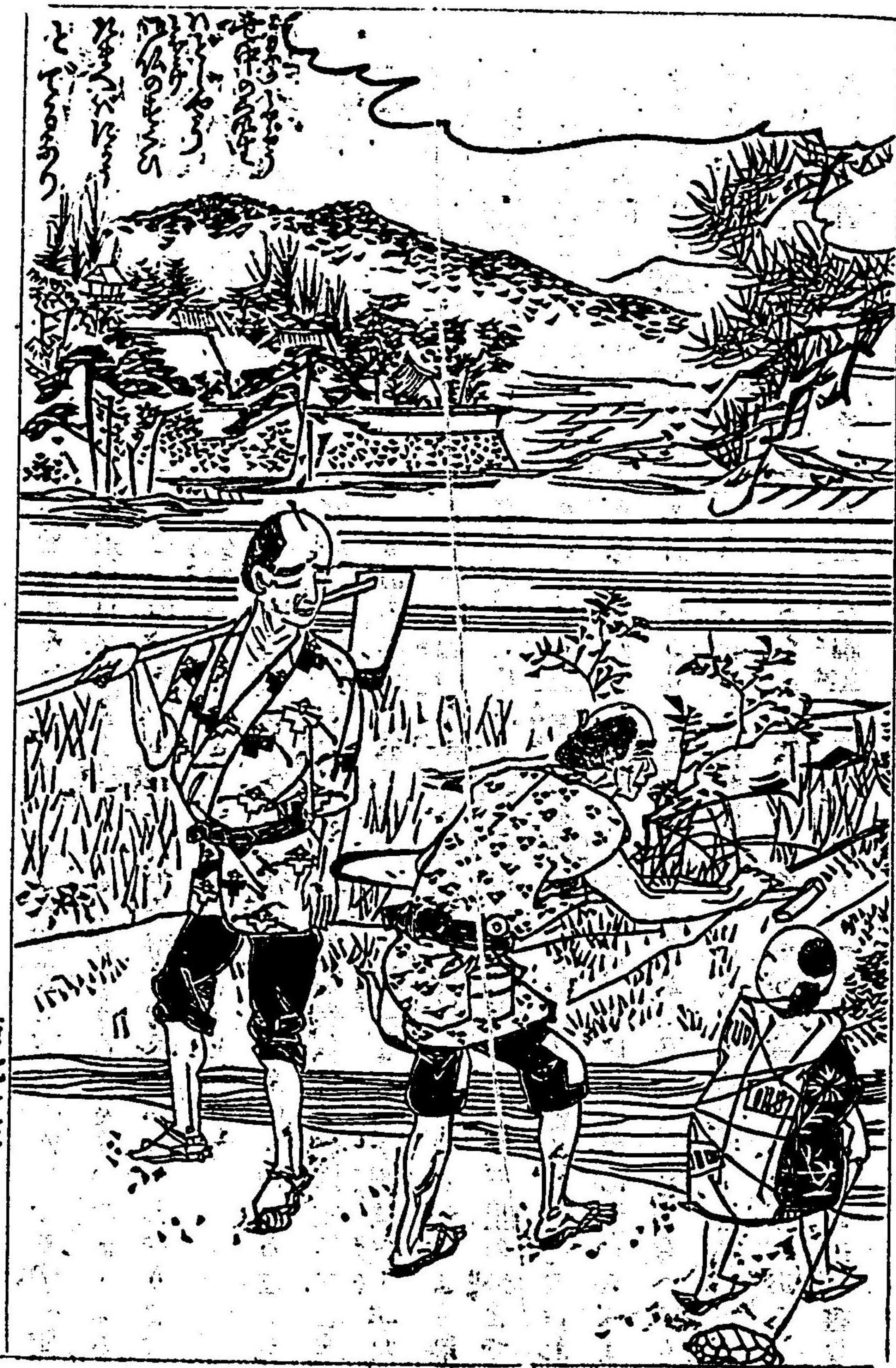
よの中は月にむら雲はなれ風

近衛のよは左近なりけり

とよみて是をさらしとしたり、めつのはされければ村々の百姓かゝる事よて免多くたまはる事思ひもよらずと申ければ一休ひらさら此歌とのみさ、げよと仰られて歸り玉へばせんたなくこれを御館へさげければこれを何もの、よみけるぞと仰出さるける百姓申けるは薪木の一休の作にて候と申せばその放者ならではある事いはん人今の世に覺はずと興じ玉ひて多くの免を下されける

さてこれをけたるはなしなれをもある座頭かよ所て山椒にもせたるがたかしさにうりさ

きたればさかじき男居おせわたくしうめをわして見せませうとて手元ありしやんしやうを二三の口へいれてひとつたつしわぶきして口をどがらし目と白く黒くなして舌とすゝるうちに此男誠をむせて息を内へをかりして水と〜といふさへ思いですころりぞこへたとれて目を見つめたるは一座ありしほのものの誠にもせたるとは夢ぞらしらすてもよくにたり眞に物のまねが上手きような男じやうつりすすいやく〜とほめて心にはあまりながきまねじやどがもふうち術の中へこけまろひたるにもまたわきよりはまねと思ひたるに越えてこびんをやきあまつさへじまんのほうひげけむりとなまたる跡を見て是をまことにむせたるやらんとはかまみなくれたどろきて氷をのませ熱もちひてよびつけしがやう〜の事よて息出まつあたま灰だらけなるを打ばらひなどしてさぞやゝるしかりつらんと笑止がれば彼男へらず口に何とあまり眞似がねんいりて眞心のくるしさに面目灰にまふし申たと秀句に〜大笑して座とたちました其頃の近邊に此さたばかりをなして笑ひしとなり先此やうなまねはとんといらぬもの今どきの若衆はとかくいらざる役者またはものもらひの眞似をなし給ふ同じ口てんがうならをよみもの切りしでもあそこで一日こ〜で一日聞て庭訓往來山高きが故に貴方ふ向て武道勝利を得ざる事子程子のいはく孔子は大學のいふしへをんぞ



此の山は
 昔の山に
 似て居る
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある



南の山は
 昔の山に
 似て居る
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある
 といふ
 人もある

たとへ取集めわけもなふよめどもかやうの口てんがうへ聞安し扱はうたひでも衆一町
て十番はどうとふくらわでも余の口まねよりはきよしのりうめふもよい真似となさ
れよと申事也のやうの事は子息ものときから親たちが心得てやういひきかしやりませ
先入主人と申て子息ものとき覺たるはとしよりてもわすれざるものなり

○一休丹波路へをもむき給ふある山里に二三日とうりう有けり在處のもの、申けるはいの
またびの御僧この郷境二町ばかり南郷よ天合の寺の候が此寺夜るになればすさまじき
家ありて色々ふしぎなる事どもあるにより我すまんといふ坊主を其子細は去々年た
びの僧たのみどきたるに法方より三年忌の卒都婆をたのまれ此坊主の書たるが其より時
ならず火焰もゆる其火の高き事一丈ばかりあり郷内は申に及ばずけん郷二三里の外まで
も其かくれなしされば其坊主もさまじく經多羅尼を修じとむらひいひのをもしるしなけれ
ばいつの頃の此事のすかしくや思ひけん夜ぬけして行方しれず故にこの里の女わらへよ
るにもなれば恐れて門せせへも出られず其のち或坊主を入置まに是も三日とこらへずし
て又出られ其よりわれ住せんといふひじりなければおのまのらあき寺となりくちばてん
まを惜う候へ是はいかなる事にてやあらん一休間給ひてやうの事はいか様もあると
也とれば別の事にてはあるまじ定て卒都婆の文字の書ちがへしゆゑあらんれがし書な

はし参らせなば別の義あるまじさらば同進申さんとてくだんの寺に行見給へば法華經要
品なりあんのとく文字一字ちがひありあらため書直し給ふ其文字にいはいく十法佛土中唯
有一乘法無二亦無餘佛方便説とかきこれと立てられよかかねて子細はあるまじとて和尙
はるれより西國方へころさし給ふ其後は此寺無事になりけりひとへに和尙を神佛乃
化現なりいはぬものなかりけり

○又丹波のそのべより三四町南の在所にかめどいふ女あり母一人に有けりうの三四軒と
なりの喜八といへる者の方へかねて縁付のやくうくありしに或者いかなる意趣やありけ
んさまじくいひきかして契約返がへさせて隣郷よりあるもの、娘をよひ入けり此女これ
を無念にたもひて病となり終に死たりしがかの喜八なるもの、かたへ亡靈よとにきたり
て恨よのべ喜八の首をしむる事たびくにして其恐さうざりなしなからりのむかへし
女もおそろしくて親里へにけ歸れり喜八が親類此事をなげき神子山ふしをたのみてさま
じく祈禱となすといへをもさらよ止ざりし折から一休國部よましますよしをきよて此よ
しをねがひしに和尙破地獄の誦とるきてこれを喜八が首ふかけねるべしまた家のうちよ
はるべしとのたまふと教のまゝになしければ其後ふた、ひ亡靈きたらざりしとなり
○又叢務三木の郡より二里ばかり奥の山里を修行し給ふに在所のめんく申けるは修行者

には何國より來り給ふ人ぞ此邊は草ふるき山なれば元より佛とくやうする事なればま
 して御僧なぞには一鉢の慈悲をほどこすといふ事もかつてしらす職に今生の罪人といふ
 は我々が事ならんわはれ是にしばらく逗留まじませかし一偈一句の道理ともうけ給はり
 活佛にこそならずともせめて死佛ともあらばなほいひて四五日もこゝにとゞめ置けり一
 休申さるは是より北にあたり松林の見は候い成るところにて候や在所のものこたへて御
 尋なくとも申上たき事にて候わの林につきて御物かたり有抑わの林のうちに古寺ありし
 あるにむかしより變化ありて其形何ともしれぬもの三人出てよなくれどりくるふいか
 成法師にても三日と住せずして立のく也此寺古來より由來ある寺よて本尊は一刀三禮春
 日の作とやらん申傳は候也尤什物もあまたあるよしなれどかの變化にてたれか住せんと
 いふものなし御僧貴くましますばあはれ變化をもしりぞけ給ひて此寺に住したまはこ
 れにすぎたるよろこびなしとくそしく語りければ和尙き給ひそれある一だんの望とな
 り佛道修行もさやうの寺をどりたて、こゝ本意申べけれいづれもたのみ申すのやなく
 肝煎られ給われとのたまへばいづれも大によろこびてやがて同道し彼寺にもさきひ和尙
 ひどりを残して皆々にげかへれりしかるよ其夜五更もなれば聞しふたのはず人音して
 三人の變化出きたりおどろくるふ一番に出しはげものがうたふをきけば

東野のばつらいとしい事やいとちくともおもひもせいでせはぬいそんじあ
 しうちをりて終ははのべのつちとなるく

又二番目の化ものうたに

西竹林のけい三すくはあるあひもなきのたわようまれ人のなさを得かうひらで
 竹のはやしにひとりぬるく

又三番目の化もの歌に

南池の鯉魚につめたい身やな水と家ともじきともすればいつもぬれくひやく
 どく

どうたひひたものかどりける一休一々合點したまひ何さまやつらと一りげん事やす
 かるべしと思ひてさて夜を明し所の人々をよぶよせ變化のやうをかたり先一ぱんに東野
 のばつどいひしは是より東の野原ふ馬のされかうべあるべし又二番は西のやぶのうち
 三足のにとりあるべし三番はふれより南のたよ池ありて其うちに鯉をむべまされと
 取築め給へとの給ふはどは人々ふしぎにれもひそれくさのし求むるに其ものみなく
 わり一のは一休其品を葬りて請經し給ひしかば夫よりいつて怪しき事あく一休すなはち
 しかるべき僧と住持せしめ和尙をなほく奥へと心ざし給ふよつて今にいたるまで一休

を權者といはぬものをなき

さて今ばんの要義は妄語戒のあらまし講談いたし申さんとて妄語とはみだりにかたる
 ことよみてうろつく事といましめたまふなり經にはく妄語の罪衆生をして地獄畜生が
 きよ墮してくるしみをうけたまへ人間に生るれば二種の果報を得る一は多誹謗せ
 られ二ツには常々他人のためよたぶらるるさるとあり此心をうそとつきたるものは地獄
 にれち又餓鬼道にれちさて畜生にうまる其わひた十年ならず三十年ならず百年二百
 年ならず何千何萬年といふ限りなき間此三惡道とへめぐりうれよりやうく出てたま
 く此世にて念佛の聲經をよむ事をちよつと耳にふれたる功德によつて人間道にうま
 れきてうれしやと思へを今の二種の因報とは誹謗せらるるといふて誹もそしるとよみ謗
 もそしるといふ字にて人にひたものをしらるゝむくひを得二ツふ多く人のためにたふ
 らかさるゝを切てはの盜人めに何れかのとだまされかせわかされて手に持たるものも
 人よとられ當分我が身の上き事と思ひて談合にのる程の事皆かたりにあふて損をする
 又しても身財を持つてこなひてはたほれ手に取事も大はつよなりつねに身をくづして路
 頭にたゞすむ身となるを多人のためにたぶらかさるゝとは説給ふなり何れもこれを聞
 たまへうそと付て當分人とならすとはねもへともむくひか習ひのが身にむくふてあた

まのあがるものないはみな大ききなうそをつく故に物と持があかぬ事なりありそめにも
 つはりさいをぬやうにし給ふがたしなみ是も付て商とわしやる衆のふしんがぶなる
 うそをついて當分後生がわるからふなら私どもは得うかまをまひとあるよりそれ
 も又なせよとへはされを商ひといたまからはたとへ五十目いたす物も六十目とも
 七十目とも申あはらじい田舎男のあれを此男をぬかずぬくものは有まひと思ふて
 十匁のものを一貫匁といふがけて九百目はどに直を付ても未ふうくらしきか商をさ
 として思ふかけてまけるふりをいたし切同し都回國同いなかの内にて商の功者の行
 程此やうなうそを申かけ又其外人のしらぬ内證算用わひの所でもわれながら是はかい
 て出るほどなうろじやがとぞんじあがらすぎはひの事なれば申さねば堪あらずさて今
 晩のやうなる妄語のいましめをうけ給はれをこわいすさまじい罪を得ますなればこれ
 は何とも了箇にあたませぬがとぞんじを談合なされ下さりませあんたかといふ
 人がみざる此ふしんにもなふて叶はぬ律義ないひふんで侍る此うそ罪にちるかなら
 ぬかのせんさくは明曉いたして聞せませう

○さて又設州は榊原兵内と申武士あり久々わづらふて醫術と尽すといへどもさらに其しる
 しなし殊に重病なれば最期近づきぬ折ふし一休知内よましますよし其かくれなく内々殊

勝なる御坊のよしき、及ばれいそぎつらひと以て此度りんじうの一大事をまきのせ給ひてすぐなる道へ引入たまは、有がたかるべしと申つかはしける一休閑しめしとれこそ易き御事なりとて其まゝつらひとつれて参らるゝ和尙とりつくらふ事もなくやぶれ衣よやぶれ紙子の所々はのりはなれさながらとびの身ふるひしたる風情もこれよりまだまじならんといへる風体にて病人の問近くより給ふ家内の人ども日頃さゝをよびし僧なれば何さま成佛安心至極のむねを聞べきと我もくゝと次の間につめかけかうべをかたふけ耳をすまゝてきく所も一休なにとなく病人の耳に口をあて、大音にて曰ふは

汝すでに末期や我も行人もゆく只これ一生は如夢 如幻

とかくいひすて、かへりたまふ何れも勝手には一門家の子あつまつたもくゝめづらしからぬ一休坊主のすゝめあるな夫りん陸をすゝむるといふ事は成佛かんじんをいひきかせて心安くをばらすをこそりんじうの一大事とすゝむるといふものなるにかゝる師の坊主のいふ道もなき僧がんせんお人といふ事なりとて一狂の坊主かち口々に中へりかゝる處へある田家さたり此よしとさゝいやくゝそれと何れもの不合点なり一休ほごこそ候へかやうの時ころいかふも殊勝にとぼへ候惣して禪宗悟道の坊主など、いふものゝ余宗なきのやうにあるひは念佛題目ととなへ尊ひところへ御参りゆれありがたき事のそ

はするおとゝいふ事は禪僧なんせと申さぬ世いかどもくゝ右のすゝめとめじやうやと申ければいざれもはじめてさもころと得と命なし皆一同にんじけるまで御内よ思を深くかうむりたるものども御さいおの願死の面々たれゝなるを其用意とりゝにひじめさけるを一休はのるにき、給ひて其夜門前に一首の狂歌をたてられける

世の中に生死の道にづればなし
たゞさびまゝも獨死獨來

明れば御内ものこれを見付てさつそく老士へもち出て何れもうちよりいかなるもの、立つらんとせんぎしける折から又かの僧申さるゝはこの作者別人ならず一休禪師に必定せり實尤の狂歌かな此うたのみを人いひとり来てひとり死する身なればたとへ誰のれ冥道の供をすればとて便よはなるべけんや五十人百人殉死するとも自業自得過なればめんゝの罪障より百人が百所へわかれ行て主人に付従ひ行ものにあらずさればあたら若者どもと殉死なさせんと歎きて此歌を立られたるならん今殉死せん命とまつて世繼の君を守護なし給ひんこそ御家長久ならんと理と尽して申されければみな此障に同じつゝ、かさねて殉死のさはなかりけりされば死するに定りたる面々は一休を活佛と尊みしは斷りせめて道理なり

○爰に一休津の國の山里を通り給ふに二人の山かつ有一人と伏倒てあり今一人を烟をうつ
 父子なりよりて見給ふもむすこ毒蛇のためよさされて俄に死たり父なげくけしきもなく
 一休にもかつて御房そのおとする道のほとりに小家有これ我等の内なりそれよりめしを
 持きたるべま只今息子は俄に死したりさすれば一人の食ばかりもちて來れと申てたべと
 いふ一休ちかくより給ひてそれ父子の別はかなしかるべきがいゝなれば汝はなげきの色
 なきごととひ給へば男こたへていはく親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意を親子のち
 きりて鳥のほるはやしにより合て夜わけてと方々へとびざるがとくわづかのちぎりの間
 なればなげく事なしといふ心也一休それよりおしへの家へ行くだんの通りと女房につぶ
 さにかゝらるゝ扱はとて二人のこしらへ置し食物を一人分さしたき只一人のばかり持て
 出る一休とひ給ふは其死たるのなんぢは爲にいかにとはれければわらはかためには
 夫ありと申て少もなげく氣色あし一休仰けるはそれ世の中は死るといへば他人の身とし
 てさへおはれをもよふすよまゝして夫ならばかなじかるべし殊に女性にはかなきものなれ
 ばいかもあるべしととひたまへば女ごたへていはく夫婦契市人行合要事過方々如散とこ
 たへて行過けりこの意は夫婦のちぎりは市により合てようをといふべしはれをめんり
 方々へちるがととしがらへるふべきものよおらずといふ心なり一休もふじぎの思ひをか

してさてもかやうある山家にかゝる生死無常のこととりをよくあきらめたる男女もあり
 けるよと感じ給ふ

さて前夜おやくく申た先うそといふにさまゝとござる其品々から申ろるへて一々道
 理をもつて了簡いたすのへすゝ此所をきくほど萬事に通ずるらんもんのところくど
 けれども心をしつめてきゝ給へそのくの徳に成て永々の苦をぬける善根耳のあかを
 ぞつて、うもんわれ先釋迦如來世に出給ひて一切衆生に法ととひて聞しめ給ふ物して
 説法の義式で先禪定よ入て今は何をとひて聞せたものであらふと分別なるに如來の
 御心には手みじかに三界唯一心の道理をといひて聞せんと思し召れてとじめよ華嚴經と
 いふ願大の教しねととひて聲聞緣覺に説きかさしめたまひければをしつんぼのとく一
 さい合点せすろこで佛のちもひ給ふは眞實のむねととひて聞しめては結句衆生等が合
 點行すさらば氣に入やうに何ぞ方便をといひて佛のころには思しめさねども先嘗分の
 氣に合して何成ともつべくと口にまゐせてはしちかなる事を取付て無事を有と説あ
 る事を無事と説て見たりまたあるでもなしないでもあしとときもかしの物がたり今の
 はなしのやうよ作りなして五十年の間御とさなされた今時の人もさかしき評判にもい
 かに佛の御とさなされたとても是をあまりなうそとつかせ給ふといふ人もありうりに

さまざまありといふがこゝじや先佛のうそを今のやうに人機よ合せてとにも角よも衆生の爲の事によかれかし佛になれかしよき心がれこれかしと善根すゝめの爲に御ときなされうるといひながら其うろの御かげよよりて三界の火宅を出るはしとなり生死のうみをよゆる舟となりてつねに極樂や寂光土や實報土などいふけつこうなる世界へ生て苦をまぬかれて樂を得る爲のうろなれば先是はけつこうやうそでは侍らすや然ふ世の中のうそといへば人をたふらかしてありともかたりてありともれのれか爲のよきばかり心配りけて先さまの身体がつぶれうともくびをさられうともかまはず他の害になる事とかへり見ず其ものゝき乃つぬぬやうにうろをつきてたらずを世界のうろといふものなりうそといふ名は同事でいかふ心持のたがふ事は天地黑白のさうおが有と、と分別して見れば佛も人のよくなるやうにうそを説ねしの身にかゝはらず又ぼんぶのうそは己を立んとて人をたれすとれちがひがあるを格別のせんさくさて商人のうろに先かけ直の事たゞし是は何と買者も見せにたちよるから覺悟して定て商人のくせかけ直をいふて有ふほどにこちららもよいかげんに直ざるへしとたがひに合點づくなれば先にも少し合點しぬかる事てなま然は是はかけ直と知りながらの上なれば世中のうろのやうにだましたぶらかすとばちかふて有世のうそハ之をしらせぬやうつく

なりまたある所の見世よは合點づくのとなればこそかけ直なごうら直をしと書付しておくところもあり其外はかけねかあるに極るうへは少しもうそといふ物てこないほどにかまへてうろどれもはずとも随分とかけねいふて利をえるがかんやうなりなんぼ正直に商しても利がなけれを妻子をはごくも事ならず或ひと且那に損かけ拂ふべき所へもはらはずとなるがうれが結句大うそとなり大なる罪となりて人のうらみとくる事もくせん也かく申てもみすく生馬の目をくぢるやうな事余りなればかけ直といふほどはめんく商ひする人のこゝろもちかあるべきと也と出家沙門など高利をとれば珠數のみとてそのまゝかへりて其家滅す此わかきくらきを思案して渡世のための事なれば未來の事はさづかひなし物じてがいにならぬ事なり人の爲になる事嬉しがる事おかしがる事面白き事心のやはらく事は少くも罪みにならぬほどにとかく悪ひうそをつかせらるゝなどのいましめておざるまた武士あごには謀計など、申事ゆり是は又別義でおざるがこれの追ておはなし申せう

○一休伊豆の國にてある山人猿を一定とらへ柱にしぼり付をさけなくもうちたゝきすでに打殺さんどすべきところへ和尙行あはせふびんにおもひ乞取てはなしやりたまふ折から夏の頃なりしが藪夕ぐれにくだんの積いちぶといへるものをふきの葉よ包みもち來り